
流星の行方

葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星の行方

【Nコード】

N6090N

【作者名】

葵

【あらすじ】

突如出現する次元の歪みから現れる怪物に恐怖する世界があった。“神”により与えられた技術により作られた、怪物に対抗するための“人”に似た姿をもつ兵器“ヴァリス”。それ選ばれた人間が搭乗することにより、何とか平穏は守られていた。

だが、歪みに異変が起きるとき、その作られた平穏は終わる。そのなかで、ひとつの“流星”が地上へと落ちる。その世界のどこにも存在しているはずのない圧倒的な力を持つその星は、完全な“人”の姿をした、機械兵器だった。

その星がもたらすものは、平穏か、新たなる戦乱なのか。

プロローグ～果てない時の中で～（前書き）

ロボットものですが、それほど硬派なものではないつもりです。
どちらかといえばファンタジーの要素が強いかもしれません。

初めて書くジャンルなのでいたらない部分も多くあるかと思いますが、どうかよろしくお願いします。

プロローグ～果てない時の中で～

目が覚めると、見慣れない白い天井があった。
真新しいシーツの感触に、ここが自分の部屋でないことを思い当たる。

頭を少し上げて、部屋を見渡すと、カーテンのされた大きな窓から光が刺しているのを見て、今が昼間だということを知る。

徐々に蘇る記憶を辿ると、確か最後に起きていたのは夜ではなく、今と同じくらいだった気がした。それほど時間が経っていないか、と一瞬思ったが、体のだるさを見ると、昼間から昼間まで眠っていたのだろう。なんだかここ数日は寝ても覚めてもこんな感じだった。余程疲れているのだろうか。

起き上がる気力もなく、目を開けたままじっと天井を見る。シミひとつない白い天井は、逆に不安になるような、落ち着くような感覚がする。

しばらくそのまましていると、部屋の外に足音がして、ドアが遠慮なく開いた。あまり動かしたくない頭を動かしてみると、ドアを開けた人間はそのままでもいい、と手を挙げる。

「よお、カノン。元氣、なわけはないか。」

だるそうなこちらの様子におかまいなさそうな声をかけ、相手は自分が寝ているベッドの脇に座る。

あまり動かない頭は、それが同僚の人間であると知らせる。こちらは愛想笑いも浮かべることが出来ない状態ではあるが、相手はそれをわからないほどの無神経ではなく、かまわずに持ってきた紙袋を見せる。

「一応本を持ってきたんだ。古いものもあるけど、お前にやるよ。元氣になったら読んでくれ。」

食べ物はまだ無理だろうから、と続けそれをベットの隣の棚に置

いてくれる。

「、助かります。」

この部屋に来てから出していなかった声は、予想以上にかすれた情けないものであった。それでも、同僚はちゃんと聞いて笑ってくれた。なんだかひどく安心をした。よくは、分らないけれども。

「他の奴らは用事が入っていてな。落ち着いたら来るだろうよ。」

それを聞いて少し残念にだったが、同時に早く治さないといいないと考えた。本当は寝ている場合ではないのだ。自分にはやらなければならぬことがたくさんあるのだから。

穏やかな風を呼び込んでいる窓の外は、ここからは見えてはいないだけで、騒々しいことになっているのだろう。自分の助けを求めている人間は、少なくはないはずだ。

目の前にいる同僚も、きつと時間を作ってきてくれたのだろう。よく見れば、少し痩せた気がする。

ここ最近の外を知ることができない状態であったから、余計に焦ってしまう。

そこまで考えて、同僚は顔を覗きこんできた。

「焦るなよ。そうしたってまた倒れるだけだ。来るんなら全部治してから来い。少しでも病気残してたら叩き帰すからな。」

どうやら、全てを見透かされていたようだった。反論の余地もない。彼の言葉は正しい。

了承の代わりに少し笑うと、同僚は笑顔を浮かべ、元の体勢へと戻る。

「ま、新聞くらいは持ってきてやるけどな。いつそのこと、お前が治るまでに終わらせちゃうか。終わったらさ、お前が行きたいところに行こうってみんな話してる。海とか、山とかさ。俺も国にお前に見せたい場所がたくさんあるんだよ。」

その言葉は、たとえ望みが薄い状態でも嬉しいものだった。本心から言ってくれているのは分かっていった。だから、だ。

しかし、嬉しいはずなのに、何故か眠くなってきた。あれだけ眠

っていたはずなのに、不思議に思いながらも、無理をして起きていることもできそうになかった。

「お前の住むところも確保しないといけないしなあ。決まるまでは俺の家に来いよな。広いから何とかなる。」

それは楽しみだ、と思いながらも、瞼が下りそうになるのをとめるのが難しかった。

ベッドの向こうにある窓を見ながら話す同僚は気付いてはいない。自分も、彼の話を止めたくは無かった。体がひどく疲れている気がする。これは無理をしてはいけない、と思う。早く治すだけでなく、体力の方も考慮しなければならない。

やることはたくさんある。ここで倒れているわけにはいかないのだ。

そのためには、今はこの眠気に逆らわないほうがいいのかもしなかった。

「なあ、お前は山か海、どっちがいいかな？」

これからの展望を次々の述べていた同僚は、ふと思いついたように問いかける。

その質問には、何とか答えようとぼんやりした頭を使う。

「そうです、ね……。だったら、僕は、海に、」

その時点で限界だった。

瞼を閉じると、まるで暖かいところに沈んでいくような、感覚と共に、意識は闇へと落ちていく。

こんなに安心した眠りは、生まれて始めてだった。

考えることができたのは、そこまでだった。

第1話『始まりの星』

『夢を見ている。

彼らは、夢を見続けている。

忘れられた存在となっても、いつまでも。

忘れられた場所で、今も目覚めるときを待っている。』

その場所には、誰も住むものはいなかった。気候も穏やかで、あ
るのはどこまでも続く海と、生物が何も住まない草原だけである。
しかし、そこに訪れるものは何もない。今の空は晴れ渡り、海の上
には巨大な夕月が浮かぶばかりだった。

その静かな場所を、蒼い装甲が特徴的な“人型”の機体が飛行し
ている。だが、その四肢の関節は鳥のそれのように折れ曲がり、頭
部にあたる部分には水晶を思わせるようなカバーがはめられ、その
奥には闇に浮かぶ星のような単眼が輝いていた。それは短い手の部
分に長い銃身が特徴的な武器を構え、同じく飛び回る物体を撃ち落
していた。

それは命中すると金属的な悲鳴を上げ、真下にある海へ落ちてい
く。しかし、相手はそれだけではなく、仲間を殺した蒼い機体に向
かって恐怖の欠片もなく飛び掛っていく。

誰もいないその場所に、あるはずのない“歪み”は出現した。上
空に、肉眼で感じることできるほどの違和感がある。渦巻きのよ
うにも見えるそこから、次々と大きな“生物”が現れている。

この星にいる虫という生き物にも似たそれは、鋼のような装甲を持
っている。

「ついてねエ」

蒼い機体の内部で操作をしている人間、レインは遠慮なく舌打ちをする。身体を操縦するために特化させる特殊なスーツに身を包み、頭部はヘルメットで防護されているものの、一瞬女と見紛うかという容姿は隠されては居ない。しかし、苛立っている様子は品とはかけ離れており、スーツのラインとともに、彼が立派な男であることを象徴していた。この世界に数えるほどしか存在していない特殊兵器“ヴァリス”。それを操縦するレインの手は苛立っている様子に感化されることもなく滑らかに動いている。虫に囲まれながら、レインは数時間前の自分の判断を悔やんでいた。

突如出現したあの“歪み”。それに対処するのは初めてではなかったが、一人で来るのではなかった、と今更な考えを頭に巡らせる。ヴァリスの周囲には、暗緑色の全く違う機体、通称“プロシオン”が何機が存在している。頭が凹んでいるような奇妙なシルエットをしたそれは、同じ“人型”兵器ではあるが、その中に人間はいない。勝手に判断をし、自ら動いているだけだ。反乱などの対人での使用においては劇的な効果を上げるものの、同じ大きさでなおかつある程度の知能を持った相手に対してはろくな効果はない。レインが借り出したときには十数体は居たが、いまや片手で足りるほどしか残ってはいなかった。

明らかに、いつもとは違う。それをレインは肌で感じていた。いつもならとくに“歪み”は消えて、後は虫を殺すばかり。しかし、今でもそれは消えることはない。大きくなっている気もする。

一応基地には救援要請を出しているが、それまでに自分は存在しているのだろうか、という冗談にもならない気分になる。

「逃げる、か？」

完全な逃亡ではない。調子を整えるための退却だ。明らかにレインは冷静さをなくしつつある。握りっぱなしの操縦桿は今にも滑りそうだ。せめて息を整えるくらいの時間は欲しかった。それが戦闘中

においては甘えであることを分かっている。まず残っている他の機体を囿にして――。

そんなレインを余所に、上空に出現していた歪みが向こう側が見えるかというほど巨大になる。虫はそれを感知し、道を開けるようにそこから退いた。そして、そこからまるで丸太のような足が覗く。それは、出現している虫と全く同じ姿をしていた。その、大きさ以外は。

今までのヴァリスと同じくらいのサイズではなく、丸呑みにできるか、というくらいのものであった。レインの知識に、そんな存在はない。以前から懸念されていた、虫の“女王”というものだろうか。巨大な虫の口が開く。反応する間もなく光が発射される。ヴァリスの横を貫いたそれは、そこにいた虫ごと、残っていたプロシオンを消滅させた。塵ひとつ残さないその威力、熱量にヴァリスのセンサーが遅れて反応を示す。初めてみる類の攻撃。レインは操縦桿を握る手に汗が滲むのを感じた。虫の口には再び光が集い始める。だが、レインは反応ができない。息が詰まる。それを吐き出すこともなく、自分は死ぬ。その絶対的な予感に、身体が反応をしてはくれない。しかし脳裏に横切る人物の影は、自らの死を認めてはくれない。

だが、光の収束は止まる。虫の視線は、ヴァリスよりも遥か上に移った。他の虫も、動く気配がない。

同じ場所を見ている。レインは飲み込んでいた息を吐くと、同じようにヴァリスのカメラを上に向ける。夕月の浮かんでいる空は、消え入りそうな紫色をしていた。その中ではっきりとした星が存在を主張している。そのなかで、こちらに流れてくる星があり、

(星?)

カメラを拡大させる。それは、みるみるうちに大きくなり、やが

てヴァリスのリーダーにも反応する。

流星が来るのか？いや、今この場所に降って来るとしたら、どれほどの確率で————。

そんなレインを余所に、目の前にいた虫のひとつが爆発した。流星と同じ反応をするものが、周囲を飛び回る。それが虫にぶつかる、接触するたびに同じ爆発が起こる。光の軌跡とともに、虫はその命を散らしていく。そして、全てが塵になっていた頃に、巨大な虫が凶暴な咆哮をあげる。

目の前の青い機体のせいだ、と考えたのか、口に光が収束し発射される。咄嗟にヴァリスを動かす、ということにも考えがいかず、レインは身体を硬直させる。しかし、その暴力的な光の前に、何かが立ち塞がった。そして、真紅の光が周囲を包みこむと、光は霧散するように消えた。

レインはそれを、目を開けたまま、しかと見つめていた。目の前の反応が、たったいま降ってきていた流星と同じものであると確認したあとで。

それは、完全な“人型”をした機械だった。この世界では存在することはありえない、人間のような兵器。ヴァリスと同じくらいの大きさであるが、その姿は人間をそのまま大きくしたかのような奇妙な印象だった。

全身には赤い羽根のようなパーツがあり、それが炎のように輝いている。背中には同じパーツでできた“翼”があり、レインを守るように大きく広がっていた。

それは、人間であり、伝説にあるような炎の鳥であった。

それが、微動だにしないヴァリスを振り返った。

人間のような姿をしたそれは人間と同じように、二対の青い目を
光らせていた。

第2話『来るべき日に』

『我らは待っている。彼らの目覚めを。』

ただ待っている、その日を。

その日が、我らが救われる日であることを知っている』

東に位置するその大陸にあるシュダル王国の基地では、ここ数時間嵐のような騒ぎが起こっていた。

街から離れた場所に位置しているその広い基地で一番高い白い建物の中は、とくにそれが顕著であった。

内部にあるその部屋は、中心を機械で取り囲むような作りをしている。そこにそれぞれの役目を持った青い制服を着た人間が座り、自分のなすべきことを行っている。しかし普段は黙々とこなしている彼らも

、現在は冷たい汗をかきながら、通信機器などを必死で操作をして周囲に気を配ることもない。

大陸の各地にある基地と連絡を取り合い、何らかの異常があればすぐに兵器を向かわせる。それが、目下の役目であった。しかし、今現在はその必要はなかった。

「“ヴァリス・アイネス”、ポイント05に出現した『ゲート』の閉鎖を確認！！右腕部を損傷、プロシオン残機は5！！」

「ポイント11に『ゲート』出現の兆候あり！周囲の基地からはプロシオンを向かわせるようです！！」度々悲鳴のような報告の聲が上がる。彼らは今現在の兆候、状態を全て把握している。それが何を意味するのも知っている。だからこそ、恐ろしくてたまらない。

「アイネスにポイント11に向かわせるように通達しろ。近くの基地にもそう報告するんだ」

その騒乱に冷や水をさすかのような声が刺さる。その声に、一瞬部屋の中の空気が沈静化する。しかし、それは本当に刹那のことであり、すぐに返答とともに彼らは作業に戻る。それでも幾分か落ち着きを取り戻した雰囲気はあった。

中心にある少し高い場所にある机の前に、その声の主である一人の男が座っている。そこはその部屋、基地で最も地位の高い人物が座るべき場所であったが、その人物はどう見ても壮年というには若すぎるほどの人物であった。慌しい部屋の中で、一人冷静に座っているように見える。混乱の中を、まるで他人事のように居座っている。それは、何かを待っているかのようにも見えた。

彼は全てを把握している。今現在、『ゲート』と呼ばれている次元の歪みが世界中に出現していた。それ自体は珍しいことではない。だが、それが両手では足らないほどの数であることは普通ではなかった。それに対応すべき兵器“ヴァリス”は当然全てに対応できるほどの数はない。無人兵器であるプロシオンはあるが、完全に対応をするには頼りないものであった。“ヴァリス”以外の有人兵器はまだ実験投入しかされておらず、出動することは期待できそうになかった。西にあるかつての敵国、カルデネ帝国についても同じであるということも把握しているた。

この事態に対して、彼は動じる気配もない。ただ、待っている。それが何であるかは、この部屋にいるものには分からない。

そんななか、矢のようにその声が走った。

“ヴァリス・ローラン”から通信が入りました！！」

それは、まだこのような事態にはいっていなかった数時間前に出動したレイン・ベルモット少尉の搭乗している“ヴァリス”だった。救援要請が一度入ったきりで音沙汰はなかったが、どうやら無事だったようだ（それに応える間もなく次々と『ゲート』が出現してしまっただが）

フラッドは表情を変えることもなく、通信を部屋全体に流すことを指示する。その指示は、迷うこともなく実行された。

《フラッド！！》

その瞬間、雷のような声が部屋に響き渡った。通信機器に向かって大声で叫んでいるのだろう。

名前を呼ばれた彼は、あくまで冷静に対応する。

「声を落とせ。極めて明瞭に聞こえている」

《やかましい、それより今どうなってるんだ！！》

こうした場への通信にしては無礼きわまりないが、他の人間が顔を顰めることもない。ただ、作業の片手間に現場にいる人間の声を必死に耳で拾っていた。

「今は世界中で『ゲート』が出現しているんだ。お前の要請は知っていたが、対応ができなかった」

その情報に、向こう側で息を呑む様子があった。しかし、すぐに声が返ってくる。

《そっちに、何か他に情報はないのか！？》

「どうということだ」

《何かどこかの新しい兵器が出撃したとかは！？》

フラッドの微動だになかった片眉が上がる。しかし、氷のような冷静さは崩れることはない。先ほどと違うのは、ふつふつと湧き上がっていたものを抑えてつけているような雰囲気が出始めたくらいだ。

「何かそちらにあるのか」

《今映像をそっちに送る！！いいな！？》

どうせ返事を待たないだろうことは知っている。フラッドは戸惑いの空気の中、それを了承する。なにせよ、判断を下すのはフラッドの仕事だ。

フラッドの机の前方にある大きな画面にはこの世界の地図が映し

出されていたが、少しの暗転のあと“ヴァリス・ローラン”のカメラに変わる。それは少し荒れたものだったが、部屋の中に居た人間の空気を止めるには十分だった。

そこには、空を飛び回る初めてみた大きさの虫と、そしてそれと撃ちあう“機械”が居た。

“ヴァリス”ではない。人間を元にしているという割りには不自然なほどに長い手足を持ち、機械であることを象徴しているような無機質な単眼を持つヴァリスとは全く違う。

人間と全く同じようなつくりをした手足を持ち、赤く輝く装甲を貼り付けたその機体。背中からはその力を誇示するかのような大きな翼があり、同じように輝いている。そして、かろうじて確認できるその身体の上に備え付けられた頭部には、口の部分を覆い隠すようなマスクの上に、夏の空のように強く光る青が二対存在していた。

“人間”と同じ姿をした、機械。この世界では存在しているはずのないもの。

ただその存在に目を奪われている者たちのなかで、フラッドの口元は、ゆっくりとつり上がって行く。

その意味は、たとえ今この部屋にいる人間には分からないだろう。分かったところで、意味はない。

「誰でもいい。各地に伝えろ」

映像に目を向けたまま、フラッドは言った。

「流星が落ちた」と

その言葉の意味は、この部屋にいる全員が知っていた。

第3話『存在する力』

咆哮が、草原に響きわたる。

光が発射される。だがその対象は空を踊るように回避する。

そして一気に近付くと、その鋼の拳を振り上げその顔に叩き込む。悲鳴を上げ、海へと転落する巨大虫。

それはそこへ両手を構えると、炎のように赤い光を発射する。

それに直撃すると、巨大虫は凄まじい飛沫とともに真下の海へ転落をした。

一連の動きをカメラで捉えていたレインは、ただ呆気にとられていた。

目の前にある機体の動きに、だ。

腕を振り上げ、拳を振るう。飛びながら長い足で蹴りを叩き込む。首や身体を動かし、最小限の動きで攻撃を避ける。

一連の動きは、“人間”のそれ、そのものであった。

ヴァリスはあくまで“人”を模した兵器である。直立する身体に、2本の腕と足。

しかし武器をとるためだけに作られた腕は身体に比べて短めとなっており、逆に足は関節のところで大きく折れ曲がるつくりをしている。顔の方はカメラ、センサーを搭載するためのものであり、ただ1つの目だけが光っている。動きであってもそれほど器用には動かない。限界がある。相手に打撃を叩きこむなどをしたらあつという間に内部の機構がやられてしまう。

だが、目の前で飛翔しているその機体は、不必要なまでに人間の姿そのものをしていた。

人間と同じようなバランスの手足に、二対の目を持つ目。この星では作られていないはずのもの。

まるで、人間がその身ひとつで戦っているようだった。

人間の身体が空を飛ぶのに適しているかどうかは分からない。だが機動に何の障害も感じられなかった。

通信を入れたあと、呆然とそれを見物していたレインの意識は、内部のアラートに叩き戻される。

真下から光が発射される。咄嗟にそれを避けるが、凄まじい勢いで連射される。一撃でもくらったら終わりだ。真下へ銃を構えるが、再びレーダーに反応が出現する。

開ききった歪みから、また虫が出現しようとしているのだ。見覚えのある影がいくつも確認でき、レインは繋がったままの通信に構わず大きく舌打ちをする。声は聞こえてこなかったが、構わずに通信を切る。この状況に向こうが対応できているとは思えない。

機体を大きく後退させ、陸へと移動させる。とりあえずそれで下からの光線を防ぐことはできる。

出現をした虫どもに対し、腰に下げていたもう1つの銃を手にとつて砲撃を開始する。冷静になってからの狙いは極めて正確であり、虫は歪みから出ることもなく塵と化していく。だが、下から昇ってきた巨大虫にそれは阻まれる。幾分か損傷したその装甲にも砲撃はあまり効果はないようだった。

その背中から、砲撃の隙を狙って虫たちがヴァリスの方へ突撃する。レインは再び舌を打つと、他の武装システムを起動させる。しかし、一連の動きを観察していた“人型”が、ヴァリスの前に立ち塞がった。

それは虫たちを背中にしたまま、身体中の羽を輝かせる。その瞬間、背中にあった翼が大きく開き、炎のような光が噴出した。速度を保ったまま、それをもろに浴びた虫たちは、一瞬にして爆発を起こす。直撃はしなくとも、そのまま突撃する虫たちは、速度を殺せないまま溶けるように消えていった。

“人型”の行った新たな攻撃に、レインは再び啞然とする。レインは数々の戦闘を経験してきたが、あのような能力をもった機会は見たことがない。

その圧倒的な力に、レインは戦闘のさなか、どうしたらいいのか判断がつかない。とりあえず攻撃をしてこないのが救いだっただ。かろうじて自分と似ているこちらを同属と思っているのか、という冗談のような考えも浮かぶが、笑いも出てこなかった。

巨大虫が再び咆哮する。それに対し、“人型”がゆっくりと振り返る。再び翼が光り始め、レインは慌ててそこから上空へと逃げる。なんとなくだが、“人型”はそれを一瞬確認をしたようであった。大きく開けた巨大虫の口が光り始める。だが、“人型”は動く様子はない。身体全体が火柱のように光始める。それを見て、翼からまたあの光を出すのか、とも思ったが、“人型”が動くこともなく、強い光が発射される。

“人型”はただ腕を構えたただけだった。

その腕を振るい、その光を打ち払った。光はそのまま霧散するように消える。

あまりに速すぎる出来事だった。

巨大虫はそれに怯むことはなく、攻撃の反動でうめき声のような音を立てている。

“人型”はその隙を逃すことなく、身体を巨大虫に対し横に向ける。左腕を突き出すと、手首の辺りのパーツが移動をし、そこから光が二つ出現する。それぞれ弧を描くように伸びたそれは弓のようだった。レインの考えを裏打ちするように、右腕を構えそこから引くと、一筋の光が伸びる。

狙いをつける時間は必要なかった。

右手が離されると、一直線に発射され、泡が吹き出ている口に飛び

込むように命中する。その瞬間、光が強まり、叫び声を上げることなく巨大虫は消滅した。

文字通りだった。あれだけの存在を主張していた巨大虫は、ほんの少しの灰となって風に流されていく。そして、再びこの場所に静寂が戻った。

レインは何もできなかった。ただ、あの強い光が目には焼きついてた。恐怖、ではない。

そんなものは、何処かに忘れてきてしまっているようだった。

“人型”は動く気配はない。一応は警戒をしていたが、何かやらかす気配は感じられなかった。

《…あ、…》

突如雑音混じりに流れてきた通信に不覚にも身体が飛び上がる。司令部への通信は、いつのまにか切れてしまっていた。今の相手は、全く分からない。すぐ、近くにいたことだけが分かった。

(近く?)

《あー…一、き………か?》

その周波数に慌てて調整をする。幾分か明瞭になった声は、聞き覚えのあるようなないようなものだった。

《あー、聞こえますか、そこの、蒼い機体》

それはレインよりも年下の、明らかに少年のものの声だった。声変わりをし始めたくらいだろうか。状況が状況なら近隣の街からの悪戯かと思うだろう。

だが、今、あの“人型”がいて、いつのまにか首をこちらに向けている。

その機体自体が話しているように見えてしまい、一瞬硬直するが、微かに聞こえる息遣いからして同じように内部に居る“人間”が話しているのだろうか。

《聞こえていたのなら、質問に答えてください》
レインよりも幼いその声は、神妙そうに言葉を紡ぐ。
思わず身構えたが、もうあの羽は光らなかった。

《ここは、一体どこなんでしょうか》

その言葉は、全くの予想外であり、レインは答えられないこともなかったはずなのだが。
とりあえず、深呼吸をし、硬直していた身体を操縦室のなかで動かし。そして、

「知るか」

そう答えるのが、精一杯だった。

第4話『世界との邂逅』

シュダル王国にある基地のひとつでは、数時間続いていた騒乱がやみ今は静寂に包まれていた。だが、そのなかでも基地内を往来している人間は慌しく動いている。

日が沈み、周囲を暗闇が包み込む。しかし、基地内は照明により、まるで昼間かと思紛うような奇妙な明るさに満ちていた。

そんななか、コバルトグリーン of 装甲を輝かせながら一機の機体が基地内の発着場へ着地をする。待機していた人間たちの誘導を受け、それは長い足で器用にも見える動きで格納庫へと移動していく。天井の高いその建物には、2階くらいにあたる高さの部分に足場が設けられ、白衣を着た何人かの人間が待機している。

人間が使うには不必要なくらいに広く、天井の高いその場所で決められた位置につくと、機体は停止し溜息のような音を立てながら胸部にあるハッチが開く。

「いやー、参った参った」

そんな気楽そうな声を上げながらそこから顔を出した人間は、ヘルメットを脱ぎながら足場に着地をする。そこにはセットが大きく崩れてしまった金の髪がある。

ノア・ゲイルシュタインは溜息をつくとき、大きく腕をまわしとりあえず長い間同じ体勢であった身体を解していく。そんなことをしていると、白衣を着た者の一人である眼鏡をかけた女性が近付いてきた。

「無事か」

「どっちがだよ」

極めて真剣な様子で極めて淡泊にそう聞かれると、間髪居れずにそ

う返した。

しかしその調子には、馴染みのあるものへの粗暴さのようなものがある。

「どっちもだ。機体が欠けてもお前が死んでも面倒くさいことになる」

本当に真面目に言っているのだろう。女性らしい柔らかさも何も含まれていないその性格にも救われるものがあった。

時代遅れなレンズが大きい眼鏡をかけた女性、シアンは技術班の班長であり、男連中に囲まれて仕事をこなしていることは周知の事実だ。当然、そこに女性らしさなど必要はないのだろう。

「さいですか。でも大丈夫だ、俺にもこいつにも損傷はない。プロシオンは全部駄目になっちゃったが」

「それについては問題はない。元々壊れる前提だからな」

ノアはたったいま降りてきた機体を省みる。コバルトグリーンの装甲が眩しいこの機体は“ヴァリス・レヴァルダ”と呼ばれている。世界に数機しか存在をしていない機械兵器だ。

その力は現在どの兵器よりも強大なものであり、当然一握りの人間にしか使いこなせない。いや、その一握りしか乗ってはならない。パイロットが途中で死んだ例、というのはまだないが、機体を残して死んだとしたら代わりを見つけるのが骨なのだ。その基準に関しては偉い人間が選んでいるのだろう、とノアは適当に思っているが、真実は分らない。

「にしても、やけに慌しいな」

シアンや他の連中が機体を点検をしている傍に居座りながら、ノアは周囲を改めて観察する。

「まるで嵐が来る準備をしているみたいだ」

さきほどのヴァリスの操縦室から見ていた外の光景は、いつになく忙しい印象があった。

『ゲート』が全て閉じた、という報告は受けていたがその事後処理でもしているのだろうか。

「他のヴァリスが破壊された、とかは聞いていないしなあ」

「情報が錯綜している。お前は何かなかったのか」

「どうやらシアンも知らないらしい。ノアは溜息とともに肩を竦める。何も。ちよつとばかり忙しいくらいで変わり映えはないさ」

ノアはあの歪みの出現に一度出撃をし、そのまま近くを盪回しされることになった。そのようなことは極めて珍しいことであり、ノアは戸惑いながらも目の前の厄介ごとを消化していった。帰還を命じられたときは疲労困憊の状態であった。今ここにいることでようやく一息をついている状態だ。

「他の奴らは帰ってくるのかな」

「とりあえず来れるものはここに来るらしい。“アイネス”は別の基地だ。損傷が激しく、ここには来れない。もうすぐ“ローラン”は帰ってくるようだ」

「レイン、か」

自分と同じ年代である男が帰ってくることに安心を覚える。レインは戦闘は畑違いのノアとは違い、いくつもの戦場を体験してきた生粋の軍人だ。憎らしいくらい綺麗な顔をした男であるが、中身はノアとそう変わりはなく、逆にそれが奇妙な安心感をもたらす男だった。何かと教えてもらうことも多く、気があう人間だった。できれば一緒に呑みたい気分であったが、今はそんな状況ではないらしい。

「どうやらその“ローラン”の帰還にあわてているようだな」

「ひどいのか？」

「いや、そうでもないらしい。だが、他の技術者が集められているんだ」

そこまで会話をし、発着場の方が騒がしくなるのが聞こえた。慌し

い空気が強くなるのを感じる。好奇心にとらわれ、ノアはシアンたちに機体を頼んだあとにそこへ行くことにする。特殊スーツを着たまま、さっさと格納庫から出る。

夜の空気に飛び込むと、闇の向こうから信号のための光が点滅しているのが見えた。発着場へと駆け寄ろうとしたが、慌てて踏みとどまる。

格納庫と離れた位置にある基地の本部からやってきた一団を視界に捉えたからだ。この基地の一番の責任者であるフラッド大佐と共に、制服の一団が歩いている。発着場へと向かっているらしい彼らは、離れているノアには気付くことはなく、ノアはその場所でおとなしく待つことにした。少なくとも急いで報告すべきことはないと思っただけ、格好が格好だ。

フラッドの表情は、ノアの位置から見ても気難しいものだった。他の人間は何よりも彼に気を遣っているように見えたが、ノアの目にはそれがただ不機嫌なものでできているわけではない、ということをおぼろげながら察知していた。

フラッドたちが近付くなか、“ヴァリス・ローラン”は姿がはつきりと見える位置にまで来ていた。

蒼い装甲には目立った傷もなく、内部機構も問題がないことを示している。とりあえずノアは息をついたが、そこでもうひとつの存在に目を奪われる。他の人間も同じようで、基地内にざわめきが起り始める。

“ヴァリス・ローラン”の他に、別の存在がある。

“ヴァリス・ローラン”は滑らかな機動で着地をする。そして、横にその単眼を動かした。

丁度隣の位置に、もうひとつの存在が降り立つ。慣れないようであったが、“ヴァリス・ローラン”と同じようにそこへ着地をした。

大地に降り立って、その存在に対する違和感が分かった。

“ヴァリス・ローラン”に続いて降り立ったその存在、それは完全な“人”の姿をした機械だった。

胴体には人間と同じバランスの手足が生え、頭は“ヴァリス”の単眼とは全く違う、人の顔を模したような二対の目がある。身体には赤い羽根のようなパーツが生えており、着地した際に背後の翼のようなものは綺麗に折りたたまれた。

異様である、と思った。自分たちと同じような姿しているにも関わらず、だ。“ヴァリス・ローラン”と並んで比較され、その違和感が余計に強調されている。

あれは、一体何なのだ。その疑問には、周囲で顔を見合わせてざわついているものたちは答えてくれそうになかった。ただそのなかで、フラッド大佐たちはそれに近付き、傍で立ち止まる。何やら“ローラン”に対し話しかけているようであった。

それにこたえるよう、“ヴァリス・ローラン”の胸のハッチが開かれる。そこから覗いたのは、五体満足のレインだった。それに安心をするも、意識は横の機体に持っていかれている。人間のようなその存在は、直立をしたまま動く気配はない。

レインがその機体に向かって合図を送る。まさかその機体自体が生き物なのだろうか、とノアは笑えない発想をする。しかし、ヴァリスと同じように、それは腹部にあるパーツを開く。

そうすると、中から同じように人が出てくるのが見えた。思わずノアはそれを確認するために接近する。意識はそこに持っていかれて、もはや他に気にすることはなかった。

中からでてきたのは、人間だった。ノアたちと同じ姿をした、一人の人間。

しかし、その年齢はノアよりも一回り下だろうか。

緩やかな風に蒼色の混じったような黒髪をなびかせ、遠くからでも分かる紫色の瞳で、周囲を見渡している。それは、自分の頼るべきものを見失った、迷い子のように見えた。

少年の身体はノアたちと同じようなスーツを着ており、所々身体を守るためらしい防具のようなものをつけていた。“ヴァリス”の乗り手と同じようなものだと感じる。

だとしたら、あれをこんな少年が操っていたというのか。

ノアは他にも少年に違和感を感じている。
いや、これは既視感なのか。

戸惑っていた少年は、下にいたフラッドに話しかけられているらしく、ハッチから覗き込んでいる。その所作は本当に子供のようだ。そこで、ノアの意識はレインに向けられる。

レインは、そのままの体勢で“ヴァリス・ローラン”に居た。蒼い瞳は凍りつき、少年の方へと向けられている。まるで釘付けにされるように、動くことはなかった。

その時点で、ノアは既視感の原因に気付く。それを裏打ちするように、レインの唇が動くのが見えた。

聞こえずとも、ノアの確信はその言葉を予測する。

“カノン”

おそらくその言葉が紡がれたであろうその動きを最後に、レインはただ、呆然とそこに立っていた。

第5話『夜の慟哭』

「へエ、そうなの」

一連の報告を聞いて、女は笑う。

整備中の機体の横に座り、それを見上げる。

無機質で、何も言わないもの。それに何かを言いたげだったが、何も言わなかった。

月の色をした瞳を輝かせながら、まるで花が開くように笑う。

「ただの兵器ね」

ただ、笑う。

その笑いには、何の感慨も含まれてはいなかった。

「とても、恐ろしいものよ」

そのあとに言葉は続かなかった。

ただ、考えるために口を閉ざした。

「そうか」

どこか上気した表情で伝えられた報告を聞くと、王はそれだけを言っただけでさがるせた。

広い自室にただ一人、豪華な机の前で寝間着姿の壮年の王は難しい顔で何かを考えている。

敵対国と休戦をして、何年経つのか。とりあえず、人同士の戦いは止んでいたが、それが何かの救いになったとは思っていない。

席を立ち、すぐそばの窓の前に立つ。

明かりが消えた街が見え、その向こうには夜明けのように光る基地が見えた。

遠くからでも分かるその場所に、その存在がいるのだという。

幼い頃から待ち続けていた存在に、彼の心境は何の感慨もなかった。実際に会えば何か思うこともあるのだろうか。多くの人間が何らかの形で待っていたその存在は、未だ人々には伝えられてはいない。要らぬ騒ぎはいらない。

同時に、要らぬ希望を呼び起こすこともないであろうと思った。そういうことは、伝えるべきときに伝えることであることを、王は知っていた。

「お前は、救いを与えにきたのか」
その地位についてからずっと抱えてきた疑問を、一人吐き出す。

「それとも、新たな戦乱か」
それに答えることのできる人間は、おそらく存在しなかった。

「まあ、それは」
一連の報告を聞いて、少女は驚く。
狭い操縦室の中でも、小柄な少女の身体は機械にのまれてしまいそうだった。

しかし、巨大な機体を操る手つきは確かなものである、

董色の瞳は戸惑いの色に染まり、桃色の唇からは言葉は出なかった。

しばらくして、胸にこみ上げたものをゆっくりと吐き出す。
そして適当に言ったあと通信を切って、シートに身体を預けた。

「きっと神様なのよ」
頭部のカメラ越しに見える夜空を見る。

無数に浮かぶ、多くの星。

空が白むまでには、帰れるだろうか、などと考えて、

「みんなを、助けてくれるのだわ」

と、自分に言い聞かせるように言った。

夜は、過ぎていく。

様々な思惑を乗せながら、淡々と、始まりの朝を運ぶのだ。

第6話『彼の目覚め』

カノンは意識の底から引きずり出されるように目覚めた。年季の入った見知らぬ天井が視界に飛び込んでくる。

一瞬どこなのか分からなくなったが、すぐに記憶が蘇ってくる。そしてそのまま起き上がると、馴染みのない部屋を見渡す。

そこは客室だった。柔らかな白色をした壁紙が印象的な、カノン一人ではあまり過ぎるほどの広い部屋だ。素人目でも調度品は豪華なものである。部屋の中には浴室とトイレまで完備されており、この部屋だけでたいいていの身支度ができるようにしてあった。

ベッドの近くにある窓の外はとくに白んでおり、部屋は柔らかな明るさに満ちている。カノンはよく働かない頭で起床すると、身支度を整えることにした。

寝間着から置いてあった服に着替えている最中に外の光景を見たが、カノンの表情が動かされるものは何もなかった。

一通りの準備が済んだとき、部屋のドアが叩かれる音がした。

「おい、いいか」

「あ、今行きます」

遠慮のないぶっきらぼうな声に、カノンは慌てて外へ向かう。

あまり人いる気配のない建物の中を、目の前の人物の背を追って歩く。下に絨毯が敷き詰められており、足音は全て吸収されている。その静けさが妙に居心地が悪かった。

「まずはこの基地の責任者の部屋に行く」

カノンの背中を向けたまま、レインは言う。

昨日会ったはずだが、その様子はどこか頑なだった。

「そこでとりあえずここの話をする。飯はそのあとだ」

「はあ、」

思わず気のない返事をしてしまったが、相手は気にする様子はなかった。

カノンは歩きながら着慣れない服の襟をなおす。部屋に用意されていたのは、前をあるいているレインと同じ青い色の制服だった。丈夫な素材で作られたそれは、着慣れないうちは何だか動きづらい。

「とりあえずは新人として振舞ってくれ。お前のことはまだ当分は秘密にしておくそうだ」

「はあ。あ、いや、そうですか」

再び同じ返事を返しそうになり、慌てて言い直した。レインは気にする様子はなかったが、それがどこか寂しく感じた。よくよく見てみれば、この人は知り合いによく似ている気がする。しかしその雰囲気は全くの別ものであり、あくまでも知らない人だった。

廊下を歩いていくと、片方の壁がなくなり、一面に窓が張られて場所が変わる。そこからは、昨日カノンたちが降り立った発着場らしき場所が見え、人がまばらに動いているのが見えた。

「お前のあれはとりあえずはそのままにしている」

そこで思い出したのか、レインが機体のことらしいことを告げる。

「特に壊れている箇所もなかったろうが、下手にいじられるのも嫌だろう」

「、ええ、そうしてください」

カノンは言われるがままに機体を操作し、格納庫まで運んだが、そこまでは考えていなかった。昨日はほぼ言われるがままにしている、いまいち記憶が頼りない。よく考えれば無用心極まりないのだが、とりあえずは丁寧に扱われているらしい。

ぼんやりしているのを、頭を振ってなんとかしようとするがあまり効果はなかった。一人で首を傾げて何も出てこない。

「どうした」

「え、」

そんなことを繰り返しているうちに、目的地へと到着したらしい。

他の部屋から離れた、黒塗りのドアの前で、レインが固い表情のままこちらを振り返っていた。

「いや、なんでもないです。レインさん」

名前を呼ぶと、レインの表情に少し変化が起こる。氷のように固かった表情に、若干のヒビが入ったかのような印象だった。しかし、それは劇的というほどの変化ではない。

「何で名前を知っている」

どうやら逆に警戒をされたらしかった。慌ててカノンは弁解する。

「いえ、昨日呼ばれていたのを聞いてたので」

名前を聞いたのは、レインとあの責任者らしい男との会話からだった。又聞きであったため、全く別の人間のことを言ってしまったか、と少し焦る。

しかし、レインはそれを否定する。

「：いや、正解だ。俺の名前は、レイン・ベルモット。軍の少尉をやっている」

表情の変化は徐々に大きくなり、様々なものがないまぜになっているように見えた。しかし、それを抑えているあたり、このレインという人間は大人なのだろう。

「そうですか、よかった。：そういえば、僕の名前は言っていますんでしたね」

勝手に名前を呼んでおいて、こちらが無礼を働いていることに気がついた。

しかし、レインはゆっくり首を振る。

「：それはこの部屋で、だ。俺よりもお前のことを知りたいやつらは大勢いるんでな」

どうということかと聞こうとしたが、それはレインがドアを叩く音で遮られた。

「ようこそ」

そんな声で出迎えたのは、昨日会ったあの一番偉そうな男だった。

銀色の髪をした、よくよく見れば若そうな男である。しかし、雰囲気は既に老成したものがあつた。

通されたのは、カノンが居た部屋と負けず劣らず広い部屋だった。男が座る机と、その向かいには客を迎えるためであろうソファーと机が置いてある。その周囲には本棚が設置してあり、整理された本の間には

雑多に資料が突っ込んであるのが見えた。要はこの男の仕事部屋なのだろう。

「昨夜はよく眠れたかな」

「ええ、もうぐっすり」と

きっぱり言ってから何をしているのかと恥ずかしくなる。しかし男は少し笑うと、ソファのほうに駆けるように言ってきた。咄嗟にレインを見るが、レインは黙ってドアの端に行ってもたれかかっているだけだった。どうやらあの男に全てをまかせているらしい。

仕方なく、言われるがままに適当な席に座る。

男は机から離れると、カノンの向かい側に当たる席に座ってくる。その所作のひとつひとつが堂々としている男だ。ふと、こういう知り合いがいたことを思い出す。何故か顔が出てこなかった。

「昨日も言ったと思うが、自己紹介をしておこう」

男は右手を差し出してくる。少ししたあと、カノンは慌ててそれに答えるように握手をした。

「私はシュダル王国軍大佐、フラッド・ルブルーだ。この第1基地の責任者でもある」

その手の力は予想以上に強く、怯むが、こちらも握り返す。自分より偉い人間は怒らせるのはよくない。だが、必要以上に諂うこともまた危険であると思った。それに対し、フラッドは端正な顔に満足気な笑みを浮かべる。

「貴方の名前は？」

しばらくその氷を思わせる水色の瞳をじっと見てから、カノンはゆっくりと言葉を生み出す。

「聖レザール共和国、空軍少尉ゼルカノン・リゲル・アルデバラン、です」

先ほどまでぼんやりとしていた思考からすらすらと出てきた言葉に、カノン自身が内心驚いていた。フラッドの自己紹介につられたのだろうか。しかしいつまでも自分の身元が分からない、というのもおかしいだろう。

「シュダル王国という名前に聞き覚えは？」

それを聞いたあとのフラッドの表情はどこかこちらに挑むようだった。

しかし、カノンのほうはというと、

「…いいえ。初めて聞きました」

言われてから気付く、という体たらくであった。

あまりにも情けない回答にも、フラッドは怯む様子はなかった。

視界の端でレインを確かめると、詳しくは分からないが彼も同じ様子のようだった。

この場所で、自分だけが状況を把握していない事実。

それはカノンの中で、ぐずぐずと残り冷たさを伝える雪のようなものになる。

自分が、一体何故ここにいるのか。

霞がかかったような思考の中で、それはようやくカノンに叩き付けられた事実なのだ、と分かった。

「ここは、一体どこなのでしょう」

昨日レインに聞いて、帰ってこなかった回答を、カノンは今心から欲していた。

第7話『舞い降りた世界』

かつて、この世界は2つの国で戦争をしていた。

世界に2つ存在をする東西の大陸をそれぞれ支配するその国は、その支配権を奪うため、争いを続けていた。周辺には小さな国がいくつか存在していたが、その2つの国に巻き込まれる形で戦争に参加していた。

東にあるは、黎明なる王が統治するシュダル王国。

西にあるは、聡明なる皇帝が支配するカルデネ帝国。

2つの国は長い歴史の中で、何度も大きな争いをしていた。休戦している期間も何度かあったが、互いに歩み寄ることはなく、世界は常に戦々恐々としている状態であった。

その世界に起こった変化は、最初は微々たるものであった。

ある日、王国にある辺境の村で、村人が全員いなくなるといった事件が起きた。

生活の痕はそのままに、家屋や畑に大量の血痕を残して。

王国の調査団の一人は、まるで片っ端からかぶりつかれたようだと半ば冗談の心地で言った。

その事件はカルデネ帝国には勿論、国民にも内密に処理をされたが、それを引き金にするように、同じような事件が度々起こることになった。シュダル王国だけでなく、カルデネ帝国にもだ。

それが民の耳に入るのに時間はかからなかった。たちまち騒ぎになったが、王にも皇帝にも原因は分からない。

そしてそれが相手のせいだ、と言う結論に至ることに時間はかからなかった。

自分たちに攻撃をしてくるのは、相手の国に決まっていた。その手

口は、二の次である。
その見えない攻撃によるフラストレーションは、戦争でしか解決しないと思ったのだ。

そうならば早かった。シュダル王国にある草原で、その戦争は始まった。

両者は互いに一步も譲らず、得体の知れない恐怖に襲われるままに戦った。

しかし、その戦争は一日で終わることになる。

突如出現した空間の『歪み』。

それを上空に確認したのは、その場にいた全員であったと記録されている。

「それが始まりだった」

フラッドは、この世界の人間が学ぶ歴史を記憶からなぞる。

「幾多の戦争を経験した兵士が、“惨劇”だと言っていた」

そこから、出鱈目な怪物が降ってきたのだという。

あるものは獣を、あるものは獣の身体に昆虫の頭だったと、そしてあるものは巨大な昆虫であったと。

ばらばらの証言のうち、共通しているのは、それがどの兵器よりも巨大であった、ということである。

それが上空から降りてきて、まず何人も人間が踏み潰された。それは広い戦場に何匹も出現をし、足元にいた生き物など意に介さず、行動を始めた。

「人間を、食べ始めたらしい」

フラッドの言葉は、口にするだけでおぞましいものだった。

怪物はそこにいた人間を、様々な形をした口で食べたのだという。生きた人間を、口に運び、噛み砕き、嚥下する。巨大な身体で動き回りながら、その行動は食べるということとで一致していた。

どれが王国で、どれが帝国の人間か。そんなものは関係なかった。怪物にとって、それはただの餌であり、おそろしいほどに平等だった。多くの人間が、亡骸を残すことなく死んでいった。

やがて腹が満たされるほどになると、怪物は殺戮を始めた。その巨体で歩くだけで簡単に人間の身体は潰れていくのだ。腰を抜かした兵士の多くはそのまま死んでしまったらしい。

そして、怪物は消えた。

「どの兵士に聞いても、消える瞬間を見たものはいなかった」
まるで、そこには何もなかったかのように。

指導者たち自身がその戦場にいてそれを目の当たりにしたため、それは現実として認められることになった。しかし、あの怪物を見て、対抗するという気持ちも湧かなかった。その世界にあるどのような兵器もあれには通用しない。それだけが確固たる事実であったのだ。

「貴方が相手をしたあの虫は、そういうものだ。突如現れ、手当たり次第に生き物を襲う」

皮肉なことに、人間が団結をするのはどうしようもない相手が現れたときである。王国と帝国はあっさりと休戦をし、その手を取りあうことになった。それぞれの技術は全く違うものであったが、それらを組み合わせることで、新たな力を生み出すことになった。

「それが、“ヴァリス”だ。昨日見ていただろう。そのレインが

乗っていた、人型の機体だ」

フラッドが視線を向けると、退屈な歴史の授業には興味がなかったのか、レインは気のない仕草で自分の髪の手をいじっているだけだった。フラッドはそんな態度に気にすることもなく、カノンに目を移す。

ここに来てからぼんやりしていたカノンの表情は曇り、眉間には皺が寄せられていた。幼い少年らしからぬ表情だった。フラッドはそれに満足をしたかのように笑みを浮かべる。

「我々は今は敵国と戦うための組織ではない。あの怪物に対抗し、市民を守るための組織だ。いまやあの歪み、『ゲート』の出現を察知することができ、そこへ“ヴァリス”を向かわせることで対処をしている。貴方は、その“ヴァリス”の任務に居合わせたことになる」

目の前の少年は、首を傾げ、何かを言いたそうだった。すかさずフラッドはけしかける。

「どうかされたか？」

「…今の話は本当ですか」

それきた、とはやる気持ちを抑え、フラッドは首を傾げてみせる。「どういう意味か？」

「その、シュダル王国やカルデネ帝国のことです。それは、本当にある国の話なのでしょうか」

紫の瞳が、揺れている。頼るべきものを必死に探している目だ。それに対しては、真剣な対応が必要だろう。そのために、フラッドは立ち上がる。

「これが世界地図です」

本棚から用意してあったものをとり、机に広げる。

彼は、それを食い入るように見るのが分かった。

「この東が我々の国、シュダル王国です。そしてこの西が」

「カルデネ帝国、ですか」

それは自分を納得させたいがための言葉のようだった。

構わずに、フラッドは続ける。

「この基地はここですね。シュダル王国の首都から、少し離れた位置にあります」

ゼルカノン・リゲル・アルデバランはそのまま動かなくなった。そこに存在している少年は、目を閉じたまま、今言われたことを消化しているのだ。自分のなかで、それを整理している。

目の前の、事実に対して。

「私の話を裏付けるための証拠なら、いくらでもありますよ」
フラッドは、容赦はしなかった。

「貴方一人を騙すには、多すぎるくらいのものがね」
「フラッド」

そこで、ただの傍観者だったレインが口を出した。カノンは驚いたように彼に視線を向ける。

こちらを睨みつけるレインの目は実に険しいものだった。

「少しは落ち着いて話せ。：アルデバラン少尉はまだ話を呑み込んでいる最中だ」

フラッドはその言葉に肩を竦めると、その非礼を詫びた。

カノンは、少しほっとしたように息を吐くと、ゆっくりと地図を見る。

それを長い時間をかけて見渡すと、フラッドに視線を向ける。

「これが、この世界なんですね」

とらえかたによっては、泣きそうにも聞こえた。

「僕が言った国は、存在していない」

少しして、フラッドは平坦に言った。

「そういうことになる」

目の前の異邦人に対し、フラッドはあくまでも冷淡に振舞うことにした。

第8話『紡がれる記憶』

『何かは空から始まるものだ。

大地ある世界は、我々の世界。

そこで起こることは、全て我々の範疇であり、責任となる。

しかし、見上げればそこにある空のことは、誰も知らない』

基地にある客室は、想像以上に豪華なものだった。

羨ましいと同時に、レインはむしろ呆れている。国賓級の客ならこれでも足りないくらいなのだろうが、たまにくるほかの基地の責任者もここに泊まっていたのだろうか。

（ただの軍人の癖に偉くなったもんだ）

知り合いの責任者、というレインはフラッドしか知らない。

しかし、昔なじみということで同じような立場だった過去を知る身になると、素直に尊敬できないような不思議な気持ちになる。

戦うことが仕事であり、どうせ死ぬときは死ぬのだ。必要以上に威張っていても仕方ない。

そんなことを考えているうちに、目の前の少年は食事を終えたようであった。

「もっともってこようか」

トレイの上にあった皿は綺麗に空になっている。ソースの一滴も残さずだ。それを見て、レインはそう言ったのだが、ゼルカノンは首を振った。

「いいえ、十分です。ご馳走さまでした」

そう言って頭を下げる仕草は、ある程度の礼儀を教育されている雰

囲気があった。

しかしそれは身分から来るものではなく、あくまでも教育をされているから、といった印象もあった。

フラッドの部屋で話を終えたあと、とりあえず食事をさせることになった。

「話を聞いたあとに吐かれたら困るからな」

食事をさせてからにすればよかったのに、と言ったレインに対し、フラッドはしれっとした様子でそう言っただけ。そういうときのフラッドに何をしようが無駄なこともレインは知っていた。

とりあえず目立つのはよくない、ということでレインが食堂から運び、客室の机で食べて貰っている。

食堂以外で食べる場所はないから仕方がなかった。

「これから僕は何をしたらいいんでしょうか」
その言葉に一瞬はっとしたが、それは単に予定を聞いているだけだ、
と思ひ直す。

「とりあえずこの基地を案内しろ、だそうだが」
レインは先ほど言われたことを繰り返す。

この少年を、この場所に居させるつもりらしい。

「そうですか」

ゼルカノンはそれだけ言って黙ってしまった。

トレイと共に机に置いてあった資料に手を取り、それをぱらぱらとめくる。

それは、この世界の歴史や地理を書いた資料だった。
分厚いそれは、彼一人を騙すには十分すぎるもの。

ゼルカノンはあのあと動揺した様子はなかった。それはまだ事実を飲み込めていないだけで、それを理解したとき、どうなるかがレインは恐ろしかった。

だからといって、ゼルカノンの言った「聖レザール共和国」なるものが存在しているなどといったことは聞いたことはない。ゼルカノンが嘘をついている、という可能性も否定はできなかった。

だが、それを否定するものは、あの“人型”だった。流星のように現れ、見たこともない力を持つ、あの機体。不自然なまでに人を体現しているあれば、使用していない格納庫にひっそりと眠っている。

（本気を出せば、“ヴァリス”は全て破壊をされるかもしれない）
レインが危惧をしているのはそれだった。レインは目の前であの力を見ている。誰よりもその力の大きさを知っているのだ。そんなものを引っさげて、知らない国から来たと言う少年はやってきた。それが何を意味するのかは分からない。

だが、一目見たときにレインの中にあった期待のようなものは既に消えていた。

「：お前の国はどんな国だった？」

「いいところだったと思いますよ」

ゼルカノンは資料に目を通したまま答える。

「他の国よりも自然が多い国でして、それを利用した観光産業で栄えていました。僕自身は行ったことはないですけど」

そういう彼の様子はどこか他人事だった。興味が無かったのだろうか。

「戦っていたからか」

「そんなもんですね。他の人と違って、僕は戦うだけのために育てられてましたから」

そこまで言って、ゼルカノンはやっと気付いたような様子だった。

「おかしいな。朝には思い出せなかったのに」

「何だ？」

「いえ、朝、いや、昨日ですか。昨日はよく思い出せなかったのに、今は自然に言葉に出た」

首をかしげ、ゼルカノンは頭を軽く叩いた。

それには演技は感じられない。本当のことなのだろうか。

「よく分からないか」

「ええ。さっきあの人に自己紹介をしたときも、触発されたように、口から出てきて、それで、」

「よく分からないまま、力を使ったのか」

それは、つい口をついて出た言葉だった。

少年は、レインの顔を見る。その表情は、初めて見る硬い表情だった。

言ってからレインは酷く後悔をした。その物言いは彼を責めるものであり、どうしてもある潜在的な恐怖から来たものだった。本来は、心の奥底に隠しておくべきものであること。

「いや、悪い。助けてもらって言うことじゃない」

そうやって取り繕うことが、酷く醜いものとして感じられて自己嫌悪に陥る。

少年は、再び考え込んでしまったようだった。

（フラッドは、こいつをここに居させてどうするつもりなんだ）
重い沈黙のなか、レインは考える。

フラッドが何も考えずに行動することはまずない。

そもそも彼は、彼の国に帰すべきではないのか。
しかし、その方法はレインには分からない。

「…そういうえば、お前、いくつだ？」

「15です」

その返事は思ったよりも硬いもので、レインは再び後悔する。
言うべきことではなかった。この時点では言うべきことではなかったのだ。

同時に、また“期待”が湧き上がってきたのが感じられて苛立つ。
彼は関係がない。レインの事情には、全く関係がない。

名も知らぬ国からやってきた異邦人だ。

この世界の事情に関わらせるべき存在ではない。

「若いな」

「他の人にもそう言われましたね。いつまでたっても僕が最年少でした」

思い出したのか、彼は笑う。それは年相応のものであった。

緊張が緩和したのを見計らうように、レインはふと口を開く。

「なあ、“他の人”ってのは、」

彼が、自然に口に出す言葉。おそらくは、彼の仲間のこと。彼と、
同じ。

もしかして、あの“人型”は他にもあるのか。

それは幸いにも、ドアが叩かれる音によって口に出すことは防がれた。

第9話『動く世界、言えない言葉』

レインは、迎えに来たノアに続いて格納庫への道を走っていた。

「具体的には、どうなったんだ？」

こちらに来ていたらしいノアは、疲れが残っている表情であったが、構わずにレインの前を走っていた。

「“ヴァリス”が一機行方不明になったんだ」

客室までやってきたノアが言うには、「大変なことになった」らしかった。それでレインに出撃命令が来たという。レインはあの少年を残し、こうして道を急いでいた。

「一体どうして」

「それがな、」

外へ来てノアは一息ついたが、すぐに走り出す。その様子だけで、事態が急を要していることを理解できた。そこで見た発着場では、既に準備がされているのが見えた。後はレインが用意できればすぐに出撃ができるだろう。

「ここに来るはずの“ヴァリス”が、『ゲート』を察知して、そのまま連絡がとれなくなったんだ」

格納庫まできて落ち着いたノアの声をレインは特殊スーツに着替えながら聞いていた。軍服の下はインナーになっており、すぐにでも着替えることができるようになっていた。

格納庫の隅で着替える作業を進めながら、レインは言う。

「察知しているなら、俺かお前に命令が来るはずだろう」

『ゲート』への対応は、操縦者にとって火急のことではあるはずだ。何があろうと優先される事態であることは自明だ。しかし、ノアは難しい顔で首を振る。

「いなくなったのは、“ヴァリス・リヴァイス”なんだよ。だから、他の奴らも行かせてしまった」

その名前を聞くだけで、レインは全てを了承した。同時に激しくなる動悸が、鬱陶しい。

生きているのが不思議なくらいのか細い姿が思い浮かぶ。

「『ゲート』を察知して、か」

「ここに来る途中だったらしい。その道中で見てくるって言って、そのまま連絡がとれなくなった」

本来なら朝方に着く予定だったようだ。だとしたら、かなりの時間、連絡ができない状態になっていることになる。

操縦者に過信はなかった。だが、役目に対して一生懸命すぎる部分があることは知っていた。

着替え終わったレインは階段を上り、上層にある“ヴァリス・ローラン”の操縦室の入り口にたどり着く。横にあるノアの“ヴァリス・レヴァルダ”は健在のようだった。

「俺は状況を見てからってことで待機らしい。昨日のこともあるしな」

ノアの駆る“ヴァリス・レヴァルダ”はレインの“ヴァリス・ローラン”よりも若干大きめに作られている。それは、状況に応じた特

殊な兵器を積むためであり、戦況においてその役目を変える。今回の事態に対応できる装備を見極めてから出撃するのだろう。同時に、昨日の『ゲート』の頻発に対して警戒をしているのだ。それは仕方のないことであるとレインは理解している。

逸る気持ちを抑え、操縦室に乗り込もうとするレインの背中に、ノアの声がする。

「なあ、昨日のことなんだけど」

「どうした」

昨日ノアにも何かあったのか、とレインは聞き返す。しかし、ノアはしたのは報告ではなく、質問だった。

「あの人間みたいな機体に乗っていた子のことなんだけど」

レインは一瞬考えるが、背中を向けたままそれに答える。

「あいつは違う。名前も違えば、立場も違っていた。この世界のこ
とには、全く関係のない人間だ」

言い切るというには多すぎる言葉を吐くと、レインはそのまま操縦
室へと乗りこんだ。

おそらくそれは答えにはなっていないだろう。だが、レインにはそ
れが精一杯だった。

起動した“ヴァリス・ローラン”は何の問題もなかった。

レインはそれを確認すると、そのまま外へと歩き出す。

誘導を受け、発着場へと到着をする。

ふと、レインはサブカメラを起動させ、客室のある建物を見た。
ドアが並ぶ光景が見えるだけのはずであったが、人影が見えた。

拡大せずとも、その正体は分かっていた。

（出るなど言ったのに）

お前には関係はない。だから気にすることはない。

帰るべき国があるのなら、あの機体での役目があるのなら、何もするな。

何をするか分からないうちに、あの力を使わないでくれ。

おそらく本人の目の前ではいえない切実な願いを、レインは口の中で反芻させると、指示を受けるまま、“ヴァリス・ローラン”を発売させた。

第10話『襲う悪夢』

体を静寂が包んでいた。

操縦室の中で膝を抱えると、ひどく落ち着いた気分になる。

生まれる前はこんな感じだったのかしら、と思う。

だが、そのときから傍にいたはずの存在は、ない。

そのことが、アリアを絶望に貶めていく。

しかし、それに負けたところで、全てがうまくいくわけもなかった。

アリアベル・デューティは、シートに座りなおすと、操縦桿を握る。あまりに小さな少女の体は、機械に埋もれてしまいそうだったが、その手つきや視線は戦士のものだった。前面にあるモニターは、暗闇を映し出している。昼でも暗い、鬱蒼とした森の中にいるためだった。

“ヴァリス・リヴァイス”は、“ヴァリス”の中でも一際目立つパールピンクの装甲をしている。比較的小柄なのが幸いし、森の中で完全に隠れることに成功をしていた。

意味のないことかもしれないが、アリアは息を詰めながら、周囲を再び確認する。

反応は、ない。息を吐くが、それは安心できたことではなかった。

思えば最初からおかしかった。

リーダーに反応はしなかったが、確かに『ゲート』出現の兆候はあった。そして単身赴いた場所で、それは存在していた。

だが、今も“ヴァリス”のセンサーには何の反応もない。確かに見たのだ。

それは、この世界にあるものではなかった。

そしてそれが自分ひとりでは手に余る事態であることも理解していた。

“ずっと救援要請を送っている”

それなのに、アリアは一人ここで待っている。

“ヴァリス”のセンサーで反応をしないのなら、もしかして基地のほうも察知ができていないのだろうか。それは今の状況では恐ろしい発想であったが、“ヴァリス”の異常だけであってほしいのがアリアの願いだった。

アリアは董色の瞳でモニターを見据え、再び息を詰める。
今現在の場所は把握している。ここに来る前に連絡もした。

『ゲート』は無差別に発生をするわけではない。

ある程度、その場所は決まっているのだ。

その場所は“ポイント”として設定され、その辺りを見張っていれば、出現を察知できる。

おそらくはアリアの通信から、近くのポイントを探るくらいのこと
はできるはずだった。

そう思いたかった。

“ヴァリス”のカメラが、森の暗闇を横切る影をとらえた。アリアは悲鳴を飲み込む。

アリアの経験はそれほど多くはない。今までは虫を殺していればそれでよかった。

だが、あれは何だ？

次の瞬間、通信を受信した音が操縦室に響き渡り、アリアは短い悲鳴を上げる。慌てて確認をすると、それは馴染みのあるものだった。だが、森の木々が邪魔しているのかうまく受け取ることができない。アリアはそれを機に、思い切って“ヴァリス・リヴァイス”を飛翔させた。

視界が開けた、と思った瞬間目の前から何かが飛び掛ってきた。生き物だった。

いつものような虫ではない。

それは歴史の中で存在していた、巨大な生き物。

それをまともに受け、“ヴァリス・リヴァイス”は木々をなぎ倒しながら森に押し倒された。

自分の判断を悔やみながら、悲鳴を押し殺し起動できる武装を探す。

目の前にいたのは、爬虫類を思わせる生き物であった。

飛び出した目は縦横無尽に動き、ざらついたその表面は、森と同化したように濃い緑に彩られている。長い舌を飛び出させながら、“ヴァリス”のカメラに向かって吠え立てていた。

アリアは特殊スーツの下の肌が粟立つのを感じた。虫はいくらでも平気だったが、この手の生き物は断固関わりたくないものだった。しかもこれは、“ヴァリス”と同じくらいの大きさであるのだ。

アリアは泣きたくなるが、涙のほうは操縦室に響き渡る警告音で引っ込んだ。

飛びついたこの爬虫類は、四つの足がある。その足には、水かきのついた平べったいものではなく、まるでそれ自体が凶暴な口であるような鋭い爪が生えていた。

それで“ヴァリス”の手足が押さえつけられ、悲鳴を上げているのだ。このままだと押しつぶされるかもしれない。

アリアは“ヴァリス”を動かすが、目の前の生き物はびくともしなかった。吠え立てる口がせまる。下だけが覗くその口は、底の見えない穴を思わせ、悪い夢のようにアリアを追い立てる。だが、夢と違ってこれは現実だ。

だが、次の瞬間、“ヴァリス”とその爬虫類の近くで爆発が起くる。

上空からの反応だった。

目の前の爬虫類もそれを察知したのか、そのままの体勢で空を仰ぎ見る。

抑える力が緩んだ。

その瞬間、アリアは“リヴァイス”の腰に設置してあった二つの光子砲を起動させ、爬虫類の腹に向かって発射した。

途端に弾ける悲鳴。爆発。

それに押し出されるように、“ヴァリス・リヴァイス”は爬虫類の束縛から脱出する。

爬虫類は追いかけようとするが、すぐに上空からの攻撃に動きが止まる。

爬虫類の吼える声を背に受け、アリアは“ヴァリス”のカメラを

上空に向ける。

澄み切った蒼い空に、別の蒼が存在した。

「レインさん!!」

任務中であることも忘れ、やっと出た声でその名を呼ぶ。

通信はまだ雑音混じりだったが、その端々に声が混じる。それは確かに、レインのものだった。

その事実、アリアの緊張は弛緩する。だが、目の前の怪物は、再び近くにいたアリアに目をつけたようだった。

“ヴァリス・リヴァイス”は至近距離の攻撃で、その反動をもろに受けていた。先ほどのダメージに加え、手足の機動には多大なダメージを受けている。油断を許されない状況なのは確かだった。

そんな“ヴァリス・リヴァイス”の前に、蒼い機体が着地する。それに対し、怪物の方は新たな仲間の到着に警戒をしているようで、すぐには飛び掛ってこなかった。

《無事か》

短い言葉が、通信機から操縦室に入ってきた。雑音が混じっているが、上空にいた時よりも聞き取りやすくなっていた。

「はい、申し訳ありません」

乾いた喉で必死に声を絞り出す。泣いてしまいそうだったが、こらえた。今はそうすべきときではなく、このときのレインはとても厳しい。

《もう少し頑張れ。お前は逃げるんだ》

そう言って、目の前の“ヴァリス・ローラン”は背中にあった砲塔を機動させる。

「大丈夫ですか？」

それに対し、アリアは思わず強い調子で言ってしまった。

だがレインの様子はどこか別のことに集中しているようなもので、返事は少しして返って来た。

《その機体で何ができるんだ。お前はフラッドの基地に帰ってこの事態を報告しろ》

そのあとに、レインは言う。

《お前は生きてやる必要があるんだろうが》

その言葉に、アリアは黙るしかない。置いていくことは心苦しいが、レインの言うことを聞くことがこの場では一番賢いことだった。
「分かりました」

《早くしてくれ。何かおかしいんだ》

「え？」

怪物が、痺れを切らしたようにこちらに距離を詰めようとしていた。木々を倒しながら、確実に存在しているそれは、“ヴァリス”に狙いを定めている。

《こいつには、センサーが一切反応しない》

その言葉にはっとしたアリアは再び“ヴァリス”の全センサーを確認する。

データ上では、それは一切存在していない。

いや、存在している辺りにはまるで霧がかかったような曖昧な反応となっており、特定ができない。

《こいつは、俺たちの通信も妨害しているようだ》

レインの声は、聞いたこともないくらい硬いものだった。

アリアよりもずっと戦っているレインにとっても、未知の存在。

《だから基地に帰れ。…何かが起こっているのかもしれない》

もはや涙などはとつくの昔に引っ込んでいた。

それは次々と襲い掛かる予想外の事態に、単に思考が追いついていないだけなのかもしれない。

第11話『孤独の中で』

基地は静かだった。

しかし、落ち着かない様子でいる発着場の作業員たちを、カノンをじっと見つめている。

カノンのいる建物に人の気配はなく、格納庫周辺の様子が別世界のことを感じられている。

しかし、先ほどから胸の下には気分の悪いものがたくさん溜まっているように感じる。

居心地の悪さ、というのだろうか。

ここに居てはいけない、というものではない。

何かを、すべきという焦りだ。だが、今は状況がよく分からない。

どうしようもないなら、現状を維持すべきだ。

以前にも似たような感覚はあった気がする。

行かなくてはならないのに、自分が不甲斐ないせいで何もできないという焦燥感。

相変わらず頭は霞がかっている。

以前にいた場所は知っているのに、そこにいた人間は思い出せない。自分にだって、一緒にいた人間はいたのに。

それを“仲間”と言っていて、相手もそれを認めてくれていた。

先ほどは全く実感がなかったものが、いっきに襲ってくる。

凄まじいまでの、孤独感。

大切な人たちを思い出すことができなくて、何もしていない自分。何をどうして、どう判断をすればいいのか。誰かにこの気持ちを吐露したい。だが、それをできる人間はいない。

もうなくなっただけなのに。

もう自分は、一人で頑張ることをしなくていいはずなのに。ここまで苦しいのに、何も思い出せない。それを責める人間すら、思い当たることはない。

「どうかなさったか？」

怒涛のように押し寄せてくる感情を、冷静な声がせき止めた。横を向くと、責任者である大佐が無表情で立っていた。

「：貴方は、ここにいていいんですか？」

「これから行くところですよ」

そう言ったあと、大佐は口元を吊り上げた。

「貴方もどうですか？」

意図の分からないその言葉にカノンは首を振る。

「行ったところでどうにもならないでしょう」

「できることはあるでしょう」

何も考えられないカノンを尻目に、大佐は発着場の近くにある格納庫に視線を送る。

「貴方にはあの人形がある」

それがカノンの乗る機体を指していることに気付くのにしばらくかかった。

あれを知らない人間にとっては、どういうものに見えるのだろう、と少し思った。

「この問題に対処すべきものは他にあるでしょう」

話に聞いた“ヴァリス”は先ほど飛び立っていった。

折れ曲がった足が特徴的な、単眼の機械兵器。

その力は、決して小さいものではないはずだ。

「もしもそれに対処ができなかったら？」

その言葉に、カノンは相手に視線を送る。

どうということか、図りかねているのだ。

「レインさんは、慌てて行ってしまったようですが」

「“ヴァリス”が一機連絡が取れなかったのですよ。こんなことは初めてでね」

そういう大佐は、さほどあわてている様子はない。信頼をしているのか、それともそう立场上そう振舞わなければならないのか。

「おかしいことになっているようです」

大佐はどこか他人事のようだった。

「場所は分かるのですが、その周辺一帯の反応がはっきりとしない」
まるで靄がかかっているかのような――。そう続けて、大佐は黙り込んだ。

カノンはその意図を探りつつ、考える。

場所が分かっている、レインがそこへ向かった。

それでいいのではないか。

カノンが力を使わなければならない理由などは存在しない。

誰かに、そう言ってほしい。

この世界の話聞かされ、自分の置かれている立場が分かり、レインとの会話で、自分の力の大きさを改めて認識した。カノンは、慎重にならなければならない。今だってよくわからないのだ。

記憶が蘇らないうちは、何もしないほうがいいのかもしれない。

「できることはしたほうがいい」
大佐は突然口を開いた。

「レインはそう言って、“ヴァリス”に乗りました」

『できることはしたほうがいいんだよ』
突如蘇った、いつかの声。

『後悔するよりかは、ずっといい。そうすれば、迷いもなくなって、』

——辛いことがあったとしても、納得がい
くんだ。

その姿は、レインとひどく似ていたような気がした。だが、それはレインではないことだけは確かだった。

「許可はおりにいるんだ」

カノンの様子を笑うように、大佐は声をかけてくる。

「私よりもっと上の連中のな」

どういう意味なのか図りかねた。

記憶がまた浮き上がる気がしたが、戸惑う思考に邪魔をされてはつきりと浮かばない。

自分は、あれで何をしていたのか。

あれは、一体何のために存在をしていたのか。

今までの会話の中で、徐々に、徐々に思い出してきていた。同時に飛び出して生きたい気分になる。

だが、それが正しいのか、誰かに聞くことさえできなかった。カノンは孤独だった。

だからこそ、自分ひとりの判断が重く感じる。

「あの人形の名前はありますか？」

突如そう聞かれて、カノンはたじろいだ。

そういうときに限って、記憶の海から湧き上がるものがある。

「フェニキアス」

それは、再三呼ばれた名前だった。

「僕の国の伝説にあった、死んでも蘇る、燃え盛る鳥の名前です」
勝利を願われた、国家としての象徴の名前でもあった。

それを聞いて、何が嬉しいのか大佐の口元がつり上がったのが見えた。

第12話『見知らぬ光に』

とんでもない場所へ来てしまった、と彼は今更後悔していた。端にいる幼い妹は、憑かれたように目の前の出来事を一心に見ている。

しかし、繋いでいる手は今までにないほど力をこめており、小さな体にはあまるほどの恐怖を感じているのだと分かった。

とにかく、逃げなければと思うが、あの巨大な存在が動いたびに起こる震動で容易にできることではなかった。蒼い体をした巨人は、小さな彼らに気付くことはなく森に向かって砲撃を開始する。そこには何も無いように見えたが、その閃光に照らされた瞬間、何か大きな物体があるのを少年の目でも確認することができた。化け物が、化け物を倒そうとしている。

彼は蒼い鉄の体をした巨人が人間の味方であることを知っていたが、それでも恐怖を抑えることはできなかった。

彼らの村から少し離れたその森は、入ったら出られないと伝えられている場所であった。大人でも近寄らないそこは、人の手が入っておらず、見たこともない葉草などが存在しているらしい。それを聞いた少年は、最近体の調子が思わしくない祖父母のために赴くことにした。妹は置いていくと五月蠅いので仕方なく連れてきた。妹は兄である彼と離れることを極端に嫌がり、彼は疎ましく思うこともあったものの、人手はあったほうがいいかと思い、絶対に手を離すなど言いつけて連れて行くことにした。

森に来て、目的のものは手に入れることができた。木に印をつけ、帰り道を確保することも忘れなかった。だが、妹は途中からここにいることを極端に嫌がっていた。妹はぐずり始めるとはなかなか機

嫌を直さない。少年は滅多に來ないこの場所を探検したい、と思っていたが、そのときは諦めることにした。

しかし、森から出ることもなく、あの巨人たちの戦いは始まってしまった。確か、桃色をした巨人が現れた、と思ったときから、彼らは近くの木にしがみついているしなくなっていた。そうしないと、巨人たちが起こす衝撃で大地に放り出されてしまうからだ。大地にいるというのに、船に乗って大海に放り出されたようだった。折角採った薬草も靴とともにどこかへ行ってしまった。

見えない怪物は、砲撃の間を縫って蒼い巨人に飛び掛る。蒼い巨人は左手にある盾で器用に流しながら、腰につけてあった棒を右手で取ると、そこから飛び出した光が剣のようになり、怪物に向かって切りかかる。しかし、姿を現した怪物はそれを巧みに交わし、蒼い巨人を飲み込んでしまおうかというくらいに口を開け、何度も踊りかかる。

戦いなど見たこともない少年は、それに圧倒されていた。しかし、そんな少年の目にも、蒼い巨人が苦戦をしているのが窺えた。桃色の巨人は遠くからそれを窺っていたが、その体は見るからにぼろぼろで、蒼い巨人のように戦えるとは思えない。

あれが負けたらどうなるのだろう。

少年は不意に考えて身震いをする。

世界に突如現れる怪物は、人を食べるのだという。退屈な授業の間で聞いたそれは、今現実となつてのしかかろうとしている。

あの怪物はこちらに気付いていないようだが、戦いが終われば見

つけてしまうかもしれない。いや、それだけならいいが、あれは近くにある少年の村を襲ったらどうすればいいのだろう。両親や祖母、近隣の見知った大人、友達。それがあの口で丸呑みにされていく光景がいやでも想像できた。

何とかしたい。しかし、少年は自分のできることを嫌でも把握していた。この場でできる最善は、妹を守ることだ。あの巨人の戦いにこのこ赴いたところで、潰れたトマトのようになってしまいうのは目に見えていた。

とにかく、ここから離れなくてはならない。村に帰って、このことを伝えて、みんな逃げるができるかもしれない。震動が続くなか、少年は必死に妹に呼びかける。妹はこちらを縫るように見えてきて、それをしっかりと聞いてくれた。

感じたこともない恐怖のなか、この場で兄に頼るしかないと思っている。自分は、それに答えなくてはならない。

少年が、そんな決心を固めたときだった。一際響く轟音とともに、少年たちのいる方とは反対側に蒼い巨人が吹っ飛ぶのが見えた。凄まじい震動とともに、蒼い巨人は森の中へと倒れこむ。一瞬だが、目を離したことを後悔した。この場でできる最善は、あれらの動きから目を離さないことでもあったと気付いた。

怪物は、その姿を白昼に現したままだった。森の木のひとつに引っ付いて、蒼い巨人には目をくれることもなく、ある一点に目を向けている。その爬虫類に似た顔を正面から見ていた少年は、遅れて身震いをする。

こちらを見ている。

気付かれたのだ。

妹が小さな悲鳴を上げ、泣き出しそうになった。それなのに、少年は動くことができない。

家よりも大きく、牛よりも強靱な体を持つそれからは、たださえ小さい兄妹が逃げられる道理など存在しなかった。それを分かってしまった少年は、妹を連れて逃げるなどといった考えは浮かばなかった。

生き物が体をこちらに向ける。丁度跳躍をする直前のような体勢だ。それを、ただ見ているしかなかった。結果は同じだと思ってしまったからだ。

『逃げて!!』

悲鳴のような声が、どこからか降りかかった。見ると、桃色の巨人が、その傷付いた身体でこちらへと向かってきていた。

それを機に、少年は妹の手を懇親の力で引っ張って走り出した。生き物から、できるだけ離れるように。

あの巨大な目から、逃げられる場所に。痛がつているのか、妹がとうとう泣き出した。だがかまってやることはできない。

少し落ち着ける場所に着いたら負ぶってやるつもりだ。だから、それまではどうか我慢をしてほしい。

それを伝えるつもりで、少年は振り向いてしまった。ちょうど、怪物がこちらへ飛び掛ってくる瞬間に。

その瞬間、彼は自分の死を覚悟した。

ただ、妹だけは逃げられないだろうか考えた。

だが、その目を赤い光が焼くように照らした。

凄まじいその光とともに、怪物が後ろへ吹き飛ぶ。

地面に叩きつけられるその震動に、兄妹の足は再び止まる。

妹の泣き叫ぶ声が響き渡った。

少年はその声に現実へと引き戻され、何とか泣き止ませようと抱き寄せる。

妹はそれに気付き、しがみついて少し落ち着くと、呆けたように上空に視線を止める。

何事か、と少年もそれに続いた。

そこにいたのは、“人”だった。

巨人たちと同じような大きさの、左右で違う大きさを持つ赤い翼を持った、人だ。

巨人と同じ鉄でできた身体だが、その姿は人間と同じような雰囲気を持っている。

だが、人間は飛ばない。それが余計に、異質な印象を醸しだしている。

そんな存在が、先ほど少年の目を照らした赤い光を身に纏いながら、宙に浮いていた。

綺麗、と妹が呟くのが聞こえ、少年も思わず頷いていた。味方である巨人たちには見知らぬものを見る恐怖があった。

しかし、上にいる“人”は、同じような姿をしているせいかな、そんなものはわいてはこなかった。

ただ、啞然としていた。

不意に“人”がこちらを向いた。

その顔は巨人のような一つ目ではなく、二対の蒼い目をもち、口元にはマスクを被ったような造形をしていた。蒼い目の光はことのほか強く、思わず少年はその身が竦むを感じる。

『今のうちに逃げなさい』

その声は思ったよりも若い、と思った。近所にいる年上の若者くらいだろうか。

張り詰めるような厳しさはなく、こちらを思いやる優しい声だと思った。

頭がついていかない少年はなんとかその声に従い、妹を背負ってやる。

そして、宙にいる“人”を背に走り出した。慣れたもので、その速度は普通るときよりも落ちることはない。妹もおとなしく頼るべき兄の身体にしがみついていた。

少年が幾分か走ると、背後からあの怪物らしい叫び声がする。しかし、それはもう怖くはなかった。

赤い光に焼かれてしまったように、もう恐怖は存在しなかった。

妹が耳元で兄に話しかけてくる。

走りながら返事をする、妹はまだ呆然としているように言う。

あれが、“かみさま”というもののなの？

少年はそれに答えることはできなかった。

それよりも、大人にこの事態を伝えたくて仕方がなかった。

幼い少年には余り過ぎる事態だ。大人たちならきっと上手に対処をしてくれる。

そうすれば、あれのことも教えてくれるに違いない。

彼は妹を気にしながら、ただ村への道を走り続けていた。

第13話『見知らぬ変容』

センサーが拾う周囲の反応は極めて鈍いものだ。

だが、今の状態はある意味分かりやすい。

あの爬虫類のような怪物を中心に起こっていることだからだ。

その霧がかかったような反応の中で、一際強い反応が出現している。

そして、それは目視できるほどに近くに存在していた。

全てを見守るように、翼で空を飛んで。

「アルデバラン!!」

倒れこんだ“ヴァリス・ローラン”の内部で、レインは怒鳴り声を上げた。

昨日と全く同じ状況だった。

まるで力を誇示しているかのような翼の光は、レインの蒼い瞳を焼いた。

「何で来たんだ、お前には関係がないだろう!!!」

通信が届くか分からないので、外部のスピーカーで怒鳴りつける。

感情に任せたまま、というのは一人の大人としては恥ずかしいことであることは知っていた。

しかし、この場、このときでそうせずにはいられなかった。

《すみません、レインさん》

そんなレインに対して、目の前のモニターに通信画面が開く。

それは、この場ではおかしなほど明瞭なものだった。

ゼルカノンの複雑な顔が画面に映されている。シートに座ってい

るらしい首から下はよく見えないが、昨日と同じあのスーツを着込んでいるのだろう。頭部にはレインたちと違ってヘルメットはなかったが、背後の装置から頭部を囲うように光の輪のようなものが発生しているが気になった。

だが、そんなことはどうでもよかった。

「お前は帰る国があるんだろうが！その機体は、ここで使うべきじゃないだろう！！」

《、しかし：》

ゼルカノンは何かを言いかけるが、はっとしたように通信を切る。モニターを見ると、レインの前方に転がっていた怪物が起き上がるうとしていた。

その身体には、何かを叩きつけられたらしい焦げたような痕が刻み付けられている。

どれほどの熱量なのかは分からないが、まだ怪物には動くだけの力があると見受けられた。

その視線は、襲撃を邪魔したあの“人型”に向けられている。完全に頭に血が昇っているか、この場でより力のあるものを優先すべきと本能が告げているのかもしれない。

“人型”が大地に降りる。器用ともいえる動きで翼が畳まれると、怪物に向かって、格闘技のような構えをとる。その手には、“ヴァリス”のライトサーベルのような長い棒が一本握られているのが見えた。

始まりは一瞬だった。

どちらが仕掛けたのかも分からないほどに、突然始まった。

怪物の方は果敢に仕掛けるが、“人型”の拳に打ち払われる。それでもすぐに体勢を立て直し、恐るべき執着力で“人型”を食い破らんばかりに襲い掛かる。“人型”は動じない。

握っていた棒を横一線に払うと、しなやかな軌跡を描く光が伸びるのが見えた。

それは確かな威力を持っていて、再び怪物の身体を打ち据え、その熱で焼く。聞くに堪えない悲鳴がし、怪物は怯んだが、興奮しきったせいか、先ほどのような醜態を見せることはない。

人間がそのまま戦っているようなその光景に、レインはしばらく圧倒される。

昨日とは違った、白兵戦のような戦闘。

その動きは兵器というよりも格闘家のそれに近かった。

それも一流のものだ。

“戦うために育てられた”

それは、こういうことのためだったのだろうか。

《レインさん》

いつの間にか、“ローラン”の傍にパールピンクの装甲の“リヴァイス”が接近していた。

それほどまでに“人型”の戦いに魅入っていたのか。

いや、これは油断というものだった。

「…まだいたのか。帰れって言ったろう」

《ごめんなさい…》

幾分か冷静になった声でできるだけ厳しく言うと、落ち込んだ声が

返ってくる。

音声だけの通信でも、その向こうにあるだろうしゅんとした様子が想像できて、この状況のなかレインは苦笑する。

調子が戻ったのを確かめ、レインは“ヴァリス・ローラン”の身体を起こし、体勢を戻す。

「今なら大丈夫だ。帰ってノアを呼んで来い」

レインは昨日のことを思い出す。

昨日は『ゲート』のなかから新たな敵が出現をした。今は“人型”が善戦をしているが、あれよりも大きな敵が出てこないとは限らない。それとセンサーが強めに設定してある“ヴァリス・レヴァルダ”は必要であった。

「あれが終わりならいいが、『ゲート』からまた新しいのが出てきたら敵わん。“ヴァリス・レヴァルダ”が来てくれれば、戦う手段も増える」

《∴それなんですが、》

そこまでレインの声をおとなしく聞いていたアリアが、控えめに発言をする。

報告に引け目を感じなくてもいいのに、とレインはつくづく思いつつ、発言を促す。

《『ゲート』は塞がっているんです。この目で見ました》

レインは拍子抜けをする。

『ゲート』が消えて、後は出てきた怪物を倒すだけ。

それならば、いつものことだったはずだ。

だが、アリアの様子はどこか尋常でないものを含んでいた。

「それがどうしたってんだ。それならもう出てこないはずだろう」
《いえ、それでも、》

これは個人的なことなのですが、とアリアは律儀に前置きをした。

《怖い感覚が消えないんです…。あの怪物から、とても怖いものが
…》

《、レインさん!!》

次の瞬間、“ヴァリス・ローラン”は瞬時にライトサーベルを抜き、襲い掛かってきた怪物を叩きのめした。手ごたえは感じられなかった。まるで、凍った肉にむりやり刃物をつきたてたような感覚だった。

怪物は、痛みに震えることもなく、恐ろしく素早い動きで跳ねながら“ヴァリス・ローラン”から距離をとる。レインは息を吐き、“ヴァリス・リヴァイス”を庇うようにそれと対峙する。

《すみません、》

新たに通信が入るとともに、“ローラン”の横に“人型”が着地した。

憎らしいくらい軽やかな動作だ。

「……いや、いいさ。こっちが油断しただけだ」

複雑なものはまだ抱えているが、アリアの手前、我慢する。それに、それはこの場でなくてもできることだ。

怪物は、まるで重油のような液体を流しながら、こちらを睨みつけている。

ライトサーベルで上手く切ることができなかったが、頭部は袈裟切りのような歪んだ傷跡が残されている。その傷口は、液体の色も相まって底の知れない穴のように見えた。

「デューティ曹長、今のうちに」

《は、はい、ですが、》

アリアは“ローラン”の横に佇む“人型”に釘付けにされたようだった。

彼女はこの存在のことを知らない。

何者であるのかも。

「大丈夫だ。…味方だよな？」

すぐに返事をしてくる。

《そうです。ルブルー大佐は許可をしてくれています》
「フラッドが？」

あの冷静な顔が目には浮かぶ。

ということは、奴が背中を押してここに来たのか。
しかしそれも今考えることではない。

「そういうことだ。こいつは俺たちを攻撃しない」

多分な、という言葉は呑みこんでおいた。

アリアに説明しておきたいことは他にもあったが、ゼルカノンに聞かれずにはおきたいことだ。

「分かったなら行動しろ。早いところアを連れてきてくれ」

《は、はい。――――――あ》

アリアの空気の抜けたような声とともに、レインの視線は、前方に向けられる。

怪物の顔が、“割れていた”。

いや、割れようとしていた。

まるで、果物の皮が剥かれるように、ゆっくりと、レインのつけた傷口から。

そこから覗くのは、液体と同じ黒ではない。

青紫色をした、“石”だ。

石のような体をした何かが、黒い液体に混じって出てこようとして

いる。

欠伸の出てくるくらい、ゆっくりとした変化だった。

生き物の皮が剥がれる音と、果物が弾けるような音。

それにレインの意識は引き戻され、“ヴァリス・ローラン”の兵器を起動させる。

見ている必要はない。

待つ必要もだ。

だが、構えられた“ローラン”の銃は、“人型”によって制される。

「おい、」

《攻撃するな》

それは、先ほどの苦笑する声とは打って変わって、鬼気迫ったものだった。

《今攻撃すれば、あれは全て吸収し、学習する》

「なんだって？」

まさか、と思いつつ、その変化を観察する。

黒い液体に塗れながら、その実態を表そうとしている“元”怪物。その変化を、最後まで見ろというのか。

《じっとしている。“進化”が終わった瞬間に仕掛ける。貴方は今のうちに帰って。応援を呼んで下さい》

後半はアリアに向けて通信されたらしく、背後の“ヴァリス・リヴァイス”が後ずさるのを感じた。

レインは首を振り、近くににいるうちにアリアに通信をする。

「ノアには通信を強化する装備を持ってこいと伝えてくれ。あとは、

とにかく弾数を持ってこいとも」

そして、横にいる“人型”を見る。

先ほどまでと違い、それは身体中の羽状パーツを光らせ始めていた。まるで、目の前の敵に対し、舌なめずりをするように。

《来ますよ》

そう言って“人型”が構えるのと、怪物の皮が弾けるように脱ぎ捨てられたのはほぼ同時だった。

第14話『異邦者との対峙』

「…ええ、先ほど行きましたよ」

フラッド・ルブルは、一人自室に居た。

備え付けられた電話の受話器をとり、一人話しこんでいる。

その部屋の電話を使うときは、あまり聞かれたくないときだ。

責任者レベルで留めておくべき話のような、そんな話をする。

それはあまり受け取りたくない類のものであったが、今回のフラッドの表情はそんなことは見受けられない。しいて言えば、待ちかねたかのような表情だ。

「目撃されることは承知の上です。“ヴァリス”の新型とでも言うておきますか？」

そう言って笑うと、相手の声をおとなしく聞く。相手は若干声を荒げているようだった。

だが、余裕の表情は崩れることはない。

「冗談が過ぎましたね。…ええ、まだ細かい検査等はしていません。表面上は落ち着いているようでした。身体能力の方はまだ分かりませんが、何かあったらベルモットに抑えさせます…」

しばらく話を続けたあと、溜息をつきながらフラッドは受話器を置いた。

そして、椅子に背中を預け、天井を仰ぎ見る。

これから作戦室に向かわなければならなかったが、フラッドは動くことはなかった。

「分かりきった結果など、見る価値も無い…」
独りそう呟くと、目を閉じる。

順調に事は進んでいた。

だが、ひとつだけ懸念がある。

それもいずれは解決されるだろう。

レインたちには、悪いことだが。

心にも思わないことを考え、静寂のなかフラッドは笑う。

「あとは、お前が戻ってくるだけだ」

そのあとに呟いたはずの言葉は、誰も聞くことはない。

それが、どのような表情をして語られたのかも。

視界に焼きついたのは、宙を自由に飛びまわる青い軌跡。

そして、それを追いかける赤い光。

レインは、上空で繰り広げられるそれを、ただ見ていた。

ただし、操縦桿を握る手はそのままに。

息を詰め、自分がやるべきことを窺っていた。

ポイント2周辺に広がっていた森は、木々がなぎ倒され、みる影もなくならうとしている。

宙に浮いた“ヴァリス・ローラン”の中で、レインはそれを見下ろしている。

それに対しては何の感慨もない。レインの懸念は、先ほど離れた“ヴァリス・リヴァイス”が基地まで帰れたかどうかだった。

まさに風のように宙を自在に動く対象を、“ヴァリス・ローラン”のカメラはとらえていた。

まるで果実の皮がむけるかのように姿を現した、青紫の宝石のような身体をした、怪物。

身体の形は、表皮があつたときと同じ形をしていたが、そこに目も、口もない。

ただ、その形をした頭があるだけであり、その中には何かが蠢いているような容貌をしていた。

そんな見るからにおぞましい化け物に、“人型”は果敢に向かつていった。その拳が頭を綺麗に捉えたが、そこにヒビのひとつも入ることはなかった。

自分を守っていた皮を脱ぎ捨てた怪物は、先ほどまでとは違い、自由に飛び回っている。その俊敏な動きのなか、太陽の光がその身体を照らし、時折強い光を放っていた。

そのこと自体が、レインにはとてもおぞましいものに感じられた。まるで見たこともない体をした存在。先ほどまでは、まだ生物の形をしていた。

だが、ただの石のような身体をしたそいつは、自分の意志で動きまわっている。先ほどまでとは違い、吼えることもなく。

“人型”は左右非対称の翼を広げながら、それと対峙をし、打ち合いをする。“人型”の攻撃が入るたびに、辺りには無機質な音が響き渡るが、特にダメージを負った様子はない。

その様子を注意深く観察しながら、レインは息を呑む。
あんなものは報告されたことはない。

あくまでも、『ゲート』から出てくるのは“生き物”の形をしていた。

『ゲート』が閉じてしまえば、あとはこっちのもの。それを冷静に処理すればいい。

だが、あれは何だ？

思考をしているレインは、“ヴァリス・ローラン”の肩部のランチャーを起動させ、操縦桿のトリガーを引く。

“人型”の隙を突き、こちらに向かってきた怪物は、弾の雨をかいくぐり、いくつか命中しても動きが鈍ることはない。そのまままるで宝石の弾丸のように“ヴァリス・ローラン”に突進する。

だが直撃する瞬間に避けられると、まっすぐに大地に墜落した。

地響きとともに、凄まじい粉塵が巻き起こる。
なぎ倒されていた木々が吹き飛ぶ。

おそらく当たっていれば頑丈に作られた“ヴァリス”の装甲でも一瞬で粉々になっていただろう。

ぞっとしている暇はない。レインは、そのままその粉塵を注視する。

緩やかな風で粉塵が流れていくと、それは傷1つ無い状態でそこに存在していた。

頭の部分を動かし、目が無いというのに周囲を窺っているようだった。

衝撃によるダメージも無い。

《予想以上に硬い》

通信機から、ゼルカノンの声が聞こえてくる。

動揺しているような様子はなかったが、焦燥は感じられた。

《もしかしたら、今日現れたものじゃないのかも》

「どういことだ」

レインは反射的に言う。

ゼルカノンは少し考えたあと、言葉を続ける。

《あいつはさっきの“ヴァリス”、ですよね？それが見つけるまえに、ここに潜んでいたのかもしれませんが。そこで、この世界に順応していた…》

その内容は、レインには寝耳に水どころか、初めて聞くものでよく理解ができなかった。

「おい、どういうこった。そうすると、あいつらはどうなるんだ」
あいつら、というのは『ゲート』から出てくる怪物のことだった。

レインが教えられたのは、出てきた怪物を倒すことである。

もしそれが失敗したら、人間が犠牲になる。

それを念頭に、今まで戦ってきた。

だが、あいつらがこの世界に出てきたあと、ということは考えたこともなかった。

《あいつらが来るのは、こことは違う世界なんです。だから、出てきたばかりでは世界に慣れていない。だからそのときに叩く必要があるんです》

慣れていないうちに、倒してしまう。それが、今までレインたちが行ってきた対処法だった。

だが、レインたちの目を掻い潜って出現した怪物はどうなるのか。

知らぬうちに、この世界に順応していった怪物。それが何を意味するのかは、目の前の実物を見てもよく分からない。

「…順応すると、ああなるのか」

《それはまだ確証がありません。ですが、実際に時間が長いほど、奴らは…》

レインは特殊スーツの下で嫌な汗をかいていた。同時に、通信機に向こうにいる人間への動揺を隠しきれないでいる。

昨日レインを助け、今日もここでレインと戦っている少年。

今日の朝自分の置かれた立場を知り、戸惑いを隠せないでいた少年。そしてレインに指摘され、自分の力の大きさをようやく知った少年。

それは、通信機に向こうにいて、あの“人型”を操っている存在と同じなのか。

レイン、いやこの世界の大多数の人間が知らないことであるあの怪物のことを知っているのは、何故なのか。

今度は怒鳴ることはしなかった。

いや、できなかったのだ。

あまりに、色々なことがあるすぎて。

それでも、地面の怪物の頭がこちらに向けられると、レインは戦士である自分を取り戻した。

その頭はゆっくりと“開かれる”。
まるで、花が開くかのように。

そして、そこから身体と同じ宝石の矢が放たれる。
残酷なまでに美しく輝くそれをレインは“ヴァリス・ローラン”を横に移動させ回避する。
しかし、それは見たことも無い動きで、“ヴァリス・ローラン”を追いかけてくる。

「くそっ!!!」
悪態をつき、再びランチャーを連続して発射する。
怪物とは違い、直撃するといくつかは砕くことができた。
しかし、次々と発射されるそれに攻撃が間に合わない。

レインは他の武装を起動させようとするが、足を止めると確実に命中される。

レインは向きを変えると、まだ残っている森の中へ逃げ込もうとした。
だが、“ヴァリス・ローラン”の機動がその矢に対して間に合うのか、という懸念はあった。
それでも、何もしなければ死んでしまう。

命が晒される感覚を久々に感じながら、レインは決死で操縦桿を握る。
だが、一瞬の間隙に、その矢が“ヴァリス・ローラン”の眼前に迫

るのが見えた。

『先に死ぬのは無しですよ』

脳裏に、かつて聞いた生意気な声が浮かんだ。

衝撃とともに、操縦室のモニターの映像が揺れるのが見えた。

第15話『折れる翼』

『もう終わりですか』

『ああそうだ。これ以上やっても意味がない。休みも大切なんだよ』

『そうですか、分かりました』

『：お前ももうちょっと年相応にできないか。怒らないから』

『自分ではそのつもりですがね。常に貴方の背中を狙うことで頭がいっぱいですよ』

『それは違う！断固違うぞ！！もういいからとっとと着替えて来い！』

『分かりました。じゃあ明日もよろしくお願いしますね』

懐かしいやりとりを聞いた気がした。

しばらくして、レインの意志は覚醒しはじめる。

おそるおそる目を開ける。モニターの映像は切れて操縦室の中は真っ暗だった。衝撃を受けた身体は、どこか他人のものようだったが、どこにも損傷は受けていない。

操縦桿を握っていた手だけはそのままだったが、機体の方は地面に落ちたようだった。

どれくらいの間気を失っていたのか。焦る気を抑えながら、“ヴァリス・ローラン”を再起動させる。強制終了したはずのシステムには特に問題は無いようだった。さすがに損傷はいくらかあるらしい。

墜落してあの攻撃から逃れたのだろうか。

とにかくレインは“ヴァリス・ローラン”のカメラを起動させた。

その映像が表示されると同時に、レインは身体を硬直させた。やはり墜落したらしく、“ローラン”の身体は地面に降りていた。

そして、目の前にあるのは、あの“人型”の背中だった。

翼は折りたたまれ、羽状パーツだけが光っている。

だが、そのパーツは所々折れてしまっていた。

身体のところどころが宝石の矢に貫かれ、あの完全無欠の姿は消えてしまっていた。それぞれは致命的な損傷には至っていなかったが、それでもダメージを受けていることは確かだった。

「アルデバラン！！」

顔から血の気が引くのを感じ、レインは必死に通信機に向かって呼びかけた。

《…ああ、無事でしたか》

そう言って画面に映されたのは、幾分か消耗したような少年の顔だった。

そこに微笑を浮かべなが、息をつくゼルカノンは、年齢に似合わないような落ち着きを見せていた。

今あわてているレインが、情けなくなるほどに。

「お前、俺を庇ったのか！？」

《ええ、咄嗟にね。うまく捌けなくてこのざまですが》

目の前の“人型”がゆっくりと動く。

それは今までにないほどに緩慢な動作に見えた。

レインは自分のミスを心から悔やみながら、状況を確認する。センサーの類は極めてクリアなものだった。

霞がかったような反応は消えてしまっていた。

それが、何を意味するのか。

「奴はどこに行った!？」

ゼルカノンがゆっくりと息を吐いたあと、“人型”はある方向を指指した。

《ついさっき、あっちに向かって飛んでいきました》

レインは冷静になってきた頭でそれを認識した。

この世界の地理を把握しきっていないだろうゼルカノンにも、それが分かったようだった。

《あちらには、何がありますか》

「…王国の首都だ。俺たちの基地も近くにはあるが…」

そこへ帰還したであろう“リヴァイス”は損傷している。“レヴァルダ”だけであれに対抗できるか、といわれれば、極めて不安だとすれば、やるべきことはひとつだった。

《僕が追いかけます》

そう言って“人型”は機体を動かし、奴が消えた方向を向く。

しかし、幾分か冷静になったレインには、気になることがあった。

「おい、どこか痛めたのか」

どう見てもまともではない汗を額にかいているゼルカノンにそれを指摘すると、彼は眉間に皺を寄せた。

まるで、触れてほしくない部分に触れたかのようなようだった。

急がねばならない場面ではあるが、それを無視するわけにはいかなかった。

「俺が行く。これは俺の国の問題だからな」

《そんなこと言っている場合ですか？》

レインの言葉に、事の他きつい口調が返って来る。しかし、すぐに小さな声で「すみません」という謝罪が入る。

《どう考えても僕の方が早いでしょう。ここは任せてください》
だが、その様子はどこか普通ではない。そんな人間に全てを託すほどができるほど、レインは無責任ではなかった。

「いや、どこか痛めているんだろ」

何度も戦いを経験したその目は伊達ではない。レインは、気まずそうなゼルカノンの顔を注視する。

その考えに至ったのは偶然だった。

「もしかして、機体のダメージがそのままお前にフィードバックしているのか？」

その言葉に、ゼルカノンの表情が劇的に変化したというわけではなかったが、射抜くように向けられていた視線が一瞬反らされたのが見えた。

それだけで、レインは理解してしまった。

同時に、どうしようもない心地に叩き落とされる。

「…なんでも言わなかった」

《死ぬわけじゃないですから》
それに、と一息置いた。

《これはこの機体の戦闘においては必要なことなんです。こうしたければ、ただの戦車と同じになってしまう》

ゼルカノンの言葉はどこか言い訳のようにも感じられたが、彼にどうこうできる問題でもないのだろう。

尋常でない力を持つ機体。その力を直接見ているレインにとっては、何となく納得ができる気がした。操縦者に一切負担がかからない、というのならそれは恐ろしいことだろう。

だからこそ、ゼルカノンにはその力をよく考えて使ってほしかった。だが、実際には違っていた。

自分の代わりに、文字通りダメージを肩代わりした少年。

彼の言葉に動揺したとはいえ、他ならぬ自分の油断でそれを受けさせてしまったのは、レインにひどく苦いものを残した。

だが、後悔をしては何もならない。今こうしている間にも、多数の命が危険に晒されている状態だった。

本当に大丈夫であることを確認し、レインは少しの間考える。

「昨日の攻撃は使えないのか。あの翼からエネルギーを発射するようないな」

《今はダメージとは無関係の問題で使うことができません。咄嗟に出すことはできるかもしれませんが、あまり期待はしないほうがいいです》

やはり無理をしようとしていたんじゃないか、と思いつつ、レインは言葉を続ける。

「さっきみたいな戦闘はできるか。格闘戦は」

《それは問題ないです。手足の駆動は無事ですから》

身体はところどころ攻撃を受けていたが、確かに五体満足であり、動きに問題はなさそうだ。

そして、もうひとつ。

「あれに光線兵器は通じるのか？」

《おそらくは大丈夫です。しかし、ある程度の熱量がないと無理でしょう。あの動きで当てられるかどうかは貴方次第ですが》

随分と生意気な口調だった。話しているうちに余裕が戻ってきたらしい。

レインはヘルメットに覆われた顔の代わりに、太ももを2、3回叩いて意識をはっきりさせる。

こちらも調子が戻ってきた。

「よし、後は移動しながら話すぞ。お前にも働いてもらうからな」

《何か作戦でもあるんですか？》

「ああ、とりあえずはな」

そして、落ち着いてきた少年の顔をじっとみる。

見れば見るほど、レインの脳裏にあるものと似ていた。

だが、細部は全くの別人だ。

そして、それと彼は全く関係がない。

レインの問題だ。

そして、彼は自分の痛みも構わず、身体を張ろうとしてくれる。

昨日今日命を助けてくれたのは、他ならぬ彼自身だ。

それを認められないほど、レインは子供でもない。

「もう少しだけ頑張ってくれ。俺も、一緒に頑張るから」
その言葉に、少年がようやく顔を綻ばせるのが見えた。

第16話『這い寄る影と舞う光』

“ヴァリス・レヴァルダ”は発着場から発進した。

その巨体はいとも簡単に浮かびあがって、大地から飛び立つ。

操縦室で、ノア・ゲイルシュタインは口の中がカラカラになっているのを如実に感じていた。

レインがいなくなってから数時間。

“リヴァイス”はちゃんと戻ってきたが、その装甲は見るも無残なものとなってしまっていた。

修理のことを考えると胸が痛むが、中にいた少女が無事だったのは何よりも嬉しい。

だがそれを喜ぶ暇はない。

基地のセンサーには依然反応は無かった。

だが、センサーの一部が曇ってしまったように反応しない場所がある。

そして、その場所はどんどん近くなっているのが分かった。

戦い、というほどのものは経験はしていなかったが、“ヴァリス”での実戦は幾分か自信はあった。

だが、いくら経験をしようともこの緊張には慣れることはないだろうと思っている。

“ヴァリス・レヴァルダ”は基地の上空で待機をしている。

その背後を少し行った先には、シュダル王国の基地が存在している。

センサーに反応らしきものがあつた時点で避難勧告が出され、街のあちこちにあるシェルターに避難を始めているはずだ。だがまだ

まだ人の影は見え、少し混乱をしているのが“レヴァルダ”のカメラでも見ることができた。

“レヴァルダ”が負ければ、惨劇になることは目に見えている。そう思うと、特殊スーツを着ているというのに、汗で操縦桿の手が滑りそうだった。緊張のあまり失敗をした、という経験はあまり無いが、それで安心して臨む、ということもできない。

“レヴァルダ”の他の機体より鋭敏なセンサーが、遠くの反応を捉え始める。何かを中心にして、大きな円を描いたぼんやりとしている反応。それが、結構な速度で基地の方へと向かってきている。背後にある街を目指しているのかもしれない。その可能性も考えて、上空に来る前に先制攻撃をしたほうがいいだろう。

“レヴァルダ”の背中にあった大砲を起動させ、両肩へと設置させる。“ローラン”にあるものと似ていたが、幾分か大型に作られている。単純な火力なら“レヴァルダ”の方が上だ。

《対象、距離12000まで接近しています》

通信機から入るオペレーターの声には、若干のノイズが入ってしまった。すぐそこにあるはずの基地からの通信で、そういったことはまずないはずであった。今の状況が異常であることを改めて知る。

対象の速度は凄まじく、その通信の少しあとに、目視ができる位置まで来ていた。

カメラを拡大させると、それは一匹だけで予想外の大きさ、そして姿をしていた。

「おい、ありゃ何だ!？」

《こちらも確認しています、ですが、分かりません!!》

思わず上げたノアの声に、冷静であるはずの軍人は明らかに動揺し

ている声で叫んだ。

振りそそぐ陽光を反射しながら、それは存在していた。
見たこともない輝きを放つ、青紫色の結晶。

それが、何かの生物らしいラインの身体を形成していた。

憔悴しきったアリアから、敵がおかしいことは教えられていた。
だが、その姿は、想像していた以上に異常だった。

あれが『ゲート』から出てきた怪物だとして、あんな姿をしている
ものは聞いたことがない。

最近の怪物は“虫”の姿をしていることが多いが、以前は獣などの
姿をしていたらしい。

だが、あれはそのどちらでもない。

（そもそも生物なのか？）

動揺を押さえ込み、ノアは両肩の大砲の照準を対象に合わせる。

今のうちに命中させれば、すぐに沈黙をさせることができる。

調査はそのあとでもいい。

長引けば、背後の王都に被害が及ぶのだ。

凄まじい速さで近付いてくる怪物に狙いを定め、トリガーを何回
か引く。

すると、大砲から光の弾丸がいくつも飛び出した。

弾丸はまっすぐに怪物へと飛び込んでいく。

そして、命中する瞬間。

怪物は弾丸の周囲を回転するように飛行をし、その全てを避けき
った。

「は!？」

自分に向かってくる速度のあるものを、まるで自然に回避した。

ノアは再び発射をするが、そのどれもが同じように外されてしまう。まるで、目の前の障害物を避けて歩くかのように。

(おいおいおいおい!?)

動揺しきったノアを余所に、怪物は速度を殺さないまま近付いてくる。

何とか身体を動かし、ノアは“レヴァルダ”の別の武装を起動する。

怪物が“レヴァルダ”の目の前まで肉薄する。

ノアは攻撃、それだけを考えて、切り替わったトリガーを引いた。

目の前に来た怪物の頭に、至近距離での砲撃を試みる。

胸部にあったハッチを開き、そこから砲門を出現させる。

“レヴァルダ”への反動も少なくはないが、威力は折り紙つきのはずだった。

怪物が、“レヴァルダ”の機体を山なりに避けなければだが。

目の前に迫っていた怪物が、“レヴァルダ”の視界から消えたことを、一拍遅れてノアは認識する。

予想外の事態に跳ね上がる心臓をおさえつけ、慌てて機体を反転させる。

怪物は、“レヴァルダ”を振り返ることもなかった。
真下にある基地を見ることもなかった。

ただ、その先の、

「おいおい、ちょっと待てよ!!!」

あまりに間抜けな話だった。

軍人であるレインとの差がどうのこうの、という問題ではない。

“レヴァルダ”は機体中の推進器を全開にしてそれを追う。
もはや砲撃はできなかった。

あの速度では、砲撃が届くころには王都の上空に居るだろう。
体当たりでもなんでもして、奴の動きを変える。

こうなれば、しつこく食らいついてなんとかしてやる。

“レヴァルダ”の速度はそれほど速くはない。
だが、何もしないよりかはずっとマシだ。

足元にあるペダルを限界まで踏み込み、やがて“レヴァルダ”が
加速を始めたときだった。

センサーが、背後にとある反応をとらえる。

それは一瞬にして前方へと移動した。

おそらくは、瞬きをする間ほどの時間だっただろう。

そして、ノアが気付いてペダルを踏む足を緩めたとき、無機質な

音とともに目の前の怪物が下へ弾き飛ばされた。まだ王都は先であり、下には街道しか存在していない。

怪物は瞬時に大地に激突する前に体勢を整え、驚くことにその直前で停止する。

だが、止まってしまったその上から、再び衝撃が降り大地へと叩きつけられた。

一瞬にしてその地点が粉塵に飲み込まれる。

だが、そこからすぐにあの怪物が飛び出した。

ノアの仕業かと思ったのか、“レヴァルダ”にまっすぐ向かってくる。

胸の砲門で狙いをつけるが、その前に立ち塞がるものがある。

その“人型”は、向かってきた怪物を真っ向から受け止めた。

「お前、」

ノアはしかと覚えている。

レインのすぐあとを追うように、第1基地から飛び立った、あの機体。

その背中へは、見送ったときとは違い、あちこちに損傷が見受けられた。

《大丈夫ですか!?!》

不自然なまでに明瞭な通信が入ってくる。

それに頭を殴られたような衝撃を覚え、ノアはようやく平静を取り戻す。

「おま、いや、君はレインと行ったんじゃないのか!?!」

声だけの通信に、あの顔を思いだしながら叫ぶ。

どう見てもノアよりもずっと子供が、怪物と対等に戦っている。

それを、どう受け止めたらいいいのか分からなかった。

《レインさんは無傷です。それより、あの街から離さないと》

「あ、ああ分かってるさ」

自分よりも年下の少年があくまで冷静なことに対し、つい反論めいた口調になる。

そんなノアを余所に、目の前の“人型”は受け止めていた怪物を蹴り飛ばした。

損傷を受けていても、動きに問題は無いようだ。

しかし打撃を受けても、あの硬質な表面に決定的なダメージはない。レインは“人型”が特殊な力を使うのを見たらしいが、それで倒すつもりなのだろうか。

《僕があいつをひきつけます。貴方は、街を守ってください》

「あ、ああ」

ノアはまだ彼の正体を知らない。

だが、“レヴァルダ”と“人型”の機動の差をたった今見せ付けられ、その選択に納得をしたただけだ。

この場にいない無事だというレインが気になったが、今は怪物を何とかするのが先だ。

“レヴァルダ”が街の方へ行くと同時に、再び怪物と“人型”が打合う音がした。

あのまま打撃を続けて倒すつもりなのだろうか。

“レヴァルダ”も一応は戦闘の準備をしておく必要があるだろう。

街を背に“レヴァルダ”はその戦闘を確認する。

宙を自在に飛びまわり、その拳と身体をぶつけあう二つの影。

それは、肉眼ではただ二つの光がぶつかりあっているようにも見え

た。

少なくとも、そのような戦闘は見たことが無い。

あのような速度に対応できるのは現在では“リヴァイス”か“アイネス”だけだ。

どちらもこの場に来ることはできない。

そして、その速度に対応をし、まるで人間そのもののように戦うあれは何だ？

その力と駆動は、“ヴァリス”や他の兵器には無いものだ。

あれは、何のために作られたのか？

“ヴァリス”と同じくあのような怪物と戦うためか。

それとも、同じ……

“人型”が、何度目か打合った瞬間に少しよろめいた。

それを逃さぬように、怪物は畳み掛けるように連打する。

“人型”は損傷をしている身体を庇うように怪物から離れた。

それを見計らうかのように、怪物の頭にあたる部分が開いた。

思い出したように、“レヴァルダ”に向けて。

「！」

ノアは準備をしていた“レヴァルダ”の「シールド」を展開する。

両手を大きく横に広げ、その前に光でできた“壁”が出現した。

何かが来た瞬間、それを受け止められるように、できるだけ大きくだ。

怪物の開いた頭から、何かが出現するのが見えた。

センサーには反応はなかったが、それはノアの身体を硬くさせるには十分すぎるほどだった。

しかし、センサーには遠くからひとつの反応があった。
それはある一点に向かう。

そして、一瞬の光とともに目の前の怪物が砕け散った。
大量の硝子が壊れるような音ともに、きらめく結晶が辺りに散る。
一部残った大きな塊があったが、再び飛来した光で粉々に砕かれる。

一瞬の緊張の後、きらめく結晶を残して、あの怪物は消えた。
センサーでも、反応が無い部分が消え、きわめてクリアなものに戻っていた。

怪物が、消えた。
いつものようにその命を散らすことによつてだ。

ノアはしばらくその欠片たちを眺めると、はっとしてシールドを消した。
“人型”は、痛みに耐えるかのように身体を傾けながらなんとか飛んでいた。

「…無事か？」
《…なんとか、です。終わったみたいですネ》

通信機の向こうからは、ほっとしたような声が返ってくる。確かに終わった。だが、ノアには未だに事態がつかめない。

「一体、何があったんだ？」

《それはそちらのほう知ってるはずですよ、ほら》
それに対応するように、“人型”が遠くの山脈の方を指した。

それと同時に、山脈の間が、断続的に光るのが見えた。

それでノアは全てを納得した。

確か、レインが消えた方角である。

「：あいつは無事だったんだよね？」

《ええ、ちゃんと戻れるはずですよ》

どうも年相応ではない少年は、ようやく笑っているように思われた。

ノアの脳裏にはちらつく影があったが、それは何とか飲み込んだ。それは、彼が聞くべきことではない。

「じゃあ、戻る、のか？この欠片の調査を依頼しないと…」

ノアは少年が自分たちのところへ行くのかどうか少し迷っていた。だが、少年のほうは迷いなく返答をする。

《一応、偉い人の許可はあるようなので、お邪魔させてもらいますよ》

幾分か冗談が混じった返答に、ノアは毒気が抜かれたようだった。だが、すぐに笑いながら返事をしてやる。

「まあそんな身体でどっか行くのも無茶だしな。首根っこ掴んで
も連れて行ってやるよ。俺の権限でな」

少し笑ったあと、通信は切られた。

ノアはシートに身を預け、大きく息を吐く。

得体の知れないはずの少年。

それもとんでもない力を併せ持った。

それに対して、他愛ない話ができる。

それも、記憶に居た人物と重ね合わせているだけなのかもしれない。
そう思うと、あの少年に対し、何か納得ができない罪悪感が湧き上
がっていた。

第17話『個々の思惑』

雪が降っていた。

雨のような音をたてることもなく、静寂のなか、大地に降り積もっていた。

白い雪を被った森のなかの一角に、明らかに材質の違う巨体が存在している。

それは、周囲の冷気に震えることもなく、積もり続ける雪をそのままにしてただそこに立ちつくしていた。

「だからね、人が足りないのよ」

その中にある、操縦室と呼ばれる空間で声を上げる人間がいた。

周辺の極寒の空気を余所に、同年代よりずっと鍛えられた身体をしたその人間は、薄いインナーの上に張り付くような特殊スーツしか着ていない。

だが、その空間は、周囲のあらゆる環境から守られるように作られていた。

冷気以外は穏やかなその環境で、中の人間に害が及ぶようなことはなにもない。

生命を守るための空間、たとえば耳心地はいいものだろうか。

「いくらなんでも、私一人で帝国領を全て見回るなんて無理です」

《だが、しないよりはマシだ》

声を張り上げるが、この場にはいない相手の返事はにべもない。

呆れたように肩をすくめ、粗暴な仕草でシートに身を沈める。

だがそれで何が変わるか、ということも分かっていた。

「別に飛び回るのは結構ですがね。私はあの子のように出来は良くないんですよ」

《それは我々もわかっている。だが、“ヴァリス”以上の速度で飛べる機体はない》

「無人機は？」

《とつくにまわしているが、効果は芳しくない》

呆れたものだ。勝手に王国の基地に“ヴァリス”をまわしておいて。

とんだ貧乏くじだ。

腕の破損さえなければ、自分も王国に行けていたものを。

「で、上層部はどうなってます？」

《紛糾している。さっさとその“人形”をこちらに寄越せ、だとかそんな得体の知れないものを呼ぶな、など好き勝手だ。厄介なものを手元に置いておきたくないか、王国にパワーバランスを傾けたくはないのかどちらかにしてほしいものだ》

その様子と内情がありありと想像できて、一人息を吐く。

“ヴァリス”は両国でそれぞれ製作されたものだ。争いが無いとはいえ、“ヴァリス”や操縦者が国境を越えられるのは、今までのことを考えると奇跡に近いのである。今のところ、“ヴァリス”は世界共通の兵器とされているが、実際は、その所有権ははっきりとされているのだ。

今のところ、帝国と王国の所有機は半々だが、向こうがまた一機作ったとすると、こちらにも一機作らなければならないという不文律が存在している。戦力の増加は必要事項だが、その裏では長い間続いてきた血の歴史がある。実際は、操縦者が限られているので、そのような人たちごっこは幸い行われていない。

そんななかを突如踏み込んできた得体の知れない兵器がひとつだ。揉めないほうがおかしいというものだろう。

「私もそろそろ見てみたいんですけど」

まさか、帝国にくるまでお預けなのだろうか。

だとしたら、いつになるか分からない。それほど我慢強くはできないし、そんないさかいに付き合いたくは無い。

《なんとか王国には連絡はついている。技術者を呼ぶついでに“ヴァリス”の交代もするかもしれん》

だから待っている、と言わんばかりの口調に、肩をすくめて見せる。

それを見たのか見ていないのか、しばらくは索敵を続けるように、と続けて強引に通信を断ち切られた。

誰も咎めるものが居なくなつたのを機に、シートに深く身を沈め、操縦桿やパネルを破損しない程度の体勢で足を投げ出す。そして、モニターに視線を投げかける。

そこには、知らん顔をして降り積もり続ける白が広がっている。見ている分には綺麗だが、外にできればそんな悠長なことも言っていられないだろう。

それに、踏み荒らされた雪ほど醜いものはない。

その“人形”は分かっているのか。

ここ数日出現し、王国にいるらしい存在に思いを馳せてみる。

中に人間がいたらしいが、一体どんな奴なのだろう。

世界を救おうと勇む馬鹿か、関係ない、と斜に構える世間知らずか。

何にせよ、自分には関係がないと思った。

できることなら、世界に利益をもたらしてほしいと願っている。

それはすなわち、命をかけている自分自身の利にも繋がるのだから

ら。

このような考えを口にする、あの堅物の同僚はどんな表情をするのだろうか。

顔を顰めて叱責をするだろうか。諦めた表情をするだろうか。

冷静そうに見えて、実は感情が表によく出るあの端正な顔を思い浮かべると、一人でこの白の中を動き回らせられる不愉快さが溶けていくような気がした。

それは相手にとっては大変迷惑なことであることは百も承知だった。

レインは突如身震いをした。

どうした、と今まで会話の相手をしていたフラッドが一応声をかけてくる。

反射的になんでもないと返してソファに座りなおした。

「お前らの処分については、私が処理しておいた」

仕事机に座ってこちらに向いているフラッドの言葉に、レインは頭を下げ髪を掻き耑る。

釈然としないものはそれで抑えると、面倒なことになるな、と舌打ちをこらえた。

あのあと、基地に帰ってきたレインたちを待っていたのは賞賛半分、戸惑い半分だ。

レインとノアは引き摺り下ろされるように“ヴァリス”を降ろされて報告を催促され、アリアの無事を確かめることもままならなかった。

ゼルカノンは丁重に、というか腫れ物にでも触るかのような扱いでどこかへ連れられ、あれから5日ほどになるが顔を見ていない。

あれから何も出現はしていなかったが、出撃をしたほうがマシだ
と思えるほどの騒動のなかに身を置くはめになった。

「ヴァリス・リヴァイス”の行方不明、『ゲート』の出現、怪物
の変容、王都での騒乱。ようやく收拾がつき始めたのでな」
忙しいのは、責任者であるフラッドも同じなのだろう。さすがに疲
れが見えた。

「で、これからどうなるんだ」
レインの質問に対し、フラッドは首を振る。

「それが王都の方で揉めているらしくてな。はっきりとしたことが
まだ分からない」

「分からない？」
なんでだ、と藪をつつくような言葉は何とか口に押し留めた。

王都での騒乱、は当然の結果だった。

何せ、王都のすぐ近くで戦闘を行ったのだ。そんなことは今までで
も数少ない。人が死んでもおかしくないくらいのことだ。

市民にとって、怪物との戦いは他人事のようなことなのだから。そ
れが間近に迫ってきて、情けないことではあるが戸惑いが起こって
もおかしくはないのだ。

だが、その責任に関しては、やはりあるひとつのことで隠されつ
つあった。

「アルデバラン少尉はどうしている？」
不自然な切り替えだと自覚していたが、レインは聞くに聞けなかつ
たことを口にしてみる。

「検査を終えて、客室で待機をしてもらっている」

あの日、出撃を許可したというフラッドは、どこまでも涼しい顔をしていた。

一応、とゼルカノンは様々な機関から来た人間に連れられていったらしく、なんらかの病原菌を保有していないか、などのいまさらと思える検査にまわされたようだった。詳しく言えないらしいが、身体や脳を調べられ、果ては精神検査までやらされたらしい。

そして、空いた時間でこの世界の詳しいことについて専門家に習われされているようだった。

「強引だな」

レインはすぐに出た感想を口にする。

「まるで、こっちの事情に引き摺り下ろそうとしているみたいだ」

ゼルカノンは知らない国からやってきたというのは本当かどうかは分からない。

だが、あの機体はこの世界のどこにもないはずの存在だった。

突如現れ、当然のようにあの怪物を倒した。

こちらが見たことの無い変容を知っていた。

巨大な力を、手足を操るごとく使いこなしていた。

出会って一週間足らずで、レインはあの少年が得たいの知れない存在であると認識するにいたっていた。人格に関しては、その一週間足らずでよく分かる。いい奴の部類に入るだろう。人付き合いには不器用そうな面もあるが、自分のやるべきことも知っている。そして、レインが作っているような壁に入り込むことはない。

「本人の許可は取っている」

フラッドの返事は、返事になっているかどうかよく分からないもの

だった。

「彼は、とりあえずはこちらの事情に対応をしてくれるそうだ」

レインはかっとな血が昇るのが分かった。

この男と二人で仕事の会話をしているのを、これほど有り難く思ったこともない。

一切の躊躇もなく目の前の机に拳を叩きつける。

「ふざけんじゃねえ！！なんであるかどうかも分からない国の人間の助けなんか借りなきゃならねえんだ！！あの宝石のやつに“ヴァリス”の攻撃が効かないわけでもないだろうが！！」

「だが、必要だ」

フラッドの表情には先ほどの涼しさはなくなっていた。

レインにも見覚えのある、硬質な意志を孕むものだ。

「今世界には4機の“ヴァリス”しか存在していない。たったの4だ。操縦者だけの問題ではない。国の余計な感情も原因で容易に増やすこともままならない。お前たちは、たったの4人でこの世界を救うつもりなのか」

「救う救わないじゃねえ、やるんだよ！！あの兵器を使うことで助かる命があるんなら喜んでそうするさ、だがな、」

レインはこの数日考えていたことをやっとな吐露することができた。

「あいつは帰るところがあるんだよ！！あの機体を持って、必要とされるところが！！！！そんないつどこへ行くかも分からない人間に、何をさせようってんだ！！！！」

遊びでも、なんでもない。

できることなら、最後までつきあってもらいたい。

だが、彼には帰る場所がある。

そこでやるべきことがある。

そんな人間に、もうひとつの大事なことを抱え込ませろというのか。

投げ出すような人間ではないことは分かる。

だが、それは彼のためにも、その国のためにもならないのだ。

「利用できるものは、利用したほうがいい」

だが、返事はにべもないものであった。

「得体の知れない類が出てきて、それに対抗できるものがある以上、使わない手はない」

実際にあれを見たレインには言うことはない。

情けない自分を庇って気丈に振舞っていた少年が脳裏に蘇る。

痛みに耐え、心配をかけまいとする表情。

だが、それで周囲の大人がどう感じるのかを彼は知っているのだろうか。

「私たちは一度大きな勝利と敗北をし、失ったものもある。だから、私は使えるものは使いたい」

「…上層はどうなってる」

フラッドの真剣な対応を見て、昇った血が徐々に下がってくる。

長年の付き合いである。

分からないふりをするほどレインは子供ではない。

「彼を使うことには賛成だそうだ。そして、それを市民に披露することも望んでいる」

「見せてどうするんだ。市民はそんなものに興味はないだろう」

「色々あるんだよ」

最後の言葉は、昔聞かん坊だったレインにいい聞かせるような、力強く、そしてどこか優しいものだった。

結局、レインのなかにある靄は解決はしていない気がするが、気が抜けてしまったレインは力なくソファに身を預けた。

「救われる命とやらがあるんなら、文句は言わない。で、使うとしたらどういう扱いになるんだ？」

「とりあえずは“ヴァリス”と同じ扱いでいいようだ。ただし、整備や修理などは本人の立会いのもと、指示を仰ぐ」

「なるほどね…」

さすがにそこまでは気を許すわけにもいかないようだ。

なんとなく安心をしていると、フラッドは再び表情を硬化させた。

「お前には頼みたいことがあるそうだ」

その声の調子だけで、それがどれだけ大切で、重要なものがわかった。

そして、それがどれだけ面倒なものであるかも。

レインが、それから逃げられたことなどはなかったことも、長年の付き合いで身にしみて知っていた。

「これから説明をする。いいか」

「断るわけにはいかないんだろう」

早く話せ、とレインは無表情で先を促した。

『個々の思惑(2)』

第1基地周辺で起こっていた騒ぎは、ここ数日沈静化しつつあった。

ノアは作業の合間に、格納庫の外に佇んでいた。格納庫の内部では、他の技術者たちがそれぞれ動いている。もう修理も大方片付き、あとは細かな修正をするばかりであった。

あれから無傷のレヴァルダやローランを稼働させ、王国全体の見回りに借り出される以外は平和なものだった。リヴァイスは無残なものだったが、修理に集中することができたおかげで、もう元の優美な姿へ戻りつつあった。貴重であり、それだけしかない“ヴァリス”の修理は何よりも優先されるべきことである。しかし、そろそろ他の兵器も手につけたほうがいいのではないかとノアは思っている。

まあそんなことを口にするのと操縦者としての役目のほうに集中しろ、と言われるのは目に見えていた。
(しかし、設計くらいは考えていたほうがいいかな)

ノア・ゲイルシュタインは元々技術畑の人間だ。22の彼が生まれたところには“ヴァリス”がようやく製作されはじめ、父はその設計に関わっていた。ノアが父の仕事に惹かれ、そういった道を志すのは当然のことだった。

そういったものを育てるための学校に入り、希望どおりヴァリスを扱う職場へと来ることができた。

だが、希望通りの仕事ができしたのは、ほんの半年ほどであった。

「ノアさん」

穏やかな風を浴びながら思考をするノアを、小さな声が呼びかける。その方向を見ると、腕に茶の入った缶と、袋をいくつか抱えた少女が制服姿で佇んでいた。

「アリアちゃん」

あの日からろくに話ができていなかったノアは、思わず声が弾む。アリアは可愛らしく微笑むと、2つあった缶の1つをこちらへ差し出してくれる。

「一緒にお菓子でもどうですか？」

断る道理などは存在していなかった。

こんな物々しい場所に居てくれる可憐な少女の申し出を無下にできる人間などいるわけがない。

今レインが居たら鼻の下が伸びていることを指摘されただろうが、居たとしてもあんな朴念仁の言うことは関係が無かっただろう。

「機体の調子はどうでしょうか」

天気は良かったものの、外で食べるには風が冷たく格納庫の隅での休憩となった。

ちょうど作業の合間で、作業員たちもちらほら手を休めているのが見える。

「ああ大丈夫だよ。見た目はひどかったけど、ややこしい内部関係はそれほどでもなかったから」

至近距離で砲撃をし、その反動をもろに受けていたという“ヴァリス・リヴァイス”だったが、直接受けるよりも損傷は少ないため思ったよりも修理はスムーズであった。

ノアは技術員の一人であったため、こうした修理にも顔を出せるほどの技術は持ち合わせている。実際に搭乗するのもあって、そうした面から修理作業に参加をすることも多々あった。

「まあ後で動きを細かく見てもらえればそれでいいよ。それ以外に損傷は見受けられなかったし」

「ありがとうございます、ノアさん」

床に座りながら、アリアはノアに軽く頭を下げた。

仰々しいお礼はノアが嫌うことを知っているのだ。

ノアとしては、どんな形にせよこうした礼をしてくれるのは嬉しい。

「ああ、何かあったら、他の奴にも遠慮なく言ってくれよ」

そう言って、ノアは照れ隠しのように缶に入った茶を一口飲んだ。

そして横目で袋に入った焼き菓子をおいしそうに頬張る少女を観察する。

雪のように白い肌に、色素の薄い長い髪を持つ彼女は、どこか浮世離れたした雰囲気を持っている。

年齢は確か15であったが、小柄なこともあってそれよりも年少に見えることもある。

しかし軍人としての階級を持っているれっきとした戦士である。

その役目は“ヴァリス・リヴァイス”に搭乗し、敵を倒すことである。

パールピンクの特徴的な装甲をしたリヴァイスに、目の前の少女はぴったりだとは思ったが、その役割はおおよそ似つかわしくはないとも考えている。

実年齢以上に幼く見える彼女は、ノアにとってそういう対象ではなかったが、気にかけている存在だった。こうして一緒にいることは、日々機械や得たいの知れない怪物に向き合っているととても大切なことであると感じていた。それを単なる助平心と指摘するレイン・ベルモットは人間ではない何かであると考えたが、女性であるシアンにも指摘をされてひどく落ち込むのはこのすぐあとのことである。

「身体はもう大丈夫なのか？」

そのことを知らずに、ノアは焼き菓子を少しずつ食べながらアリアを見る。

「随分衰弱をしていたと聞いたんだが」

アリアはノアに安心しきった笑顔を見せてくれる。

「ええ、大丈夫です。外傷はないですし、休ませてもらったらこの通り元気になりました」

アリアはそう言うが、三日は病室に入っていたことを知っているノアは生きた心地がしていなかった。

アリアには専用の医療班がついており、最初は出撃のたびに検査を受けていた。

当初、ノアは扱いの差に密かに憤慨したものだったが、今はそれほどもなく、逆にアリアを心配するまでにいたっていた。レインが言うには、外傷や体調以外にも医療班がついている理由があるらしいが、ノアは未だによく知られることがなかった。

「そうかい。それはよかった」

「ええ。・・・そういえば、ノアさん」

朗らかに話していたアリアが、突如声を落とした。

ノアもつられて、彼女に身体を寄せる。

アリアは、その耳元の近くで、囁くように言った。

「あの日、見たこともない機体があったんです」

それを聞いて、ノアははっとする。

そういえば、彼女は知らないのだ。

この数日医務室に籠もっていた彼女には、その暇はなかった。

「赤い、羽根の生えた綺麗な機体です」

素直に綺麗、と表現できる彼女は、菫色の瞳を揺らしながら、ノア

に問いかける。

「“ヴァリス”ではありませんでした。ノアさんは、何か知っていますか？」

一緒に戦ったノアは口を開こうとしたが、あの機体のことを何も知らないことに気づく。

機体はことは違う格納庫に収められている。最小限の修理とともに、あの少年の判断を待つことになっていた。

だから、ここ数日周辺に着ていた人間たちの目に触れることはなかったのだ。

王都の上空で、目撃をした人間は少なくは無かった。

“ヴァリス”以外的大型兵器、そしてその姿は、軍に説明を求める人間を殺到させるには十分だった。

それに注目をし、王都周辺まで敵を近づけあまつさえ戦闘まで行ったという事実に触れる人間が皆無に近かったのが幸いといったところだろうか。

しかし、それが見れないとなると、自然とここまで足を運ぶ人間は少なくなっていた。一番近い王都からここまで来るのも結構な骨なのだ。2、3日何も得られなければ興味も失せるし、時間とともに恐怖や戸惑いも薄くなる。それでも、もう説明もせずにもう一度同じことがあれば今度は本物の騒ぎになるだろう。それについては、ノアよりももっと偉く、頭も回る人間たちの判断を待つしかなかった。

「俺も、知らない」

ノアはとりあえず今思うことを正直に話す。

「ただ、何かの説明があると思う。俺たちには、確実に話してもらえると、思っているよ」

そこまで言って、あの少年のことを思い出す。
同時に、彼女が操縦者になった理由も。

それまでに話したほうがいいのだろうか。

いや、これはレインを待ったほうがいい。

だがレインはレインで多忙を極めているようだった。

少なくともこの場では話さないほうがいいことだろう。

「・・・そのことはレインから聞いたほうがいいと思う。俺よりも」

「そう、ですか・・・」

軍人として、という意味だと認識したのか、エリアは遠慮がちに
了承した。

しゅん、とした彼女を見てどうしようもない感情が去来するが、実
際にノアにできることはない。

ただ、彼女やレインが乗る機体を、修理や調整することしか。

微妙に重くなってしまった空気を何とかしようと、話を変えよう
としたときだった。

格納庫の入り口が、少し騒がしくなっている。

外で何かあったようで、ちりぢりに休憩をしていた人間たちが集ま
っているようだった。

なんだろうか、と話そうとした矢先、エリアが立ち上がった。

『個々の思惑(3)』

目を開けると、段々と見慣れてきた天井が目に入る。

特に驚きも感慨もなく、カノンはようやく疲れの取れ始めた身体を、ベッドから起こした。

連日の検査や授業が終わって、ようやく暇がとれた日だった。

少し時間が空き、部屋で待機することを頼まれたカノンは、迷わず仮眠をとることを選択した。

細かい検査で弄繰り回され、体がむずむずするような気がする。

ある意味で懐かしい感覚であったが、今回のこれはまだ納得をすることができた。

どこから来たかもしれない人間をそのままにしておくには不安すぎる。

違う世界から来た、ということになっている以上、病原菌などを調べておくのは当然のことだろう。

むしろ、ここに来てから最初にされていてもおかしくはなかった。

今更、とは思わなかった。カノンは、あのフラッドが何をしようとしているのかを分かっている。

自分の決断が原因なのだから。

身なりを整えもう着慣れ始めている青い制服に袖を通すと、ドアがノックされる音がした。

「今日はあの機体の整備をさせてもらう」

何日かぶりにであったレインは、どこか余所余所しく見えた。カノンにとっては、五体満足でいてもらうだけ十分だった。

「いいんですか？」

慣れてきた施設内の廊下を、レインについて歩く音だけがする。レインは振り向くことはない。だが、どこか疲れているような雰囲気背中から感じられた。

「お前が許可したんなら、俺たちに異論はない」

いくら保護をしてきているからといって、フェニキアスを手放しで任せることはできなかった。

少々可哀相だが、調査のために破片を取り除いた状態で倉庫に眠ってもらっている。

第一、あれはカノン個人のものではない。破壊でもしたら賠償金どころではない。

「それに、お前に聞かなきゃ分からないこともあるだろう」

「それはそうですが」

とりあえず、カノンの監視下での修理を許可することになった。

施設から外にでると、強い日差しが頬を指した。

いい天気だった。空の色は、カノンの知る世界となんら変わらない。蒼くて、白い雲があって、太陽がある。

夜は寝てしまうので分からないが、少なくとも空だけは、カノンの知る世界との共通点だった。

目を細めるカノンに何か思ったのか、レインは足を止める。

「…“ヴァリス”の修理はどうしているんです？」

レインの機体の青を思い出したせいか、カノンはポツリと呟いた。

「全部終わって格納庫にしまっている。…あれがなくても出撃ができるようになる」

レインの返答は予想外に丁寧だった。不機嫌さは感じられない。

「お前のあれなんだが、完璧に修理できるかどうかは分からんぞ。

何せ“ヴァリス”とはコンセプトから違いそうだ」

「大丈夫だと思います。大切な部分が無事でしたし、それほど損傷はありませんから」

「：お前の国と俺たちの技術が同じだとは限らないぞ」

「いえ、修理してもらおう立場ですし、修理以外でも駆動などの整備は一人じゃできません。それに、“人型”の兵器が作れるくらいなんですしそれほど差はないと思います」

技術レベルの差は分らないが、人型の兵器をつくることができるのだ。車を全く知らない人間に車の修理を頼む、というわけではないだろう。そんな軽い気持ちで言ったはずだった。

レインはそれで首を傾げる。しかし、すぐに思い当たるように頷いた。

「“ヴァリス”は人型じゃない」

一瞬、何を言っているのが分からなかった。

「え？」

「お前にはそう見えるのかもしれない。しかし、あれは“人に似た”別の何かだ」

まっすぐに目を見て、レインはそう告げた。

たしかに、関節の部分や頭部など、完全に人間を模しているふうには見えない。しかし、そんな機体はカノンは国でよく見たし、それをひとくりに“人型”と呼ぶのは普通のことだった。

「じゃあ、あれはなんなんですか？」

「言ったろ。“人に似た”なにかだ。人間を連想させる形に作るのは、禁じられている。具体的に言えば、人間をそのまま真似して作ったようなもの、人間に似た兵器を作るとは昔からのルールで禁止されているんだ」

宗教的な何かだろうか？レインの言葉と態度はどこか頑なであり、その掟の絶対的な何かを感じさせる。確かに、人間に似た何かを攻撃するというのは無意識にブレーキをかけるのかもしれない。

首をかしげるカノンだが、すぐに思い当たることがあった。

「じゃあ、僕のあの機体はあってはならないものなんですね」

「そういうことになる」

初めてそこで気付く。自分の機体に向けられる視線の種類に。

あれは存在しないはずのものをみるものだった。

所属不明というだけではない。フェニキアスは、この世界では作られていないはずのものであることは

一目瞭然なのだ。カノンは、それをようやく分かったのだ。

「教えられていないのか」

授業を受けたことを知っているのか、レインは責める口調ではなかったがそう聞いてきた。

カノンはそれに対し頷いてみせる。

カノンが教えられたのは、世界の歴史や今の情勢のことに終始しており、機体の話には言及されなかったのだ。そんなことを聞ける雰囲気でもなかったが。

レインは頭を抱えて溜息をついた。

「：別に責めるつもりはない。だが、お前のあれはそういうものだ。奇異の視線で見られていることを忘れないでくれ」

そう言ったあと格納庫への道を行くのか、レインは背中を向けた。

目の前の軍人は、会ったときからカノンに対し消極的な振りをしているように思えた。

それは仕方がなかった。世界と国は違えど、同じ軍人であるカノンも同じようなことになったらこんな対応をするしかないだろう。

そうして納得をすることと、若干の寂しさを感じることは、また別問題ではあったが。

「ありがとな」

歩き始めて、レインがこぼれ落とすように呟くのが聞こえた。

「…お前のおかげで俺は2回も命を拾った」
背中を向けたまま、レインは続ける。

「俺だけじゃなく、他の奴らもだが。…お前が来たおかげで助かったものは多いんだろう。…立場上、俺はお前を信頼しきることはできない」

着崩した制服の背中からは、表情を見せるよりも言葉の真意を伝えてくれる気がした。

「だが、俺個人としては、お前に感謝をしている。…面倒だが、覚えておいてくれ」

返事を待たずに、レインは歩き出す。カノンは慌ててそれについていく。

思ったよりも、不器用な人だ。

だが、言いたいことを言ってくれないよりかは、ずっといい。

カノンはかつての記憶を抜き出そうとしてちりちりする頭の中で、そう思った。

格納庫らしい場所へ着くと、既に作業が始められているところだった。

仰向けにされ、大きなシートがかけられた巨大な何かが、運搬用の装置により外から運び入れられていて、作業員たちが慌しく動いている。これは言われなくても分かる。

カノンの世界でもよく見られた光景だった。やはり巨大な機体を扱うノウハウは同じなのだ。

作業員たちの大部分はそれにかかりきりだったが、レインに挨拶をする者のなかで、カノンの存在に気付き始める人間もちらほらいた。しかしその動揺は、今のところ作業の喧騒で打ち消されている。

作業が始まれば同じことなんだろうが。

「あの機体の整備はしたことはあるか？」

こちらを振り向いて聞いてくるレインの表情はおなじみの硬いものだった。

「ええ、大丈夫です。機具があれば最低限のことは一人でできるように教育されています」

本当に最低限のことだ。今のように損傷が多いと手間がかかるばかりだ。

自分の機体を、自分で管理、修理する。

それがあの“機体”を乗ることを命じられた人間の最低条件のひとつだった。

徐々に機体が格納庫に収められるなか、作業から離れて見ている金の頭を見かける。

それは、あの戦闘の際緑色の大きな機体に乗った操縦者の姿だった。ノア・ゲイルシュタイン、と戦闘後自ら名乗っていた。快活そうな青年だ。

彼も気付いたようで、こちらへ片手を上げる。

カノンも気のない挨拶に安堵し、それに応えるが、彼は何かに気付いたように作業の方へ視線を動かす。

動揺しているようだ。

自分に関することだろうか。しかしレインから離れて話しかけるわけにもいかなかった。

「少し待ってくれ。もう少しで終わるようだ」

作業の様子を観察していたレインが声をかける。

カノンはそれに対し、頷こうとしたときだ。

「カノン？」

不意に名前を呼ばれたのは、その瞬間だった。

「はい」

返事をしたのは、反射的なものだ。

少し懐かしい、親しい人から呼ばれる声。

声をした方を見ると、女の子が立っていた。

薄い色をした髪に、綺麗な紫、堇色というのだろうか？そんな色をした瞳の子だった。

白い肌は透き通るように滑らかだったが、武骨そうな制服に身を包んでいるのが何だかアンバランスだ。

背丈はカノンより少し小さく、明らかに細い。吹けば飛ぶようだが、この子も軍人なのだろうか？

「…カノン？」

小さな蕾のような唇から、呼ばれたときと同じ声が発せられる。

カノンは名前を呼ばれ、当たり前のように返事をする。

「はい」

もう一度同じ返事をする、茫然としていた表情に変化が訪れる。
清い水が湧き上がるように、葦色の瞳から涙らしきものが溢れ出す。
白い肌が紅潮し、唇が震えだす。

初めて見る反応だった。

カノンがうろたえるなか、少女が彼の両腕を掴む。
そして、確かめるように顔を至近距離にまで近づける。
振り払う余裕などなかった。

「…カノンなのね！！！！」
そう言われた瞬間、少女が強い力で抱きついてきた。
そして、もう二度と離さないとも言うように強く、強く抱きしめる。

彼女がカノンと呼んだ、人間を。

「え？」

そのまま彼女はカノンの肩に顔を埋めて泣き出した。
こもっていても大きな泣き声を上げて。
振り払うことなどできるわけがなかった。
ただ、少女の甘い匂いを感じながら、予想以上に強い力で抱きしめられていたしかなかった。

カノン。

彼女は確かにそう呼んだ。

この世界、国に来て初めて呼ばれた自分の名前。

だが、それと呼ばれる道理も、少女に対する見覚えも、今のカノ

ンには存在していないことは明らかだった。

第18話『今生きる場所で』

（そうか…そっちはもう駄目だったか…）

（何か、慣れてきちゃったな。終わればすごくほっとする気がする）

（こういうとき、不意に思うんだ。あの子がこれを見ることがなくてよかったって）

（…悪い。でも、そう思うことは確かなんだ…）

（お互いに、頑張るしかないな。また集まろうか？1人でいるから余計にそう思うのかもしれない）

（…無事で、いてくれよ。それが、無茶苦茶なこと言っていることだとしてもよ）

（犠牲になっちまうよりかは、逃げてくれたほうが余程いい…）

（ああ、結局あの子のそこへは行けないんだな…。寂しがつているだろうに）

（…終わって、すっきりしてからの方がいいか。その方が、あの子も…）

彼、がその部屋に入ってくると、張り詰めた緊張が一気に弛緩したような気がした。

部屋にあるU字型の机に座る人間たちは、入ってきた人間に視線を

集中させる。

その人間は、一見してただの子供に見えた。

だが、自分よりもはるか年長の人間にたじろぐこともなく、その視線のもと堂々と立つ。

その様子は、まだ親の庇護のもとにいるはずであろう同年代の人間にはない落ち着き、そして諦観めいたものが窺えた。

レインは彼が入ってきたドアの傍に立ちながら、その背中を見つめる。

後姿でさえも、彼になつかしさとどうしようもない何かを抱かせた。だが、少なくともこの部屋ですることでもない、と思い、今更ながら姿勢をただした。

どこか眠たそうに横にいたノアも、それを見て慌ててそれにならうよう、背筋と服の皺をなおした。

端の席に座っていたフラッドが咳払いをすると、ざわめきは慌ててしまいこまれる。

そして、この会議の代表のなかでは一番の年少者に視線が行く。フラッドは、それを一笑に付すかの如く微笑すると、彼を見た。

「彼が、我々に協力をしてくださることになった、アルデバラン少尉です」

名前を呼ばれた彼の表情は、レインからは見えなかった。

「意外にあっさり終わったもんだな」

操縦者として一応出席していたノアは、堅苦しい雰囲気から解放された途端に大きく伸びをした。

それをたしなめる必要はない。
建物の端にある、目立たない廊下の隅で、レインとノアは一息ついていた。

シュダル王国の王都で、一際目立つ城。

その足元に仕えるように、もう一つ目立つ、白く大きな建物がある。各地に点在している基地の代表などが集まることに使う、軍の本部のような場所だった。

“ヴァリス”のパイロットであるレインとノアはよくそこに召集されては、定期的に報告をすることを求められている。そして、そこは何かあったときに基地の代表である大佐たちが集められ、会議を行う場所でもあった。

「もうちょっと揉めるかと思ってたが、余程ルブルー大佐の根回し
が良かったんだなあ」

ノアは壁にもたれながら、薄暗い天井を見上げている。そして、大きく欠伸をした。

レインはその隣で、視線を床に落とした。

要は、今日は彼のお披露目のようなものだった。

協力をする事になった彼は、フラッドの管轄下である第1基地だけでなく、他の基地にも行くことになるだろう。そのための行動を変に阻害されたり、余計な混乱を生

まないために、予め説明をしておく、というか説明を促されて今回の会議は行われた。帝国の方もそういった要請はあるのだが、最近では領地内が騒がしいらしく、当初ほどの五月蠅さはない。

とりあえず、彼がこの世界で最低限の活動をするためのお膳立ては整ったわけだ。

「協力者が現れたってことでまとまった。そんなところか？」

「話はそういう感じで終わっていたな」

「救世主、ってわけでもないしな」

それは、その通りだった。特に自分たちの戦果は悪くは無い。

今日明日で何万人もの人間が死んでいく、そんな絶望的な状況なのか、舞い降りた力。

そんなオーバーなものでもない。

自分たちが戦えば、とりあえず当たり前のように平穏は続いている。彼の力は、確かにあると有り難い。

だが、無いからといって希望が齎されるわけでも、絶望に陥るわけでもない。

「でもまあ、俺たちに手に負えない奴が出てきたら、あの子が戦ってくれるって程度のもんでいいのかね？」

「…本気であんな子供に頼る気か？」

能天気なノアの声に、レインは思わず声を上げる。周囲に人の気配はなく、会議を終えた軍人たちのざわめきは遠い。気にすることはないが、そういう認識はいずれ表に出てきて影響を与える。

「いや、あの子に丸投げ、じゃなくて、困ったら助けてもらうことができるってことだろ？」

そんなレインに対し、ノアの表情は彼なりに考えている、ということが感じられるものだった。

「あの子にだって帰る場所があるんだし、そのぐらいの助力で俺はいいと思ってる」

だけど、とノアは目を伏せる。

「何だか、上の人間はあの子に戦わせることを急いであるように思えるんだ」

それは、レインも薄々感じていることだった。

彼を紹介した会議で、お偉いがたは随分と彼を歓待していた。これでもう安泰だ、とでも言うように。彼を排他するような反応は、どこにも見当たらなかった。

もしかしたら、と思うが、彼がどのように来たか、という具体的なことを、フラッドは話したのだろうか。それについては、思い当たるふしはノアにだってあるだろう。

「もしかしたら、上の人間はこれから戦いが激しくなると考えているのかな」

「…あの異常な怪物のこともあるしな」

「そうそう。それにしたって、“ヴァリス”の武装が効かないわけじゃないんだけどさ」

怪物の結晶化。そのような現象は聞いたことも無い。大きな戦いの末、以前ほどの襲撃はなくなっているのが現状ではあるが、怪物の変容などというのは異常事態にも程がある。

勿論レインはフラッドに報告をしているし、フラッドだって上層部に報告をしているだろう。

その対策としては新たな武装の開発を急ぐ、とのことらしいが。

「まあ俺たちが言っても仕方がないんだろうけどなー」

ノアは取り繕うようにそう言うと、再び天井を見上げる。

「別にいいんだけどさ、カノン君はいい子だしできれば帰してあげたいよ」

そう言って、ノアは再び天井を見上げる。

レインは、横目でその様子を窺いながら、ここには居ない少女のこ

と思った。

あの少女のあんな姿など、初めて見た。

レインが久しぶりに見るあの少年を抱きしめて肩に顔埋めて泣くその姿は、どうしようもないくらい弱い弱いものだった。周囲の者は気付いたが、止められる者などはいなかった。しかし、レインはすぐに彼女を引き剥がした。

「アリア、人違いだ」

そのときの自分の表情は、なんともいいがたいものだっただろう。フラッドによく指摘される。冷静を装っても、実際すぐに表情が出る。

それをおさえるのに必死だった。

背後から両手を押さえられながら、アリアは必死に抵抗した。

「違う、カノンよ！！だって返事をしてくれたもの！！！！ずっと、ずっと会いたかったの、探していたの！！私、カノンのためにここまで来たの！！」

「彼は、彼の名前はゼルカノン・リゲル・アルデバランだ。確かに似ているが、全然違う。」

お前の名前とも似ていないだろう？」

幼子に言い聞かせる気分だった。

だがアリアは強情なまでに反抗をする。

「嘘、嘘よ、なんでそんなこと言うの！！レインさんだって会いたがってたのに！！レインさんだって探してくるって言ったのに！！嘘つき、嘘をついたんだわ！！！！」

「アリア！！！！」

支離滅裂になっていくアリアの言葉を、ついきつい声で押し留める。アリアはその声でようやく、目の前にいた少年を涙に濡れた瞳で見つめた。

カノンという名前を持つ少年は、目の前の出来事に完全においていかれていた。

茫然とした様子で、錯乱する少女と、見知った人間の見知らぬ様子を見つめていた。

それを見ていることができず、錯乱する少女に対しレインは言い聞かせる。

「な、違うだろう？：似ているけど、彼はお前の探しているカノンじゃない。俺だって間違えそうになった。でも違うんだ」
アリアは幼子のようにしゃくりあげながら、おとなしくなっていた。

何よりも、彼の姿が彼女に真実を告げていた。

「髪の色も、瞳の色も同じだ。名前だって似ている。それだけだ。彼はお前の「カノン」じゃない、違うんだよ、アリア」

アリアは、自分の言葉が終わると同時に一回り小さい体でレインに抱きつき、搾り出すように泣き始めた。レインは彼女を宥めながら、近くにいた作業員に彼の案内を押し付け、少女をその場から何とか連れ出した。

彼とともに話したのは、それきりだ。

あれから3日になる。

この会議が召集されるまでの時間と、彼の機体の調査の時間だ。

彼とアリアは会うことはなかった。

アリアは、彼を避けながら何とか任務をこなしている。

今日は国境周辺の調査に向かった。それも終わっているだろう。

「帝国側にも行かなきゃならないんだろうなー」

隣のノアは、欠伸をしながらやらなければならぬことをぼやいている。

レインはそれをアリアのことをどうするか考えながら聞いていたが、次の発言で一気に現実に取りざたされた。

「まあ今度は行かされるのはお前なんだろうけどなー」

「何でそうなるんだ？」

思わずノアの腕を掴み、おかしい汗をかきながら詰め寄る。

端から見れば男同士で顔を突き合わせるといふ色々笑えない状況だろうが、仕方がない。

レインにとってはそんなことを気にしてはいられないことだ。

「だって、アリアちゃん是要請がない限りはあっちには戻らないし、俺はルブルー大佐からカノン君の機体を調査するように言われているし、あの子はしばらくこっちを担当するらしいし」

体格の良さが違うレインに詰め寄られていても、ノアはどこ吹く風だ。そう言えばこいつは味方をしてくれたためしがない。他については本当にいい奴なことは認めているが、これに関しては別に話だった。

「何でこの疲れる状況でさらに面倒な奴のところへ行かなきゃならんのだ！」

「いやいやいや帝国側にも説明はあるだろうし、それには軍人であるレインが一番物怖じもしないし丁度いいって再三ルブルー大佐が」

「いやいやいやいやフラッドは関係がないだろう。気が合うみたいだしお前の方が」

「アレルギーみたいな反応だなあ。あちらさん別に死ぬようなことはしないだろ。それにお前の状況って最近流行ってるジュブナイル小説みたいなもんだぞ。青少年の憧れ」

「何の話だそれは！とにかくだ、この面倒なときにさらに面倒な奴には会いたくはない。それだけは全力で阻止してやる」

「落ち着けて。でもまあまだ分からないし、アリアちゃんの交代で一緒に行く可能性も、ん？」

動揺しきるレインに対し、ノアはざわめきがおさまリ、誰かがこちらに来ることを察知したようだった。レインもそれに気付き、何とかおさめて足音と声のする方向を見る。

「…ですので、我が第3基地に来た際にはこのアルヒレド・コンフロドがお待ちしておりますので：」

「はあ…。そのときはよろしく願います：」

いかにもゴマをする、といったへつらった声を背に、先ほどの話題の渦中に居た少年が、姿を現した。

その後ろには、会議に出席していた軍人の1人が腰を低くしている。彼はレインたちを見ると、慌てて背筋を正した。

「ああ、ここで結構です。彼らと話すことがあるので。お名前はちゃんと覚えましたから」

少年とは思えない態度で彼がそう言うのと、第3基地の大佐は挨拶もそこそこに退散をした。

あれほどみっともない姿を晒しておいて、下の軍人であるレインたちに見られるのは恥ずかしかったのだろうか。

彼は溜息をつくと、ゆっくりと表情を和らげた。

会議のとき、石のように固まっていた顔がようやく弛緩した。

「…これで正式に任務につくことになりましたね」

「、ああ…」

ようやくなついた、といったふうだった彼の表情はどこにもなく、まるで自分が腫れ物であることを自覚したかのような印象だった。

ノアは気まずそうにこちらを見たが、すぐに咳払いをして彼を見る。

「ああ、よろしくな。と、いっても、なるべく俺たちで解決はしたいんだけどな」

「そうでしょう。僕の方も、帰れるなら帰りたいですし」

開けっぴろげなノアと同じように、彼は彼で隠すつもりもないようだった。

いや、自分がこの世界に来た異分子であることを強く自覚したのかもしれない。

助けることは助きたい。だが、あんな機体を扱う以上、それでなすべきことあるだろうことは、何も知らないレインでも慮ることができる。

「でも、今日は暇を頂ましたし、ルブルー大佐には許可をいただいているのですが…」

「ん？」

控えめな彼の様子に対し、ノアは首を傾げる。

そういえば、ノアには彼のこれからの予定は話す暇はなかった気がする。

「街の方を案内するって言ってたな」

異分子、とはいっても人種からして異端というわけでもない。

何も知らない人間から見れば彼はただの子供だ。

そこいらをうろついても何も知らなければ騒がれることはないし、彼にそういったことを隠す必要もない。あくまで、交流などのためにレインは彼にその話をしていたのだ。

「へえ、レインが？でもお前忙しいのに大丈夫か？」

「え、ああ、そうですね」

「俺もよかったら一緒に行きたいけど、整備とかの仕事がなー」

勿論、行けることならレインが行きたい。しかし、誘ったのは何もただ遊びに行くためだけではなかった。

「俺もな、行けないことはないが、適任がいてな。そっちのが詳しいから」

「誰だ？知り合いの女の子が誰かか？」

「じゃあ、僕はどこに行っておけばいいんですか？」

「すぐに分かるさ」

レインは軍服の胸ポケットから通信機を取り出す。

手短な文書をやり取りできる機能のついた小型のそれは、気付かぬ間に返事と、新たな文書が送られたことを示していた。

「俺はこれから新しい任務だ。その適任はすぐそこまで来ている」

「はあ…」

ゼルカノン、の様子は目の前のことを話しながらも、胸に何かがつかえていることが窺えた。

視線をこちらに合わせることもない。そういったものがすぐに表に出るのは、まだ子供であるレインは思う。しかし、彼はレインと同じ軍人であり、ある意味では対等に扱い、色々と話すこともあると思う。

それがどれほど必要なのかは、今では分からなかった。

「ここから出て右にまっすぐ行ったところに、噴水のある広場があると思う。向こうはお前を知っているから、声をかけるように言っている。じゃあな」

「え？ああ、はい…」

「おいおい」

咎めるようなノアの声を背に、レインは外へと向かう。

これ以上の言葉は今は無かった。こじれたら行動をすればいい。無責任なことは承知をしていたが、自分の行動が何か作用することを、今は祈るしかなかった。

歩きながら通信機に目を通し、新たな文書に目を通す。

その瞬間、顔が歪んだのは自分でも分かりやすいくらいに自覚したことだった。

第19話『今そこに在る存在（1）』

自分の決断が、よかったのかどうかは分からない。

しかし、帰る方法が分からない。そして、自分はできることを知っている。

自分がやったことは、あくまで帰る方法を探すためのことだ。

それ以外のことは、あまり背負ってはならない。

この世界も困っているのは分かる。

しかし、自分にも国と世界はあって、そこは自分の力を必要としている。

だが、持っている力を腐らせて誰かを見殺しにするよりかは、まだその力を大事なことに使っていた方が、何倍もいいとは思った。

多分、あの人たちは笑うだろう。

けれども、それに対して自分は反論ができる。

（貴方たちだって、同じことになればきっと、）

それは免罪符なのかもしれない。しかし、それ以外の決断をするあの人たちなんて思いつかなかった。

思い出せば思い出すほど、懐かしさと寂しさが湧き出てくる。しかし、そうでもしないと忘れてしまいそうだった。だって、あまりにも、ここに在る戦う人たちは、

「…アルデバランさん」

故国と姿は違えど、同じようにざわめきを持つ街のなかで、その

声は自分に降りかかった。
思考を止め、その声の方へと振り返る。

「こんにちは、は？」

挨拶をしようとした声が、どこかへ飛んでいく。

声の主は不思議なまでに縮こまりながら、しかし自分の顔を真っ直ぐに見つめている。

「：初めまして、ですね。私の名前は、アリアベル・デューティと
います。アリア、と呼んでください」

先日は、本当に失礼しました。

予想以上にしっかりした声で、軍服姿から水色のワンピースへと姿
を変えた可憐な少女は、深々と頭を下げた。

その姿は、哀れなまでに泣き叫んでい姿とは、似ても似つかなか
った。

「本日は、この王都を案内するんですね」

「あ、ああ、え、とそう、です。気晴らしに街を見てみるかって、
レインさんに」

フェニキアスの整備の合間に、投げかけられるようにレインはそ
の提案をしてきた。

基地のなかで生活をしていい加減息が詰まっていたときだったので、
深く考えずに返事をしたのだが。

「私は、レイン、いえ、ベルモット少尉にその案内を任されたので

す」

「ええ、ああ、ちょ、ちょっと待って！座ろう！！ちょっと座って話そう！！」

思わず大きな声が出て視線が痛い、とりあえず噴水の脇にあるベンチを指した。

周囲には同じような人間も居て、聞き耳を立てられることもない。それほど不味い話をするつもりはなかったが、自分の事情としてはあまり騒がれたくもなかった。

自分だって、男であることを自覚している。

だが、可愛い女の子と居たとしてもこんなに嫌な汗をかきながらなのはごめんだった。

ここで初めて、しれっとした顔で自分を送り出したレインを恨んだ。こういった思惑であろうと、せめて一発くらいは殴らせてほしかった。

「本当に大丈夫なのか？」

「ん、ああ、大丈夫だろ」

そのノアの声は、レインの予想通りのものだった。

特に身震いを感じることもなく、レインは生返事を返す。

街にカノンを残し、レインとノアは第1基地へと戻ってきていた。戻って早々、レインに出撃命令が下っていたため、格納庫はそれなりに騒がしい。

レインはヴァリス・ローランの傍で、特殊スーツに身を包み、機体の調子をまとめた書類に目を通していている。それを渡しにきたノアの様子は、やはりというか複雑そうであった。

「本人にもちゃんと話してる。あの子もそれほど柔じゃないさ」

「そりゃそうだけどって、それはアリアちゃんの方なんだよな？」
ノアが心配しているのは、アリアだけではない。

レインも、それを重々承知している。
だが、アリアのなかにある懸念を払拭するためには、荒療治のようなものが必要だった。

そのためには、異世界から来たというカノンを利用する形となる。

しかし、彼にとっても、この世界であったことを説明するいい機会ではあると思った。
それだけだ。

「…まあ何かあったらフォローはするけどさ。どっちもいい子だし、変にこじれさせたくはない」

「悪いな」

「いいよ、別に。それに、張本人のお前はなにやら忙しくなるみたいだし」

「まだ分からないよ、それはな」

レインに下された命令は、ある一帯の調査だった。
今日行われた会議で判明した、小さな出来事。

この1週間の間に、国の東に位置する第3基地、そして第5基地の管理下にある観測所が、怪物に襲われたらしい。
観測所とはいっても、常に人がいるわけではなく、基地から『ゲート』を感知するために設置された施設だ。一応周囲にプロシオンなどの無人兵器は配備されている。そこが怪物に襲われた、らしい。

らしいというのは、その怪物が一切確認されていないためだ。

しかし、巨大な力に薙ぎ払われたように施設は破壊され、ご丁寧に、根こそぎ兵器はやられてしまったらしい。感知されない怪物、というのはあの爬虫類のような怪物の例もあって新種だということに片付けられている。他に被害もないが、怪物が残っていることを懸念し、“ヴァリス”の派遣を要請した。

「施設が破壊された、となると面倒だな。次々に修理しないとまた他の場所が壊れたときに面倒なことになる」

一応今は他の施設の力を使い、カバーをすることができている。しかし、これ以上数が減るようなことになるとう当然負担は大きくなるだろう。そのためには、安全を確保し、修理をする算段を整えねばならない。

「ただの調査だ。それほど手間はかからないだろう」

「いや、でも最近はそうでもないだろう。すぐに帰れると思ったら次々に『ゲート』が出現して、おまけにお前はあんな機体を連れて帰ってきたんだから」

「あれは特例中の特例だよ。大抵はそうじゃない、といいがな」

「おい」

「ところで、あの機体の調子はどうなんだ？」

レインが指すのは、ローランの隣に鎮座するあの“人型”だ。

今は痛々しい跡もなく、元の姿を取り戻している。

操作はできない。きちんとロックがかけられているらしく、彼以外の人間には動かすことはできない。

あれを修理したのは彼と、ここの整備班。そして、目の前のノアだった。

「あれか？一応動かしたし、あのカノン君だって太鼓判を押してく

れているさ」

「動力はなんなんだ、あれは？」

「あれ？そういう話？」

そういうながらも、ノアの顔には子供のような輝きが宿っている。それだけで、あの“人型”のスペックは分かる気がした。

「すごい機体さ。動力はさすがに秘密だが、自分でエネルギーを作り出して、それが半永久的に続く。関節はとにかく動くことを重視している感じだな。装甲は“ヴァリス”と似たような感じではあるが、その動力によって強化されるから、あんまり比較対象にはならないな」

ノアの説明は極めて単純なものだ。しかし、彼の頭のなかはちゃんと複雑な原理を理解している。他人に説明するときに碎いているだけなのだ。

「装甲が強化される原理は？」

「それはさすがに秘密だった。装甲に関しては穴を塞いでもとの通りにしてほしっていう注文だけだったなあ。操縦室っていうのはカノン君が見えていて、俺も見せてもらったけど、すごいぜ。何せシート以外何もない」

「何も？」

「何か空中に画面みたいなの出してた。すごいぜ、何せそれが触れるんだ。おかげで“ヴァリス”みたいにごちゃごちゃしていないから息苦しくもなさそうだった。あれを導入したいもんだ」

「シートだけ？操縦桿は？」

「必要ないんだそうだ。頭のなかで、というか自分の体を動かす感じらしい。操縦に関してもいじってないから分からない。でも面白そうだよな」

ノアは好奇心だけで3日は徹夜できる気力を持っている。だが、レインは初めてあの“人型”のことを知って、ただただ驚くばかりだった。

やはりあれはここよりもずっと進んだ場所から来たのだ。

それが、何故こんな場所に来たのか。

空から来たこれは、どこにいたのか。

そして、そこにいた彼は今まで、どこでどうしていたのか。

（乗って戦っている最中にここに来ただろうか？）

何気なく聞いてみる限りでは、彼の記憶は極めてあやふやなものだ。

“気がつけばここに居て、戦っていた。”

本当にそれだけだ。

まるでそれ以前の記憶がないように。

「痛みをフィードバックする機能については？」

「ん？ああ、そういえば言ってたな。悪い、それに関しては操縦室を調べないとわからねえ。本人にそこまで突っ込んで聞けるものでもなかったし」

「そうだな…」

機体のダメージが、操縦者にまで与えられる。自分の体のように動かすためには、それは不可欠のものだろう。それが、あの“人型”が他の兵器と違う理由…。

「にしても、お前よくそのシステムが分かったな？あの子が泣き言を言ったわけじゃなかったんだろう？」

「ん？ああ、緊急時だったからな、多分、勘だよ。勘」

周囲の準備も整ったらしい。そろそろ中に入っておかないとまず

いだろう。レインは返事を誤魔化しながら、ローランの操縦室へ身を投じる。帰ったら、もう少し詳しい話を聞きたい。できれば、彼自身にも。

狭いその場所は、今やすっかり馴染みのものとなったものだ。レインは起動の準備をしながら、横に存在する機体を思う。

《そうそう、あの“人型”、ちゃんと名前があるらしいぞ》

「なんだよ？」

準備をしながら、レインはノアの通信に生返事をする。

「いっちょまえに名前なんてあるのか、と思ったがそれはこの“ヴァリス”だって同じだ。」

《フェニキアス、だってよ。あの子の、なんとかレザー国のシンボルだそう。何度でも復活する炎の鳥だと。ここにも同じような伝説あったよな》

「フェニキアス…か」

ようやく自分の命を2度救った兵器の名前を知ったレインに、特別感慨はなかった。

ただ、やっとその存在が自分のなかで落ち着いた気がした。

言いながらも、準備を終えたレインはローランを起動させる。

下で待機していた作業員の誘導に従い、レインはローランで格納庫を跡にする。

ノアの顔は当然見ることはなかった。

通信は送ることができたが、とりあえずは、やめた。

「…なんで分かったかって？そんなもん、勘で分かるわけないだろう」

狭い操縦室のなかで、レインは独りごちる。

誰にも聞かれることはない。咎められることはない言葉。

「…苦しいことを我慢しているときの顔が、そっくりだったからだよ」

発着場にたったローランはレインの操作で、その巨体を空へと躍らせた。

『今そこに在る存在(2)』

「お昼はどうしましょうか？」

「え、ああ、て、適当でいいよ」

「そうですか。なら、私が決めますね。何か嫌いなものは？」

「ない、というか、何でも食べるよ。量は多すぎるのは嫌だけど」

「分かりました。じゃあ、あそこに入りましょう」

どういう状況なんだろう？

それに答えてくれる人間は、誰もいなかった。

何せ、この世界にかつての知り合いは誰もいない。

思わずノアによく似ている先輩を思い出したが、彼は別の意味で頼りにならない、と思った。

「どうしましたか？」

気付けば、向かいにはワンピースの少女が座っている。

そして、ここはどこかの食堂だった。

昼時の店内は騒がしいが、活気のあるもので心地のよいものだった。カウンターの方にある厨房では年配の夫婦がにぎやかに調理をしている。

考え事をしている間に、ここに連れてこられたらしい。

「いや、何、も」

「そうですか。私と同じものでよかったですよね？」

「え、ええ、いや、はい」

：どうやら注文まで終わってしまったらしい。

考えに没頭すると周りが見えなくなると言うのは初めてのことであった。

それほどまでに自分は動揺しているのだ。しかも、同じくらしい女の子を相手に。

しかも現実逃避をしかけていた。これは危ない。

「…あのときは本当にすみませんでした」

そんなカノンに、目の前の少女がぼつり、と言った。

騒がしい店内でも、よく聞こえる声だった。

「私、人間違いをしたんです。貴方を、探している人と間違えてしまった。それで、貴方に迷惑をかけたの。本当にごめんなさい」

伏せられた瞳は、あのときほどではなかったが、今にも泣きそうだった。

動揺したが、それよりも、その言葉の内容が気になった。

「人間違い？」

「ええ。…貴方が、本当によく似ていたの」

「誰に？」

騒がしい店内のなか、2人の間にだけ重い沈黙が訪れる。

しかし、こんな環境でもない能耐えられなかったかもしれない。

噴水広場では、ただ自分が落ち着くまで待っているだけだったから。

「その人は、レインさんも知っているんだよね」

黙ったまま話さない少女を、カノンは正面から見据える。

不意に、少女が視線を上げ、カノンの瞳とかち合う形となる。

だが、どちらもそらすことはなかった。

「その人は、君の傍にはいない。探しているんだったな」

「……………」

「死んだ人なの？」

「違う！！」

その声で、店内の騒がしい雰囲気が一瞬止まる。

視線が集まるのを感じて、慌ててカノンは少女を見る。

アリア、は自分の声の大きさに驚いているようだった。

だが、首を振って、ゆっくりと息を吐く。

「ごめんなさい、いきなり……」

「いや、いいよ。俺も、無遠慮だった」

2人のやり取りを見たのか、徐々に店内の雰囲気は戻っていった。痴話げんかと見られたかもしれないが、思わせておけばいいだろう。

「ごめんなさい、ちゃんと話します」

今度は、しっかりとした瞳で、アリアは言う。

その瞳に、危ういところは一切なかった。

「だから、貴方が聞きたいことは全部話すことができます」

「じゃあ……」

「はい、シーフードスパゲティ2人前、お待ちです！！」

店員の娘の快活な声とともに、2人の間に湯気のたつ見るからに美味そうな料理が置かれた。

そのまま伝票とともに、娘は他の客のところへと向かっていった。

取り残されるような形となった2人は、

「……………」

「とりあえず、食べる？」

「そう、ですね。それから…」

気まづいままの2人は、とりあえず目の前の食事を片付けることにした。

一方その頃。

“ヴァリス・ローラン”は廃墟となった問題の施設へと到着していた。

「…ひどいな、こりゃ」

上から何かに食いちぎられたかのように、施設は円く切り取られるように崩壊していた。

見るだけで分かる。

こんなことができる人間も、道具もない。

これは“生き物”の仕業だ。

“生き物”が、自分の体でやったことなのだ。

ローランを着地させ、施設の方へと歩みを進める。

足元から何かを踏む音が聞こえるが、おそらくはプロシオンの部品だろう。

ここに来るまで、何かに弄ばれたようにその部品をちらかせたプロシオンらしき残骸を確認している。

「センサーに反応はない。…異常も、ないか」

この前の時のように、センサーに反応しない敵、というのもあるだろう。

しかし、とりあえずこの一帯は静かなものだ。

一面に広がる荒野。

そこに、命の気配はない。

一瞬、脳裏にあのときの結晶体が浮かぶが、とりあえず攻撃の気配もなかった。

「骨折り損、というわけでもないよな」

もう少し見て回るつもりではあるが、いささか拍子抜けというのが否めない。

しかし、何か安心してはいけなような雰囲気があるのは感じていた。

カメラを操作し、崩壊した箇所を観察する。

まるで、切り取られたような、その部分。

いや、これは

「：食いとられた、か？」

まるで果実にかぶりついたかのような痕跡だった。よく見れば、円い切り口はかすかに凹凸があり、

鋭い牙によって、削り取られたようにも取れる。

施設はそれほど大きくはない。

だが、建物を食い取るとなると、かなり大きいと考えねばならないだろう。

「：面倒なことになってきたな」

言ってみても仕方がない。

とりあえず、辺りを調べる必要がある。

これが人里に出ると考えるだけで生きた心地がしない。

もし、“ヴァリス”でも対抗できないような奴だったら？

以前は、それを考えないようにしていた。

だが、今は違う。何せ…。

レインは操縦桿から手を離し、拳で自分の膝を殴る。
鈍い痛みを、じわじわと感じる。

それにより、くだらない思考は止まる。

（本当に、くだらない）

昔も、そんな甘ったるい考えが自分にはあった。
その結果が、今この状況だ。

「…安心しろ、お前が帰ってくるまでには、俺がアリアを守る。ついでに、もう戦う必要もないくらいにしてやるさ」

何度も、何度も出てきたその考えを、再び口にする。

誰にも聞かれたことはない。
聞かせるようなこともない。

それを伝えるべき相手は、ここにはいない相手なのだから。

「お前は、どこにいるんだ？…カノン」

「私の探している人の名前は、カノン。カノンベル・デューティ」
食事を終えた彼女は、ぽつりぽつりと話し出した。

「私の、双子の兄。年は、私と同じ。きっと、15になっているはずです」

そして、長い間を挟んで、彼女は言った。

「生きて、
いれば」

『今そこに在る存在(3)』

「…やられているプロシオンは、これで全部か？」

レインは変わらず、残骸を調べる作業を続けていた。

あれからしばらく様子を見ていたが、どこにも怪物は存在していない。

基地のリーダーにも異変はないようだった。

だとしたら、怪物は『ゲート』へ帰ってしまった可能性もある。

そこで、レインにできることといえば、敵に関するものの調査である。

転がっているプロシオンを調べ、やられている箇所を検分する。

単調ではあるが、必要な作業であった。

それに施設の修理作業の妨げになるような破片は取り除いておく必要もある。

戦うだけが、“ヴァリス”の役目ではない。

しかし、これならプロシオンをいくつか派遣してもらってもよかっただろう。

「こういうとき、あいつなら五月蠅くて仕方がなかったなあ」

(何で僕らがこんなことしなくちゃならないんですか。いくらなんでも無駄すぎやしませんか?)

鮮明に思い出されるその様子に、思わず苦笑する。

そう言いながらも、やるべきことはちゃんとやるのだ。

何せ、あいつは兄なのだから。

妹のために、模範を示さねばならないことを生まれたときからよく

知っていた。

今頃、あの子どもたちはどうしているだろう。

おかしい方向に進んでいる、ということはないだろうが。

（後で謝る必要があるな）

単調な作業を進めているなか、一体のプロシオンを移動させる。

そして一応ではあるが、その破損したところを確認する。

他のは施設と同じようなものだった。

食いちぎられたようになっていたり、爆発を起こして下半身がなくなっていたりだ。

そのプロシオンは、胸にあたる部分に穴が開いていた。

以前の虫のように光線でも発射したのだろうか？

カメラをズームし、分析をする。

焦げたような跡はない。直接攻撃によるものだろうか。“ヴァリス”なら操縦室に穴が開いている位置で、見ていてぞっとしない。

「あとは…腕がなくなっているな」

こちらにも引っ張られてとれたように、強い力によって腕が引っこ抜かれていた。手荒い方法だった。

そういえば、同じように足がなくなっている機体もあった。

飛び散ったものは探すとして、再び胸部を観察する。何か体組織でも残していれば、分析のしようもあるのだろうか……。

内部を注視していて、不意にある点に気がつく。

思わず手をつっ込んで、破損口を強引に開かせる。

「・・・なんだ、こりゃ」

そこには、何もなかった。

当然、そんなことがあるわけがない。

胸にあるはずの動力源、排熱機関、その他諸々の機械が、なくなっていた。

攻撃されて抜き出されたにしろ、記録してある破損口はあまりに小さすぎる。

まるで外科手術でも受けたかのような。細心の注意を払い、取り出したかのような。

勿論、ただ攻撃するだけのあの怪物にそんなことをする知恵も、必要もない。

何のために？ わざわざこんなところに泥棒でも来たというのか？

急に背筋が寒くなった。

レーダーを窺うが、反応も異常もない。

だが、何もないはずの荒野が、急に恐ろしいものに見えた。

見晴らしはよく、隠れる場所もない。

首を振り、再びプロシオンに視線を戻す。

他の機体も調べてみる必要がある。

加えて、あの施設の内部も。

調査する場所は、もうひとつある。

応援がいるだろう。さすがに自分の手に余る。

どうやら、ノアの言っていた通りになったようだ。

レインは、遠くにいる少年と少女から意識を戻し、目の前の事態の把握のために動き出した。

「ここは、シュダル王国の首都である街で、人の行き来も多いんです。お店の数も一番ありますね。その代わり、競争も激しくてお店の入れ替わりもよくおこります」

「へえ。さっきの店は？」

「あれはこの王都が出来てからの時代から続いているお店なんです。親子で継いでいるわけではなくて、店の味を受け継ぐ人が店を続けている感じですね」

「そんなすごい店だったんだ…」

食事を終えた2人は、とりあえず街を歩くことにした。

人が行き来している場所で、カノンの青い軍服は少し目を引いたが、それほど視線を引きずることもなかった。食事をした店には次々と人が入り、長居をするのは悪いと思ったのだ。

よく晴れた日で、表に出ている人間も多い。中には露天商を開いている人間も居る。

「お兄さんのカノンは、どんな人だったの？」

あくまで世間話のように、カノンはこの世界にいた“カノン”のことを聞く。

食堂でも話す意志はあったのだが、彼女自身、一生懸命に事を整理しているようで、カノンは待つしかなかった。「今でなくてもいい」とは言ったのだが、一緒に歩いて見て、彼女自身が落ち着いた頃合

に、カノンは思い切って口にした。

「最初に出来た“ヴァリス”の一番最初の操縦者です。帝国軍人として、1年以上単機で戦果を上げ続けていました」

「最初の？いくつで？」

「13歳の頃です。：私とカノンは、軍に育てられていたから、そのために作られたようなものだったんです」

：あまりの既視感に眩暈がしそうだった。

それをアリアに伝えることはせず、カノンは先を促す。

「アリア、さんは帝国の人なんだね」

「ええ。その頃、王国側の開発は遅れてしまっていて、ようやくできたのが“ヴァリス・ローラン”でした。その搭乗者選ばれたのが、レイン・ベルモット少尉です」

操縦者がそれぞれ王国と帝国の人間に分かれていることは知っていたが、レインが最初のパイロットだとは知らなかった。

「2人はとても仲が良かったんです。たった2人ですけど、兄の負担は半分になりましたし」

「そのカノンは強かったんだね」

「ええ。1000匹の虫を10分足らずで片付けていましたから。今の怪物とは規模が違っていましたが、兄の実力の規模も、今いる操縦者とは桁が違っていました。レインさんはまだ操縦に慣れていなかったなので、苦労されていました」

「レインさんは元々：」

「軍の人間でした。なので、全くの畑違いのことだったんです」

思った以上に、“カノン”の情報はスラスラと出てきた。

彼女も動揺した様子はない。

今までの情報だけでも、ここに来てからずっと気にしていたカノン

の胸につかえていた疑問は一気に氷解をする。

レインが、どこことなく態度を硬化させていたことにも納得する。

「：その人にそっくりなら、俺の姿を見て驚いたろうね」

「そうだと思います。レインさんは、兄にも優しかったし、まだ役立たずだった私にもとてもよくしてくれていました。それは今も同じです。だから、私に貴方のことを説明している余裕もなかったんだと思います」

「あの整備のノアさんは？」

「ノアさんはまだ現場には派遣されていませんから、兄のカノンのことは話でしか知りません。お父様は“ヴァリス”の開発に携わっていた方で、本も何冊が出しているそうなんです」

フェニキアスの整備で、快活に話しながらも驚くほど滑らかに作業をこなしていた彼を思い出す。

元々整備畑の人間だった、と発言していた。それが、巡りに巡って今に至る、とも。

「カノンってどんな感じの性格だった？」

「ものすごいひねくれ者でした」

予想以上にストレートな答えが返ってきた。

「人を助ける、とかそういうことはあまり表には言わなかったです。ただただ与えられる仕事をして、敵を気持ちよく吹っ飛ばすのが一番好きだ、と公言していました」

正直付き合うのは面倒くさそうな人間である。

「本心半分、嘘半分だったと思います。レインさんが来るまでは、いつもふてくされた表情で“ヴァリス”に乗っていましたし、私のところへ帰るとすぐ嬉しそうにしていたから」

「レインさんが来たあとは？」

「最初はレインさんを警戒していましたよ。私だって怖かった。だからむしろ敵扱いしていました」

「そうだろうねえ」

カノンはレインとは短い付き合いであるが、見るからに無愛想なうえに軍人らしく体格もいい。仕事以外で近寄るのは少し勇気のいるタイプかもしれない。

「そういえば、軍人って聞いていたけど戦争以外では何をしているの？」

不意に思ったことを口にしてみる。

怪物が出て、いがみ合うことはなくなったはずだ。それが冷戦という形であっても。

「戦争はなくなりました。けれども、各地で小競り合いのような争いはあったんです。レインさんはそんなところで狙撃兵をしていたらしいんです。それで射撃型のローランに選ばれたかどうかは分かりませんけど」

「…やっぱり人間同士でも争いはあるんだ」

「ええ。表向きは収まっていますけどね。あと、“ヴァリス”ができるまで怪物をおさえるのは軍の仕事でした。今でこそ倒すことができますが、怪物は有る程度傷つけるとそのうち『ゲート』へ撤退するんです。何人もの犠牲者は出ていますが、何とかそれで対処をしていました」

「へえ」

一応はあの兵器を使わずとも対抗する術はあったらしい。

カノンが少し感心していると、エリアが不意に思い出したかのように問いかけてくる。

「そういえば、貴方の国はどんな国だったんですか？」

「俺？」

答えようとして、カノンは足をとめた。

通りかかろうとした建物のなかから、大勢の人が出てきたからだ。ぶつからないように、その波の前で待つ。アリアも気付いたようにそれにならない、他のものとは違う様式を持った建物を見上げる。

「ここは、教会ですね。これは星落教徒の人なんでしょう」

「せいらく？」

「ええ。…入ってみますか？」

「いいの？」

「ええ、大丈夫です。散歩のついでに入られる方もいますし。集会も終わりましたから、自由に出入りができると思います」

折角なので、人の波が終わったのを見計らい、足を踏み入れる。

予想以上に薄暗い空間だった。

しかし、天井は高く、広々としていて息苦しい印象はない。

正面には十字架のようなオブジェが高々と掲げられており、その後ろには何かを象ったステンドグラスが配置されている。オブジェの位置は非常に高く、見上げなければまっすぐに見ることができない。

オブジェの下には、教壇のような机が配置されていたが、今は誰もいない。その教壇から見据えられるような位置にある、並べられた長い椅子には、まばらに人が座っている。小さな声だが、会話をしているらしい。それほど堅苦しい場所ではないようだ。

アリアが最後列に座ったのを見て、カノンもそれに習う。椅子はそういった配置がされているのか、座るだけでオブジェが大分見や

すくなる。

「あの置物は、星を象ったものなんです」

アリアがカノンの視線に気付いて説明をしてくれる。

「ここは、空から落ちてきた神様を祀る場所なんです。知っていましたか？」

「いや、そういう方面には全然」

「そんな堅苦しいものではないですよ。星落教はむしろ日々の暮らしに感謝を捧げるものですし」

「一体どういったものなの？」

「私もそれほど詳しくはないのですが、簡単な説明ですよ」

要は、王国において広く浸透している宗教らしい。

遥か昔、空から落ちてきた神が、海だけだったこの世界の大地を作り、命を作り上げた。

そして、役目を終えた神は空へと帰り、星となって世界を見守っている、というものらしい。

全ては神によって作り上げられたものであり、自分たちを生み出してくれた神に感謝を欠かさない、というのが簡単な教えのようだ。確かに、それほど堅苦しくはない宗教らしい。

「あの星が、神様っていうわけか……」

良く見れば、十字架というには些か不ぞろいな形である。

そういえば、カノンの世界にあった国の国旗も星を象ったものがあったが、似たような形だった気がする。

「あのステンドグラスが、その様子を象ったものですね」

左右一つずつある巨大な窓には、見事な造形でその様子が描かれている。

鎧のようなものを全身にまとった人の形をしたものが、大地を作り

上げる様子が左に、大地にいる人間たちに見守られながら空に還って行く様子が右に。それぞれが克明に描かれていた。

「夜空を見上げれば、あの星は見えると思いますよ。一番輝いている星ですから」

「ここに来てから夜はすぐ寝ちゃうからなあ。あんまり星は見たことが無いんだよ」

「そういえば、アルデバランさんは空からやってきたんですよね」

アリアは、何気なくといったふうになんかそれを口にした。

「一体どうやって来たんですか？」

その言葉に、他意はない。

それは、その様子を見ればよく分かる。

だが、それは予想以上にカノンを動揺させた。

考えたことがなかった。

気付けば、だ。そう、気付けば。

気付けば、カノンはフェニキアスの中にいて、“敵”を発見した。その敵は何かを襲っている。助けなくてはならない。それだけで、カノンはその敵と戦った。

それ以前は？

「：アルデバランさん？」

頭を抱えてしまったカノンを、アリアが気遣うように窺っている。

「ちょっと、待ってくれ」

自分は、どこにいた？

（・・・なあ、お前は山か海、どっちがいいかな？）

懐かしい同僚の声は克明に思い出せる。

・・・その顔は？

年下の自分に、とてもよくしてくれた、一番優しい人。

無愛想だが、その胸には誇りが宿った気高い戦士であった人。
何をするにも一生懸命で、何よりも綺麗だった、初めての、

（駄目だ・・・）

思い出せない。

何で気付かなかったんだろう。

自分は、ここに来るまでの記憶が、ない。

なくなったわけではない。

だが、思い出せないのだ。

戦っている最中は何とか思い出せた。

しかし、何気ないことが、分からない。

「アルデバランさん？」

顔を上げると、心配そうな菫色の瞳と目があった。

その顔を自分は知らない。

今までに見覚えは、ない。

「・・・俺に家族はいなかった」

ゆつくりと、なぞるように。

会話ではなく、脳裏に浮かぶ考えを述べる。

アリアは、戸惑っているようだが、黙ってそれを聞いていた。

「生んでくれた母親も、相手として存在していたはずの父親も、知らない。少なくとも記録ではきょうだいなどいなかったはずだ」

「1人、ですか？」

「そうさ、俺は1人で生きてきた。……双子のきょうだいなんて、いた覚えもない」

それは、自分に言い聞かせているのと同時に、目の前の彼女に事実を述べているのだ。

彼女は、戸惑ったまま、それを聞いている。ちゃんと、聞いてくれている。

「だから、俺は君の探しているカノンじゃないんだ」

「…ごめんなさい、私、そんなつもりじゃ…」

「いいんだ。…こっちが勝手に不安になっているだけなんだ。一体、俺は何者なのかが、よく分からなくなっただけさ」

そうだ、1人だ。

自分は、生まれたときから1人だ。

守るべきものも、守られることもない。

それは、人間としては寂しいことなのかもしれない。
しかし、それは本当にどうでもいいことだ。

「…あの、外へ行きましょうか」

「ああ、そうしよう。それと、俺に敬語は使わなくていいよ。同年なんだし、ノアさんたちも使っていないから」

「え、あ、はい」

「あと、呼びにくいだろうから、ゼルカノンて呼んでくれ。それでも名前になるから」

「ええ……」

まだ茫然としてようなアリアを置いて、カノンは一足早く教会を後にする。

本当は、ゼルの部分は呼ばないのが正しい。

しかしこの世界の“カノン”は別にいて、自分はそのカノンではない。

だったら、自分の好きに呼ばせてやろうじゃないか。

…どうせ、帰らなきゃならない身なんだから。

（そうでしょう？ 帰らなきゃ、困る人だっているんだ）

一部ではあるが、この世界での自由は約束された。

帰る方法を、好きなように探すことはできる。

咎められることはない。

そもそも自分は、それを忘れてはならないのだ。

『今そこに在る存在（4）』

「シュダル王国は気候が温暖で、土地も豊かなの。だから、こうした果物もいっぱいとれるのよ」

「へえ」

教会をあとにして、2人は屋台で出ているジュース屋の前にいた。目の前で果物を潰して砕き、砂糖水と混ぜ即席でジュースを作るらしい。

思い出せる範囲の故国では、なかった店だ。

あるとしても、果物を目の前で、というのは無かったように思える。

子供連れの客に混じりながら、慣れたふうに注文をし、アリアはあつという間に2つのストローの刺さったカップを持ってきた。

「好き嫌いはないみたいだから、私と一緒に。リンゴと蜂蜜を少し混ぜたもののなの」

礼を言って受け取り、口をつけてみる。

すると、新鮮で爽やかな酸味が口のなかにひろがった。そして、蜂蜜の独特の風味と甘さも感じる。

「美味しいね、これ」

「そうでしょう？他にも色々あるんだけど、これが一番シンプルで美味しいの。よくお兄ちゃんがレインさんに買って貰ってたんだって」

あれから、アリアは空元気のようにカノンを色々な店へと連れまわした。半分は自分の用事だから、とカノンの服まで見立ててくれ

た。今は必要ない、とやんわりと断ったが、それでもいくらか気分は晴れた。そのうち、彼女も何か吹っ切れたようで、今では“カノン”のことを何度か“お兄ちゃん”と呼んでいる。

「レインさんが、ねえ」

「というか、レインさんと出かけたときに間が持たなくて、やたらめったらと食べさせてきたんだって。その様子ってちょっとおかしくて、見て見たいよね」

狙撃兵のレインは簡単に想像ができるが、年少の相手に大して持て余しているレインはあまり想像ができない。しかし言われてみるとそういう面には不器用であるような印象がある。

「私もここに来てからはレインさんとノアさんによく連れてきてもらったの。この国のことも、よく教えてもらったわ」

「へえ」

王都はこの国の首都、というだけあって、確かに広がった。

内部は店や露天商で賑わっており、湧き上がる活気めいたものを感じさせる。

その人ごみから抜け出し、今は店の少ない外周あたりにいた。

「随分高い壁があるもんだね」

一応王都の近くに行ったことはあるが、それはフェニキアスの内部の話であり、実際に立ってみるのは初めてだった。この王都は建物よりも少し高い外壁に囲まれている。

「一応、ということなんだけど、怪物に対する防御みたいなものよ。昔は対抗する手段がなくて、この上から砲撃をしていたとか。今はシェルターも作ってあるし、そうそう被害は出ないけどね」

「ああそうか。最初から“ヴァリス”みたいな兵器があるわけじゃあなかったんだ」

「ええ。確か、それを作る案はあったんだけど、技術の問題で遅くなったとか。」

怪物が出なかったら、それで戦争をするつもりだったんだろうか。さすがにそれを口にするのはやめた。

「詳しいことは本当に機密レベルなのよね。だから操縦者でも知らないことがあ、そこ危ない」

ふと気がつくと、外周にある道へ踏み出していたことに気がつく。カノンが退くと同時に、ゆっくりと1台の車が通って行った。

「あれの燃料は？」

「ん？ガソリンっていう液体燃料だけど…。カノンの国には車はなかったの？」

「いや、あるんだけど、形が違うから・・・」

ここに来るまでも車は利用した。だが内装や外見は上等であったものの、全体的なラインはずんぐりむっくりしていて、滑らかな曲線を描いていた国のものと比べてアンティークとして扱われるレベルであった。“ヴァリス”を見ると、文明のレベルは同じくらいか、と思うが、あれを見る限りは些か前時代らしい。“ヴァリス”のみが飛び抜けている、ということなのだろうか。詳しいことは学者でもなんでもない一介の兵士、そして世間的には子供である自分にはよく分からない。

こうやって不意には記憶を引き出せるのだが、じっくりと思い出そうとすると頭痛が伴う状態だ。不便ではあったが、戦闘面で何か影響があったら困るかもしれない。

「街から街への移動には車？」

「ええ。でも馬車の方がまだ流通していると思う。帝国でも王国でも変わらないわ。ここでは一定の時間ごとにバスっていうのが出ていて、料金は安いから出稼ぎの人とかはそれに乗ってくるわね」

「途中で怪物に襲われる心配はないの？」

「一応国土全体をセンサーで感知しているから、危なかったら止められるわ。昔は道中で襲われることもあったけど、今では事前に“ヴァリス”を向かわせることができるくらいだから・・・」

「あ、そうか」

そのレベルの差がよくわからない。

あんな兵器をばんばん飛ばして無人兵器を作り上げる基地と今この街とでは、まるで別の世界に感じられる。その怪物とやらの存在が、そのレベルを偏らせているのだろうか？

聞いていいものかどうか、よくは分からなかった。むしろ、他の仲間がここに来ていたら、どういったことになっていただろう。きっと自分よりかはまともな対応ができているだろうと思う。

もし一緒に来ていたら・・・。

「：教会ではごめんね。私、また失礼を試みたいで」

不意に、アリアが声を小さくする。

顔を見ると、本当に申し訳なさそうだった。

「貴方もいきなりここに来て分からないことが多いのに、それを考えずに聞いてちゃって：」

「いや、いいんだよ。それはよく考えていなかった俺が悪いと思う」
目の前の状況に流されるばかりで、ついぞ自分のことを考える暇をなくしていた。

それも大切なことであるのに、うつかりしていたというレベルではない。

「けど、それに関してはゆっくり思い出していくよ。話せるように

なったら、話したい」

「うん、私も聞きたいな」

そう言って柔らかく笑う少女は、とても魅力的だった。

しかし、この子も“ヴァリス”のパイロットなのだ。

あまり記憶にないが、ピンク色の機体がこの子のものらしい。

戦闘は見えていないが、どれだけ戦えるのだろうか。

「…カノンは、どうしていなくなったんだ？」

不意に提示したその質問に、明るかった少女の表情が曇ったものになる。

しかし、聞きにくいことであるが、聞かなければならないこともあった。

「突然、だった」

ざわめきが遠く感じる、人気の少ない壁の近くで、アリアは絞り出すように告げる。

「ある日、大きな戦いがあった。…私は、それを見送ったの。多分、レインさんも一緒に出撃をした。

そして、カノンはいなくなって、“ヴァリス”が帰ってこなくて…」
空になったカップが震える手で歪む。その様子は、とても恐ろしい夢を思い出す子供のようだった。

「御免なさい、私、覚えていないの」

彼女は泣き出すことはなかった。だがそれは決して慣れたわけではなく、散々泣きわめいた後のような疲れた様子だった。

「カノンを見送ったときと、レインさんだけが帰ってきた瞬間しか

覚えていない。断片的にしか覚えていないのよ。聞くのが怖い。レインさんが、カノンは生きているって言うてくれたから、ここまでやってこれたの。…戦いのことだし、機密とかもあるから、私が知っていても貴方に話せるようなことは…」

「いや、いいよ。悪かった、ごめん。ただ、何で今いないのかが気になっていたんだ」

こんな憔悴した様子を見せられて、彼女を責める人間などはいないだろう。それほど、彼女にとっては恐ろしいことだったのだ。鮮明に覚えていたら、立ち直れなかったかもしれない。

「カノンは今行方不明ということになっていて、…みんな死んだと思ってるわ。当然よね。機体ごとなくなってる、それが未だに発見されていないんだから」

「破片とかは？」

「何も。通信もできなかった。レインさんも物凄くショックを受けていたのは覚えてる。レインさんの方は無事だった。でも、カノンだけが消えたみたいに帰ってこなかった」

どういう状況なのかは分からないが、そのカノンが犠牲になってレインを逃がしたのだろうか。いや、それだったらレインはこの少女に顔向けはできないだろう。詳しい戦況を聞かない限りはどういうことなのか推理もできないが、とにかく、カノンは“ヴァリス”ご姿をくもらしましたらしい。

詳細は分からないし、知ることができないが、錯乱したときのアリアの様子によりやく合点がいった。

「レインさんは、何があったって言ってた？」

「私、そのことを聞こうとするんだけど、ダメなの。身体が言うことを利かなくなってる、レインさんも遠慮するしかない。でも、これだけは言ってくれたの」

アリアの瞳が、カノンを見る。
それは目の前のカノンではなく、暗闇に差した一条の光を見据える
ようなように感じられた。

「カノンは、絶対に生きているって。だから、私はカノンが居なく
てもここまで頑張れてこれた」

そう言ったあと、少女はようやく笑顔を取り戻した。

「頑張れば、カノンと会えるかもしれないんだもの。∴カノンが帰
ってきたとき、戦わずに暮らせるような世界にしておきたいし」

それに関して、カノンは何も言うことはできなかった。

言うことなど、なかった。

自分には、その権利もない。

アリアは笑うと、空のカップを捨てるためにカノンの分を受け取
ると、1人ゴミ捨て場へ向かっていった。

その背中を、何ともいえない心地で見つめるカノンは考えようと
した。

しかし、突然思考を遮るかのような頭痛が走る。

無数の針で刺されるような、耐え難い痛み。吐き気はしないが、身
体がよろける。

ざわめきが、遠い。

周囲に気付くような人間はいない。

カノンは1人でその痛みに耐える。

痛みの波は大きい。

同時に耳鳴りもする。

突然の身体の異常の原因を必死に探るが、上手く思考がつかない。

嫌な汗が全身に噴出す。

耳鳴りのなか、何かの音が聞こえる。

耳、ではない。

思考のなかに、直接、

――、――、――、――、――

「カノン、カノン!？」

気付けば、目の前に心配そうなアリアがいた。

いつのまにか近くの建物の壁に寄りかかっている状態だったらしい。そのことに気付いた瞬間、痛みはどこかに吸い込まれたかのように消える。

「どこか痛かったの? すごい汗よ?」

「いや…」

痛みがなくなれば、あとは全く平気なものだった。

だが、全身に汗をかいていて、痛みの残滓のようなものは感じている。

「本部へ行きましょう。帰りの車があるはずだから」

「いや、大丈夫。何ともないから」

「ダメよ、今ひどい顔してる。お医者さんとまではいかななくても今日は休んだ方がいいわ」

有無を言わず、アリアは通信機を取り出す。

だが、それを使う前に、鋭いアラームが鳴った。

周囲に居た人間が驚いた表情でその音の発信地を見る。

カノンも一瞬面食らったが、あたふたと慌てているアリアに指摘する。

「…その機械からだけど？」

「あ」

言われて初めて気がついたアリアは、慌てて操作をし、耳に当てながら少し距離を空ける。

操作をして音がなくなり、周囲の人間はなんだ、というように再び歩き始めた。

カノンは自分の国でも同じような光景があったな、と思い出しながらアリアの様子を眺める。

「…はい、ノアさん、今出ました。はい、…今戻るつもりです。え？ いや別に…」

それにしても、ああいった通信機というか携帯電話で話しているのは何だか少し滑稽に思える。

備え付けの電話に出ているときは普通に思えるのに何でだろう。

そんなとりとめのないことを考えているうちに、アリアの様子が少し変わる。

「え？ じゃあレインさんは…、無事なんですね、よかった！ それで、

はい。分かりました。すぐに戻ります」

話は終わったらしい。通信機を切って、アリアはこちらに戻ってきた。

「今すぐ帰るよう、ルブルー大佐が通達しているって」
その言葉とアリアの様子に、カノンも思わず身構える。

「何かあった？レインさんの名前が聞こえたけど」

「レインさんは無事みたい。けどできるだけ早く戻らないと」

「ああ、分かった。すぐに出撃？」

「いえ、そういうわけではないみたいなんだけど…。カノンに聞きたいことがあるって」

「俺に？とにかく戻らないと」

「そうね、体調のこともあるし、急いで本部に戻りましょう」

事態を把握すると、アリアが先導する形で走り出す。

街は平和そうであるが、実際には大きく事態は動いているらしい。先ほどの少女の素顔とは異なり、アリアは真剣な表情で本部への道を急いでいる。

“カノン”と、アリアはこうして一緒にいたのだろうか。

ここまで“カノン”のことは大体聞くことができた。

一生懸命頑張る彼女の“カノン”は、見つかる日がくるのだろうか。

突然いなくなった“カノン”。

誰もが戦死扱いをするその人物を、生きていると断言するレインの根拠とは、なんだったのだろうか。

一瞬、とても残酷な発想が浮かんだが、それは誰にも言わないことにした。

第20話『予兆』

時間は、少し遡る。

レインは、“ヴァリス・ローラン”のなかで、海を見ていた。

見ている、といってもカメラごしだ。潮風を感じることも何もなく、とても味気ないものだった。

王国の西側は海に面している。東側は帝国との境目、国境だ。

近くに村や町はいくつか存在するが、見晴らしのいいここには人里はない。

かつては存在していたらしいが、怪物の襲撃により文字通り跡形もなくなってしまった。

残る場所の調査を終え、後は周辺の警備を任されたレインは、通信を意図的に切りつつこの海岸へとやってきた。正反対の方向から一直線に飛んできたのだが、それをおかしく思われるのは少し都合が悪い。

ここに來た理由は、ただひとつ。本部でカノンたちと別れたときにあった、一つの文書。

それは、まだ軍の機密扱いで操縦者にも通達をされていない情報だ。

———海岸で、怪物のような黒い大きな影を目撃した。

ただ、それだけだ。だが、レインが飛びついたのは、最後に暗号で書かれた部分だった。

おそらくは、まだ確信が持てない段階であり、とりあえずの可能性

で記されたもの。

『一つの目が大きく輝き、どこことなく人に似ていたとのこと』

目撃したのは出稼ぎから帰る近隣の住民であり、月も出ていない晩のことだった。

しかも目撃した瞬間脱兎の如く駆け出したため、ろくに実態を観察していない。

それこそ雲からでた月を勘違いしたのではないか、など散々な考察も書かれていたが、どんな可能性であろうと、それがとんでもないことになる可能性もあるのだ。

一応こんな与太話のようなことでもきちんと記録に残さねばならない。

レインがその与太話のためにわざわざ飛んできたのは、その話だけではない。

レインは再び、砂浜へとカメラを映す。

人が来ないせいか、綺麗なものだ。着地の際にローランで砂を吹き飛ばした程度である。

レインが居る場所から、かなりの距離で砂浜が続いている。

波の音が集められ、操縦室へと流される。

それに風情を感じることもなく、レインは再び調査に向かう。

咎めるものは、誰にもいない。

例え、それがどんなに勝手なことだとしても。

本当にやるべきこととの区別は、ついている。

この情報を寄越した奴が、妙にしおらしかったことも、今は忘れ

ていてもいいはずだった。

結局、本来の目的の場所は搜索をしたものの、何も出ることもなかった。

ただパーツがなくなったプロシオンと、丸く齧りとられた建物、そして粉々になって原型を留めていない施設があっただけだ。いくらか冷静さを取り戻し、調査団を依頼してからはそちらに丸投げをすることにしている。特に基地から連絡もないし、今の王国は平和なはずだった。

「金属反応はなし、か」

無人兵器の破片でも反応してくれば、いくらか気分は楽なのだが、レインは期待などが色々と混じった気持ちを胸の奥に押し込みながら、ローランの巨大な足を砂浜に踏みつけていく。1人でよかった。何があったとしても、取り繕う必要もない。

レインはもう慣れたものだ。

この手の情報に縋り、こうしてノアにもアリアにも内緒で不毛な調査に向かう。

その姿は滑稽だろう。

しかしこれを知っている人間は、笑わないでくれている。それだけが、有り難かった。

しばらくこれを忘れていたのは、色々と忙しかったためだろう。

（そうだ、それだけだ）

決して、会いたかった顔に会えたというわけではない。

…忘れてしまったら、あまりにも可哀相だ。

「あいつ、結構寂しがりだったからなあ」

ふてくされた表情で任務に臨んでいた、“カノン”。
時に任務で遠くはなれた場所に泊るときも、遅くまで妹と通信していた。

ゼルカノンは、どうなんだろうか。

不意に出てきた考えに、操作の手が止まる。

見知らぬ世界に放り出され、こちらの都合に組み込まれつつある少年。

：言わないだけだろう。

言えるはずもない。

彼にとっては、この世界は未知であるだけでなく、知り合いも1人も居ない世界なのだから。

「：俺が考えていても、しょうがないか」

そうして、ヘルメットごしではあるが、頭をかき、操縦桿に手を置く。

そして、大きく機体をひねり、背後を射撃した。

凄まじい金属音のような悲鳴とともに、空間が捻じ曲がり、あのと
きと同じような巨大な虫が現れる。

レインは体制を戻し、すぐに砂浜から飛翔する。

虫は蠅螂のように両手が刃となっており、体には無数の足がついた
異形だった。

胸に小さな穴があき、そこから体液のようなものがとめどなく漏れ
始めていた。

悲鳴を上げて挙動をする度に穴から噴出し、そのうち悲鳴が憤怒の

呻きへと変わる。

今回は、あれとは違い“ヴァリス”と同じ大きさであった。

レインは上空にいながら冷静にそれを観察する。

“ヴァリス”を大きく横へ移動させると、直前にいた空間が無数の光に撃ち抜かれる。

上空には、似たような個体が数匹。

レインは確認すると、真下の個体を撃ちながら“ヴァリス”で海へと飛行する。

虫たちは獲物をとらえんとばかりにそれを追ってくる。

レインは陸地からある程度離れたことを確認すると、背中に新たに装備していたポッドをいくつか切り離す。それは追ってくる虫たちの目の前で爆発し、1体が爆風をもろに浴びて文字通り飛散した。

もう2体は損傷にも構わず刃を煌かせるが、勢いは死んでいる。

レインは背中のブースターを動かし、勢いをそのままに体をその方向へと向ける。

水平に飛ぶ機体のバランスは決して崩れることはない。

そのまま冷静に残りの虫へとハンドガンで射撃し、その体が飛散するまで撃ち続けた。

虫たちは、怒りの呻きを残しながら、刃でローランを捉える前に海へとその身を散らしていった。

レインはローランの体を戻すと、センサーを確認し、反応がなくなっただけを確認する。

微弱な反応も残らず消えたことを知るとゆっくりと減速し、海上でローランを静止させた。

操縦室の中で、ゆっくりと息を吐く。

僅かな反応があったが、どうやら隠れていたらしい。

そのタイプなら初めて戦った頃から確認されている。要は可能性があるときは一切気を抜くな、ということだ。丁度海が近くにある良かった。ここなら陸地が無闇に破壊されることも死体の始末をする必要もない。

もう反応はなく、『ゲート』の存在もないようだ。あのときのような無茶苦茶な事態は、さすがにそうそう起こらない。

起こるとしたら、ゼルカノンのような人間が再び来るくらいだろう。

少し不謹慎なことを考え、レインは首を振る。

今のゼルカノンでも混乱が起きているのに、これ以上異世界の訪問者なるものが来てしまったらそれこそこの世界が滅びるときかもしれない。自分たちで終わらせて、そしてゼルカノンは元の世界へ帰る。

それが、本来のあるべき姿なのだ。

（いや、：それに加えてカノンが帰ってくるのが一番幸せな形、か）
そうでもない、アリアは喜ばないだろう。レインだって、自分が幸せであるよりも、あの子が1人で泣いていることの方が重要だ。
そのためには、こうした不毛なことをこなして、可能性を1つでも積むことが大切なのだ。

「そろそろ、帰るか」

ざっと見たところ、砂浜には何の痕跡もない。

こうして海から見ても、海岸にはゴミ1つ落ちてはいなかった。
日も傾いてきたことだ。特に変わったこともないことだし、とつと
と帰って2人にも謝らなければ、

、
— — — — —
？

「ん？」

視線を上げると、そこにはローランの映している風景が映っていた。
た。

どこまでも続く海岸線。

緑の大地。人の気配がない、静かな大地。

それを遮るように、それは居た。

最初、それは黒い影そのもののようにも見えた。

だが、よく見ればそれはマント状の装甲であり、人間がそれをから
すっぽり被ったような姿をしていた。

そんなものが、海の上を、浮いている。

「は？」

呆気にとられながらも、レインはハンドガンを構えていた。
だが、それは何も動くことはない。

大きさは、先ほどの虫と同じ。“ヴァリス”と同じくらいだ。
だが、このような怪物は、見たことがない。

『おい、誰だお前！！』

思わず外部スピーカーでそう呼びかけてしまったのは、動揺と、そのマント状の装甲の下からのびた2本の足のようなパーツから判断してしまった結果だったかもしれない。

だが、その黒いマントのようなものは、動くことはない。

レインは、緊張に包まれたまま、そのマントを注視する。

頭らしい部分は、随分小さく、大きく広がっている肩の部分と高さはそう変わらない。

そこから順に、下を、観察する。

だが、瞬きをした瞬間、それはそこから消えた。

「!？」

リーダーには、反応はない。そもそも、微弱な反応すらなかったのだ。

————————ど———？

レインはローランを反転させ、背後を見る。

やはり、それはそこに居た。

移動をする素振りを見せることはなく、最初からそこに居たかのよ

うに。

（何だ、こいつは！？）

勿論こんな奴は見たこともない。

そもそも、あれは怪物なのか？

そして、妙に違和感を感じるこの造形…？

――――ダメ：――――

「！？」

黒マントの足のパーツ、らしきものが、徐々に、透けている。

その透過の速度は妙に速い。

そのまま、呑みこまれるように…。

――

「え？」

頭のなかに響く声に、レインが聞き返した途端、それは消えた。

後には、静かに波の音をたてる海と、その上を飛ぶ“ヴァリス”だけだった。

果たしてあれが現実なのか。

それは、どうか分からない。

だが、また面倒なことが起こるということだけは、分かった。

（どうやら、お前を探すのは後回しになるらしい）

レインは、冷や汗を感じながら、基地へと通信を繋ぐ。

（だけど、お前が帰ってくる時には、兄妹で暮らせるようにはしてやるよ）

第21話『静寂の始まり』

カノンは滑り込むように、楕円形をしているその空間へと身を投じる。

シートに座り、肘掛の部分を握ると目の前に大きな画面が現れ、カノンの両目をスキャンする。

一瞬で今居る人物とデータを照合すると、暗かった空間が一気に明るくなる。

カノンはシートに身を横たえたと、頭を覆うように光の輪が広がる。とりあえずは、これで一通りの動作ができるようになる。

カノンは周辺を探索をし、足元に誰もいないことを確認してから、一歩踏み出した。

フェニキアスという名を持つその機体は、青空の下に居る。

赤い装甲に包まれた、完全に人間を模した機体は、堂々と青空の下その存在を主張していた。

下にいる作業員のおそろおそろといった誘導を受け、まかり間違っても踏み潰さないように丁寧に発着場へと歩みを進めていく。

《調子はどうだ？アルデバラン少尉殿》

カノンの右上にモニターが開き、ルブルー大佐の音声のみが聞こえてくる。

「大丈夫です。挙動に問題はありません。むしろいつもよりいく

らいですよ」

《それは何よりだ》

続いて、基地からの発進許可が下りる。

周囲から人間がいなくなったことを確認すると、フェニキアスは前かがみになり、背中のブースターを開く。段々と機体の熱が上がり、十分なまでに状態が整うと、跳躍をするかのように、発着場の地面から飛翔した。

《本当に飛ぶのね…。びっくりしちゃった》

先に目的の場所へと向かい、空を飛んでいたピンク色の“ヴァリス”に追いつくと、すぐに通信が飛んできた。

「“ヴァリス”も飛べるじゃないか」

《ううん…。飛行機とかはあるけど、貴方のはまるで人間が飛んでいるみたいよ》

通信画面のなかのエリアは、本当に感心をしているようだった。

機体が飛ぶ、というよりもむしろこの機体の造形に感心をしているらしい。カノンからすれば、手が短く、足が折れ曲がったような造形をしている“ヴァリス”でも、2本の足で立つフェニキアスとなんら変わらない存在に思えた。しかし、人間の形をした機体が禁止されている世界の住人からすれば、この機体の造形は異質に見えるのだろう。

《これから行うのは、ポイント6に出現する『ゲート』の処理です。今はまだ出現は確認されていないけど。そのまえにそこに向かって、怪物を迎え撃ちます》

「了解」

前方を飛行する“ヴァリス”が速度を上げたのに続き、フェニキ

アスも調整をしながら同じように速度を上げた。

結局することによりは無い。

どこにいても、この機体とともに戦うことをするだけだ。

そう思いながら、カノンはシートに体を横たえた。

フェニキアスのカメラで写される光景をそのまま投影した空間は、まるで空に浮いているかのようにだった。

なんだかんだで、アリアと街を歩いてから5日ほどになる。

その間、機体の訓練や整備などをはさみながら、こうして出撃をする日々だった。

やることは簡単だ。

現れた怪物を迎え撃ち、『ゲート』が閉じるのを見届ける。

それ以上のことは起こらない。ただそれだけだった。

とりあえずは、懸念していた異常な怪物の出現は見受けられなかった。

カノンはこうしてアリアといることが多かったが、たまにノアとも出撃をする日もあった。

どちらといっても特に問題はない。

ただ、レインと会うことはなかった。

彼は彼で忙しく、たまに帝国領にも行っているらしい。

報告やノアたちに個人的な通信を送ることはあるが、カノンはあれから一切顔を見ていなかった。

《結局あの黒いお化けはなんだったんでしょーねー》

目的地に近づく最中に、アリアが独り言のように通信を入れてくる。彼女は彼女で、すっかりカノンに気を許してしまっているようで、カノンとしては拍子抜けをしている状態である。しかし、屈託なく自分を「カノン」と呼ぶし、兄の方のカノンのことも遠慮せずに話してくるので、逆に有り難かった。そういうば、話す人間といえ

軒並み男性ばかりで、こうして女性と話すのは久しぶりである。下心などは抱いてはいないが、やはりそういう人間とは違うものを彼女には感じている。

「さあな。でも本当に見覚えはなかったよ」

《あ、そういうつもりじゃないの。そういうのだって決まったわけじゃないし、どっちかというと私は戦うことを考えている方だったから、警戒して損したというか、拍子抜け？》

「その方が正しいかもね。見た目的にも…」

カノンの発言は、半分は何も考えずに作られたものだった。

2人が街から帰還してから、渡されたのは1枚の写真だった。

「なんですか、これ？」

アリアが大きな董色の瞳を丸くして、カノンの横からそれを見る。

引き伸ばされたそれは、大判であり画質も荒い。それに写されているんは、ただの黒い影だ。

「ローランから送られてきたものらしい。とりあえずは、操縦者だけに確認してほしいんだと」

2人を迎えたのはノアだけだった。レインはというと、あのあと結局帰ってこなかったらしい。

「レインは施設の確認諸々のために第5基地にいるそうだ。作業も手伝わなきゃいけないらしいしな。んで、その報告書と一緒にそれも送ってきた、と」

「『ゲート』の怪物ではないんですか？」

アリアはカノンの横からそれを大きな瞳でまじまじと見る。どう見ても、それはただの黒い影だった。

“ヴァリス”から送られたと聞かされなければ、単なるゴシップ記事に乗る得体の知れない画像に見えるかもしれない。

「いや、怪物の方は片付けたらしいんだがな。何も反応がないなか、そいつが現れたらしい」

「レインさん、無事だったんでしょうか」

「攻撃はされなかったんだと。ただ目の前に現れて消えた、このことだ」

「それってちょっと気持ち悪いですね」

「本当だよ。俺だったら腰抜かすよ」

「それってよく言ってるの聞きますけど、シートに座った状態でも言いますよね？」

「いや本当にその状態でも腰は抜かせるって。今まで何度もあったんだからさ…。カノン君はどう思う？」

段々と話がそれつつあるなか、ノアは黙ったままのカノンに話を振ってみる。

しかし、カノンは写真を見たまま微動だにしない。視線で穴を開けんばかりに見つめている。

いや、眉間に皺がより、睨みつけているといったほうが正しかった。

「カノン？」

横からアリアが話しかけて、ようやくはっとしたように顔を上げた。

「……これを送って、レインさんは何ていってました？」

「ああ、そういえば、君に見覚えがないかって聞いて欲しいって書いてたよ。ルブルー大佐も言ってたし」

「この影みたいなのですか？カノン君が知っているの？」

「えーとな、それが大々的に発表しないのはだね、ちょっとこっちに」

ノアが構わず出していた声を絞り、カノンの耳に顔を寄せた。

「レインたちの見解によるとだな。それが、完全な人型の機体だっという可能性があるらしい」

そのノアも今は出撃をしている。最近夢見が悪い、とぼやいていた。

あまりその写真を意識しないようにしながら、カノンは考える。

《：見えたわ、もう『ゲート』が出ている！》

アリアの真剣な声に、カノンは意識を現実に取り戻す。

見ると、遠方には広大な草原が見えており、肉眼でも分かるくらいの穴ができてるのが分かる。

この瞬間は何度見てもぞっとしないものがある。

《私が先に行って、規模を見てくる！カノンは後方をお願い。あの大きさだともう既に出現をしている可能性があるから》

「よし、分かつ、」

その瞬間、頭を刺すような痛みが走った。

そのせいで、目の前の“ヴァリス・リヴァイス”から動作が少し遅れることになった。

“ヴァリス・リヴァイス”はそのパールピンクの機体をまるで矢のように走らせ、『ゲート』へと直進する。その速度は極めて速く、

動作は滑らかで風そのものになったかのようだ。重量などは関係がない。

そんなリヴァイスを前に、『ゲート』からは怪物が姿を現す。

長い顔を持ち、その下にはびっしりと生えた鋭い牙が覗く。犬のような姿であったが、その口は裂いたかのごとく大きい。それが完全に姿を現し、大きく口を開けた瞬間、リヴァイスの腕に収納されていた長剣が真っ直ぐに突き立てられる。

響き渡る咆哮とともに、カノンの頭痛はなんとかおさまり、周囲を警戒しながらリヴァイスの後へと向かう。

リヴァイスがそのまま切り払うと、怪物の毒々しい体液が辺りに飛び散る。ダメージは負ったものの、その傷により興奮状態に陥ったにすぎない。

犬のものとは少し違う鋭い爪の生えた前足を目の前に振るうが、既にそこにリヴァイスはいない。

リヴァイスは背後にまわるとともに、流れるようにその肉体を切り開く。反撃をしようと怪物が爪をふるってもそこにリヴァイスはいない。そのときにはリヴァイスは攻撃の届かない距離にまで移動をしている。

そんなリヴァイスの背後を、赤いエネルギー波が照射される。

その途端、叫び声がいくつも増え、歪みからいくつもの怪物が現れるとともに、溶けるようにして消えた。

「大丈夫か？」

《ええ、大丈夫！》

リヴァイスは振り向きざまにハンドガンをとると、何発も目の前の怪物に対して射撃をする。

既に満身創痍となったそいつは、体に何発もの攻撃を受け、支える

ものがなくなつたかのように崩れていった。

後は、元のように静寂が草原に戻った。

《もう大丈夫みたいね。センサーに反応はないわ》

武器をしまうリヴァイスの背後で、フェニキアスは消し飛ばした怪物の残滓を踏みつけるように大地へと降り立つ。

そしてそのまま、ゆっくりと羽の輝きをおさめていく。

直立したまま、何のアクションもとることはない。

ただ、それは彼方を茫然と見つめているかのようにも見えるだろう。

《『ゲート』も消えちゃったみたい…。これで終わりみたいね。…カノン？》

ほっとしたように報告をするアリアを余所に、カノンは再び湧き上がる頭痛と静かに戦う。

先ほどのようなものではなかったが、今度は腹の底から苛立ちがわきあがるような不快な感覚がする。

それをぶつけるように、カノンは山脈の向こうをカメラごしに睨みつける。

《カノン！どこかおかしなところでもあったの？》

心配そうに声を上げるアリアに、カノンの視線は通信画面へと向く。

その少女の顔を見ていると、山脈の向こうから意識がはずれ、段々と頭痛も苛立ちもおさまっていく。

「…大丈夫。少し頭痛がしたただけだよ」

《そうなの？よくあること？》

「いや…。別にそういうわけじゃ…」

《でもこの数日よく言っている気がするわよ。よく顔をしかめて頭

をおさえているでしょう?》

言われてみれば、そんな気がする。本格的に任務に参加するようになってから時間は経つが、その頃からこうした頭痛はあった覚えがある。最近によく苛立ちを感じることもあり、本格的に活動をするにも関わらず、調子は悪くなっていく一方だ。

《ルブルー大佐に相談をしたほうがいいと思う。この数日ずっと機体の整備が任務じゃない? まだ危険な状態にはなっていないわけだし、もしものときに備えて休んだ方がいいと思うの》

「うーん…。いいのかな」

《私たちだって休むことは望めばできるわ。貴方は特に環境が変わったこともあるし、自分が感じていなくても負担になっていることはあると思う》

アリアの言葉は、こちらに押し付けるのではなくゆっくりと言いつけてくれるようであり難かった。思えば、こうした気遣いは久しぶりな気がする。基地の人間がする緊張感のあるものとは全く違うものだ。

「…分かった。少し休むよ。基地に帰ったら打診してみる」

《その方がいいよ。倒れたら余計に大変なもの。ダメでも私とノアさんが直談判するからね》

心底安心をしたような顔で、アリアは周辺の調査をすることを伝えたと通信を終えた。

やっぱり違うな、とカノンと思う。これがレインだったら、今の苛立ちを抱える自分は聞かなかったかもしれない。その理由は、少しずつ思い出す向こうの世界の同僚が原因かもしれない、とはっきり思い出せないなか薄々感じていた。

カノンはしばらく山脈を眺めると、リヴァイスに続いて残っているかもしれない怪物を探すことにした。

「ノアさんはどこらへんに行っているんだっけ？」

《うーん、確か丁度私たちとは反対だと思う。この大陸の南の方よ。大きな湖があるの》

「へえ、湖か。そういうところにも行ってみたいね」

《綺麗な場所よ。霧がかかったときは特に綺麗なの。でも道が通ってなくて、“ヴァリス”でもなければ人は行けないの》

「ならあんまり踏み荒らされてないから綺麗だろうね」

カノンはそんな取り止めもない会話を交わしながら、誰もいない、霧のかかった湖を想像する。

誰もいない、静寂に包まれた湖というのは、本当に綺麗な場所なんだろう。

こんな怪物の体液のようなもので汚される、などといったことにはならないことを願った。

「…まいったね、こりゃ」

ノアは、“ヴァリス・レヴァルダ”のなかで溜息をついた。

それは目の前の光景に対する、失望のようなものだった。

丁度、霧がかかる日だったようで、外にでなくても周囲の空気はひんやりとしていることは分かる。

かつて少女が歓声を上げたその湖は、今も変わらず澄んだ水を湛えている。

しかし、レヴァルダが立つ湖の傍には、得たいの知れない、いや触らなくても分かる薄汚れた液体が飛び散り、湖へと流れ込み始めている。

そして、その周囲には、鉄の塊と“生物”の破片が飛び散り、あらゆる種の地獄のような光景を繰り広げていた。

第22話『蝕む夢(1)』

ノアは正直父のことを覚えていない。

いつも家を空けており、いつのまにか死んでいた、といっても過言ではなかった。

だから、父のあとを追って、というわけでもなくノアは自分でその道を選んだ。

しかし、周囲はそうは見えてはくれない。いつもいつも、父という余計な存在が彼の道にはちらついた。

それでも彼はその名前に踊らされることもなく、個人としては優秀な人間となった。

“ヴァリス”のパイロットに選ばれ、青天の霹靂というのはこういうことか、と思いながらもようやく父と比べられない道に進んだことを知ったとき、少しだけほっとしたのは、誰にも言っていない本当のことだった。

父が基礎を立てた“ヴァリス”に、搭乗をするノア自身が改良を加えた“ヴァリス・レヴァルダ”は、霧の立ち込める湖の傍を歩いていた。検査のためのスキヤナーを起動させ、足元をひたすらカメラで映し出す。

普通人の立ち入らないこの場所は、元々はひどく綺麗なものだった。

ただ、散乱をする生き物や機械の破片がその体液やオイルで凄まじく景観を不快なものにしている。

「ここにプロシオンは配備されていないはずなんだが…」

怪物の破片だけならこれほどまでに違和感はない。だが、プロシオンの破片まで散らかっている限り、それはおかしい事態となっている。無人兵器であるプロシオンは、数に限りがあるし、基本的には人里を守るような位置に配備されている。だが、こんな誰も寄り付かない場所になんて警備をする必要もない。調査のために送り出されることはあったが、そんな命令も聞いてはいない。

そういえば、レインの報告によると、元々施設に配備されていたプロシオンの数は足りなかった、と聞いている。爆発したものもあったため具体的にはまだ確認はされていないが、気味の悪いことも言っていたので、これが施設にあったプロシオンの残骸かもしれない。

妙な緊張感のなか、ノアは大きく欠伸をした。

1人なのをいいことに、遠慮なく思い切りだ。だがそれでも眠気はとれず、何度か繰り返した。

「……とっとと帰っても仮眠はさせてもらえるよなあ」

カノンにもぼやいたが、最近よく眠れないことがあった。

眠れることは眠れるのだが、その間にとっても嫌な夢を見る。

まるで自分がそこにいるかのような感じがするような鮮明な夢。

そのなかでとんでもないことになって、どうしよう、どうしようと思っっているうちに目が覚め、ほっとするようなものだ。

それが、ここ数日続いている。

見ることがない日は、その夢で眠気が最高までできているときだった。

以前から、自分の知らない場所の夢はあったが、ここ連日はひどいものだ。

それが決まった場所であることは確かなのだが、見た後はどうも思えない。

それがとても歯がゆくて、苛苛するものだった。

シアンに相談すると、古本屋で買ったらしい夢に関する占いの本を

投げつけられたが、勿論役に立つことなどはなかった。

人の乗るものを点検する身となればそういった縁起は気にするものの、ノアもシアンも単に記憶の整理として行われる夢にそういったものを求めることはない。

そしてその本に提示される夢には、ノアの見る夢で役に立つようなことはなかった。

「とりあえず記録残すか。破片を持っていけば照合もできるだろうし…」

レヴァルダの手を伸ばし、プロシオンの破片を取って観察をする。表面は綺麗なものだ。だが、その切り口、というか破壊された部分は妙に綺麗すぎるものだ。

まるで何かが切り取ったかのような…。だが周囲の破片は似たようなものだったが、大きさはまちまちだ。1つは焼け爛れたような痕があった。

「まるで耐久実験みたいだな…？」

装甲の耐久を計る際、こうしたくず鉄はよく見た。

幼少の頃、父が小さな破片を加工してくれたものはこのようなものから作られたものだったらしい。

気に入って首に下げていたあれは、どこにしまっただろうか。

誕生日に帰ってくるなど殊勝なことはしなかった父は、そうして不器用に自分をかまっていた覚えはある。だが、ノアのやることなどは無関心で、ノアにとっては肝心な部分でやってほしいことをしてくれない、と思っていた。

（なんで親父のことを思い浮かべるんだか…）

感傷的になっているわけではないが、ノアとしては居心地が悪い。ゲイルシュタインの名前は大概の研究者が知っている。それこそ帝国でもだ。

そもそも“ヴァリス”の基礎をうちたてたのはノアの父であった。実際には他の研究者も大勢いたが、一番名前を知られているのはゲイルシュタインだった。

ノアにとってはただ家族だった男だ。何せ父親からはそういった研究のことは一切聞いていない。守秘義務があるだろうし当然のことなのだが、まるで自分がその血を引くサラブレッドのように言われるのは我慢ならなかった。しかし、それに対して態度で表すほどノアは子供でも、勇気があるわけでもなかった…。

「…もう帰るか」

急に嫌な気分になった。怪物の破片も採取して、とりあえず頭を使うことが仕事である連中に任せよう。自分は不本意ながらレヴァルダに乗って戦う人間だ。眠たい頭でこれ以上考え事をして、おかしなほうへ思考を進めることもない。

レヴァルダは破片をいくつか機体にしまうと、そのままゆっくりと飛び上がる。

重力装置の調子は極めていいようだ。

とんでもないときにはこうした浮き上がる動作でもぐらついてしまうときがある。

整備をしながらも、搭乗もできる唯一の人間であるノアの意見は、整備班にとっても有り難いものらしい。

そこだけは父の名前もなく、ノア個人が必要とされる場面だった。

（どうも調子が出ないな）

どうして今、会うことのできない人間をこう思い出すのか。
普段は微塵も思い出すこともないのに。

（とりあえず連絡して、調査班を送って貰うか）
上昇する動きをそのままに、通信をしようと操作盤へと指を伸ばす。
“ヴァリス”を覆うほどの生い茂る森を抜ける。

その瞬間、アラームとともに、目の前の画面のセンサーが中心を
取り囲むように反応を示しだす。

「！！」

同時に無数の攻撃がこちらに向かうことを示す。
ノアはブースターを切り、上昇しはじめていたレヴァルダは勢いよく
地面へと着地した。
レヴァルダが浮き上がろうとしていた空間を、肉眼でとらえきれない
攻撃が貫通する。
それは木々をかすただけでなぎ倒し、潜んでいたらしい鳥がやか
ましく飛び立った。

攻撃は止むことはなく、レヴァルダの居場所に執拗に攻撃が向け
られる。

ノアは急いで離脱するとともに、大型のハンドガンを腕に装備させ
る。

同時に肩に設置したミサイルポッドを起動させ、大腿部にあたいる
部分に装備させていた砲塔も起動させる。

他の“ヴァリス”にはない、レヴァルダにあるもの。それは特殊
な装備をつける、というだけでなく、一度に装備できる武装の多さ
にもあった。しかし、それが常に功を奏すかは分らない。とりあ
えず、敵の数が多い際には真っ先に出撃を命じられる機体でもあつ
た。

「多いな…」

画面に表示される周囲の索敵結果を見て、ノアは誰ともなしに呟く。最も高性能のものを積んでいるレヴァルダのセンサーは、通常よりも遥かに広い範囲の敵を探することができる。これにより、戦闘の最中に逃げ出した個体を見つけ出すことも容易となっている。

現在センサーが見つけ出している敵の数は、レヴァルダを中心とした四方に平均5、6匹といったところだ。見失ったのか、攻撃の手は緩んでいるが、それでも炙りだすかのように森に攻撃が降り注ぐ。

レヴァルダは森のなかを縫うように移動をしながら、広いところを探す。今飛び出したとしても狙い撃たれるだけだ。レヴァルダには攻撃される前に移動をするリヴァイスのような機動性も、ここから確実に敵を狙い撃てるローランのような仕様も腕もない。

だが、それはレヴァルダが他の“ヴァリス”におとるということでは決していない。

森の上空では黒い甲殻に覆われた巨大な虫たちが獲物を待っていた。

空を覆うように、大小違う同じような身体を持った虫たちが、羽を震わせながら、涎をしたたらせ隠れている“獲物”を待っている。獲物の位置は確認したものの、たった1体。

森のなかに突っ込んで探すこともない。

こうして待っていれば、逃げ場は上空のみ。そこを出てきた瞬間を狙えば、最も効率よく狙うことができる。

それを、彼らは考えることもなく知っていた。
獲物を捕らえるために生きる、本能レベルでの行動である。
そのためには、獲物よりも辛抱強く待てるだけの忍耐力を、彼らは
持っていた。

彼らは獲物を炙りだすために再び口を開け、攻撃準備へと入る。
何に頼ることなく、彼らは狙うことができる。
ゆっくりと、ゆっくりと。

彼らは、時間などといったものには縛られない。
ただ、目的のために待つことができる。

だが、攻撃をする瞬間、“獲物”の居た位置から何かが飛び出す。
彼らのうちの数体が、歓喜の声を上げて羽を震わせる。
だが、次の瞬間、それは爆音とともに消え去る。

白い煙とともに撃ちあがったそれは、いくつもの塊に別れ、虫た
ちに直進する。

その急の襲撃に、虫は回避運動をとるが、それを逃さないとしてもい
うようにそれは虫たちを襲う。

命中をし、全て爆炎と化し、苦痛の呻きすら上げさせることはない。
虫たちの混乱のさなか、発射された位置から即座にコバルトグリー
ンの装甲を持った機体が飛翔する。

爆炎に包まれた空の方へと移動をしながら、大型のハンドガンを構
え、うろたえる虫たちに乱射する。

狙いなどはつけていなかったが、ろくに身動きのとれない虫たちは
いとも簡単に撃ち落されていく。

爆炎がおさまった辺りで、機体の肩のミサイルポッドが開き、一斉
発射される。

大きく広がって発射をされたミサイルは、正面だけでなく、左右に
もいた集団をも巻き込んでいく。

間を縫うように発射をされたそれは、群れの中心に来たところで爆発をする。

その破片、熱で、虫たちは反撃の暇もなくその爆発のなかで消し飛んでいく。

その爆発のなか、まだレヴァルダの方へと向かう個体を、ハンドガンで冷静に撃ち抜いていく。

頭に血が昇ったような状態の相手に、冷静である側が負ける道理はない。

最期に2発のミサイルを撃ち、残骸ごと残っていた固体を吹き飛ばした。

センサーから、反応が一斉に消える。微弱な反応すら、先ほどのミサイルで全て消し飛んだ。

ノアは大きく息を吐いた。まだ手が震えている。機体の状態を見ると、攻撃がかすった部分もあったが、特に問題はない。

このまま戦闘も問題なくこなせる状態であることを、ノアはきちんと確認をした。

ミサイルの弾数もたつぷりと残されている。

別に遠慮はしなくてもいいのだが、常に弾数を残しておくことを意識しなくては、不意の襲撃が常であるこの戦いでは重要な問題であった。

今使った武装は、ミサイルポッドと大型ハンドガンだ。集団掃討用の装備であり、たとえ千匹の怪物が来たとしても全てはらいのけることができる。

“ヴァリス・レヴァルダ”の特徴は、こうした大型装備や他の機体にはない搭載数の多さだ。いくら射撃用のローランでも何千発も

のミサイルを搭載することはできないし、機体の目的にも合わない。装備を搭載すればするほど機体は重くなるし、全ての特徴を把握しなければ戦闘で役に立つこともできない。そのため、整備班として装備の開発のノウハウを知り、その性能を手取るように理解ができるノアはレヴアルダの目的にはうってうけの人間だったというわけだ。

とはいっても、そのようなことで選ばれた、というわけではないというのは、機体を開発した研究員たちの言葉だ。ノアも別に否定はしないが、わざわざ畑違いの人間が選ばれたことに、何も言わない人間はいるわけではない。別に陰口を叩いたところで、どうにかなる立場でもないのだから、ノアはもう諦めている。

移動しながらの戦いであったため、調査していた湖からは大分離れてしまった。

1人で何とか勝利をした充実感を胸にしまいながら、ノアは再び通信機に手を伸ばす。

が、そのとき急激に眠気が差した。

「あれ？」

重くなる瞼にさすがにうろたえる。

だが、必死で起きようにもさすがに抗えるものではない。

「マジ、かよ、」

慌てふためきながら、とりあえず着地をできる場所を探す。

悪いが木をなぎ倒しながらでも地面へと降りなければ、叩きつけられる羽目になるかもしれない。

（戦闘の緊張の、せい、か？）

膝を叩きながらも、必死に降り立つ操作を続ける。だが、そのとき鋭いアラームが操縦室へ響き渡る。

「は？」

センサーに、反応が、ある。

消え去った反応とは違う、もっと大きな。

だが、それはもうカメラでも十分写せる距離にあった。

次の瞬間レヴァルダの居る空間を、赤い光が包み込んだ。

『蝕む夢(2)』

「あれは村かな？」

《ええ、そうみたい。放牧の最中みたいね》

とりあえずの任務を終え、基地に向かい十分に高度を上げて飛行する2機の下に小さな家屋の集落が見えた。

小さな点のようなものがいくつも緑の草原にある。

カメラを拡大すると、それはカノンのいた世界と変わらない家畜と、それを見る人間だった。

近くには畑もあり、その一帯が村のものなのだろう。

しかし、それを加工ように高い壁も存在した。

《あの壁も、飛ぶ怪物が多いからあんまり役に立たなかったのよね》

アリアも下を見ていたのか、ぽつりと呟くように言った。

《帝国にはこんな光景はないから、とても眩しく見えるわ》

「帝国は雪が積もっているんだっけ？」

《そう、今の時期はとても寒いわ…》

まだ見ぬ他国を、カノンは想像する。

故国も雪は多かったが、それでも真下のような環境は存在していた。帝国は一面が真冬のような状態なのだろうか。それを見る日は、カノンが帰るまでに来るのだろうか。

「…王都ほど栄えてはいないんだね」

《そりゃそうよ、王都は首都だもの。町もあるけど、あれほどではないわ》

「ふうん」

真下にある光景は、資料でしか見たことがないほどの前時代のようにも思える。

その上を飛ぶ異世界のフェニキアスとはかく、“ヴァリス”の姿はとても違和感がある。

カノンの世界の兵器というものは、様々な試行錯誤の上に基礎が打ち立てられたものだ。

しかし、目の前の“ヴァリス”はその試行錯誤を乗り越えて生まれ、たぎくしゃくしたものを感ずる。

何せ、それが作られ始めたのは20年ほど前であり、今も何の問題もなく空を飛び、特に事故も起こっていないらしい。

まだこの世界のことは断片的にしか見ていないカノンでも、よくわからない違和感のようなものを持つほどに、この世界の文明はどこか積み立てたものがおかしく思う。国の学者に見せてみたら、どのような見解を持つのだろうか。

《私が戦うことができるのは、お兄ちゃんのおかげだけじゃないの》
「うん？」

《ああいった人たちの生活が、変わらずに送られることを、私たちはしている。私たちは、多くの人の命を守っているの。直接感謝されなくたっていいのよ。こういった変わらない姿を、私はとても幸せに思うの》

もう村は通り過ぎたが、アリアはそう感慨深げに呟いた。それには、危なげな印象もなく、ただアリア個人の考えをゆっくりと述べていることが感じられた。

カノンの脳裏に、あの日助けた2人の子供が浮かぶ。

幼い2人は、怪物に狙われながらも自分たちの加勢で逃げ出すことができた。親のもとへ帰れただろうか。そういえば、カノンが助太刀をする前にその子たちを助けに走ったのは、横にいるピンク色の機体であったことを思い出す。

（なら、大丈夫か）

カノンは勝手に1人で安心をする。余計な波風を立てる必要は、

どこにもない。

《レインさんは、そういうのはどうでもいいみたいに言うけど、でも誰よりも身体を張るのはレインさんなのよ。頭を使うのは主にノアさんなんだけど》

（レイン、さんか）

腹の底にしまった苛立ちが疼く。しかし腹に一発拳を入れることで、それは霧散したように感じる。

あの日から会わない、この世界に来て最初に会った人間。

消えたり、出たりするその記憶のなかから、その顔に思い当たるものがある。

しかし、それが誰だったのかは明確にはなかった。

直接、再会することができればすぐに名前と顔が出てくる自信はあるのだが…。

《あれ？》

「どうしたの？」

考え事を始めていたカノンは、アリアの声に反射的に返事をした。

通信画面のなかのアリアは額の部分をヘルメットごしにおさえ、難しい顔をしている。

何か反応でもあったか、と思い、カノンも確認をするが特に異常はない。

頭痛の方はすっかりおさまり、今のところ気分はよかった。

「アリア？」

《この近くに『ゲート』出現の兆候を感じるの…》

アリアの言葉は、カノンに聞かせるというよりも、確認のための独り言のようであった。

心ここにあらず、という様子で操縦室で何かを操作している。

《この近く…？いいえ、真下…いくつも、ある…》

「何で分かるんだ？」

カノンはセンサー画面を見るが、特に反応はない。

だが、フェニキアスのセンサーは『ゲート』を察知できるように調整したとはいえ、まだまだ万全とはいえない。だから専用に作られている“ヴァリス”のセンサーの方が確実なのだ、と思った。しかし、アリアはカノンに答える気配はない。

《ここに出現はないはずなのに…。新しい、発現…？でも、何か違う…》

「？」

伏せられたアリアの目は、まるで眼下の景色を直接臨んでいるようだった。

何にせよ、今カノンが置いてけぼりをくらっているのは間違いない。内容は、これから少し面倒なことになりそうな気配だが。

《ごめんなさい、カノン。1人で帰ってくれる？》

ようやくこちらを見るようになったアリアは、少し戸惑っているようにも見えた。

「え、いや『ゲート』が出現するんだったら、俺も…」

《ううん、違うの。…ただの調査だから。私1人で十分よ》

「頭痛はもうしないよ」

《本当に大丈夫なのよ。単に心配なだけなの。それに、調べに行くのは村の周辺だから、その機体で降りたら大騒ぎになっちゃうわ》

一応はフェニキアスのことは国中に通達されているらしい。

新しい兵器として運用されているということとで納得はさせたらしい

のだが、この造形を見ると違和感を持つものもいるかもしれない。今は遙か上空だから騒ぎは起こらないものの、さすがに無遠慮にあいつた場所に踏み込むのは慣れた人間でもないが無理かもしれない。

「…じゃあ、帰ってるよ。基地の人には言っておくから」
《うん。ごめんね。帰ったらちゃんと休んでね》

アリアは通信を切ると、ゆっくりと真下の方へリヴァイスを降下させていった。

カノンはそれを見ながら、一緒に過ごすアリアの顔を思い出す。菫色の瞳の、儂げな少女。カノンが今まで会ったことのある女の子のなかでもとびつきりに可愛いほうだろう。そして、いなくなったたった1人の兄、そして力を持たない人のために一生懸命戦おうとしている。

（やっぱり、いない）

混濁する記憶の海をいくら探しても、あのような存在は自分の傍にはいなかった。

生まれてから、ずっと。

ゼルカノン・リゲル・アルデバランに、家族はいない。

両親から生まれたのかも、試験管から培養された存在なのかも、分らない。

その施設は大きな事故でもうなくなってしまったはずだから。

あの少女と一緒に過ごしていて、1番辛いのは、もしかしたらカノンの方なのかもしれない。

（起きろ、ノア）

父の、声がする。

よかった。今日はあの夢を見なくていいのか。

（起きろノア。やることあるんだろう）

夜更かしして本を読んだノアを起こす父は、よくこう言ってノアを揺り起こした。

お前には、やることあるんだ。だからこんなところで寝こけている場合か。

口数の少ない父であったが、要はこんなところだろう。

でも、眠いんだ。
だから、

（ノア、起きろ）

うるさいな、ちゃんと起きるからあんたは仕事に行けよ。

——何よりも大事な“お仕事”なんだろう。

（ノア起きろ）

だから、

（このままだと、お前は死ぬんだぞ！！！！！！！！！）

その瞬間、ノアは目を覚めました。

慌てて周囲を見回すものの、真っ暗だ。

操縦室の電源が落ちたわけではない。

カメラに映し出されるのは、真っ暗な森だった。

うつぶせになるようにして、レヴァルダは木々をなぎ倒した中心に倒れ伏していた。

「あれ……？俺、寝たのか？」

あのまま眠気に逆らえず、落下したのだろうか。

笑えない。ほんの少し上だったから良かったものの、他の場所であつたらどうなっていたか分からない。

また、あの夢を見ていた気がするが、思い出せるのは父の声だ。あんなふうに怒鳴られたことなど、ないのに。
一体、どうして、

レヴァルダは、起き上がる。

その機体には、傷一つない。衝撃でいかれた箇所もないようだ。
ゆっくりと起き上がり、そして、

目の前の、黒い影がカメラに映し出される。

「え」

思わず操縦桿から手が滑りそうになる。

黒いマントを頭から被った、2本の足を持つ、影。

それが、レヴアルダの目の前に立っていた。
どうしていいか、分らない。

全く知らないわけではない。あの、ローランに記録された写真。
まさか、どうして、自分の目の前に、

「―――ど―――んだ、―――」

頭の中で、声がする。

頭を振るが、雑音のような音とともに、消えることはない。

「え？え？」

みつともないくらいにうろたえながら、彼は操縦桿を握り、レヴアルダを後退させる。

その瞬間、凄まじいエネルギーを、センサーが感知する。

轟音とともに、赤い光が視界を包み込む。

そして、隣にあった木々が消失した。

ノアはそれで眠る前の記憶を呼び起こす。

目の前を包んだ赤い光。

それは、レヴアルダに向けて発射されていた。そのあとに、記憶がなくなっていて、

カメラは、正面を向いたまま、黒い影をとらえている。

その黒い影の、マントの部分。

そのから、生えたような腕が、こちらに向けられている。
そして、そのまま、どこからともなく、光が、集まって、

レヴァルダは咄嗟に腕にある装甲を展開し、轟音と衝撃を受け止める。

対衝撃もなされた操縦室にまで伝わる振動。
光が消えた瞬間、装甲は弾けとんだ。

それを機に、レヴァルダは敵のなくなった上空へと飛翔する。

（ヤバイヤバイヤバイ！！！なんで俺だけのとき、レインにこういうのは、いやいやいや俺も操縦者だし！？1人でもちゃんとできたじゃん！？いやそれは怪物に対してであって、あんな真っ黒お化けなんてマニュアルにも載ってないし！？ていうかあんなの存在していいのか！！！？？やっぱりそうだ、レインあいつどこいんだよいや呼ばないとこないし、呼んでる暇があるか？！！）

先ほどのまでの冷静な対応はどこかへ吹き飛び、ノアは1人混乱の極みにいた。

それでも飛んでくる赤い光に回避運動をとるのは、まがりなりにも人類の救い手である操縦者たるゆえんなのか。

しかし操縦桿を握る手は特殊スーツごしであるのに今にも滑りそうだった。

（あいつ寝ている俺をずっと見ていたんだろうか？）

回避をしながらも考えは冷静になり、赤い光の出所を注視する。上空から見れば、放射線状に森は吹き飛んでいる。火の手も上がっており、静かだった森は黒煙を上げる羽目になっている。

よく装甲で防御できたものだが、怪物の攻撃を幾度となく防いできたあれがたった一度の攻撃で吹き飛んでしまった事実は、ノアの焦りを助長することになっていた。

（基地に帰ろうにも、あんな奴を連れて行けないし！！！！！！）

通信画面を開き、とりあえず最寄の基地へと繋ごうとする。

だが、状態が非常に悪いことを示す画面が出るだけで、一向に声が聞えることはない。

少しずつ、冷静になったノアは、武装が十分残っていること、そして機体の状態は万全であることを思い出す。ミサイルポッドが衝撃で誘爆をしていなかったことに感謝しながら、赤い光の元へと容赦なく撃ち込む。勿論弾数も確認しながら、狙いをつけて確実に当たる。

木々を巻き込みながら爆炎が上がり、ノアは攻撃の手をとめる。こういうときが一番嫌なときだ。なんというか、潰した気持ち悪い虫を捨てるために触らなければならないような嫌な感じがたまらなく鬱陶しい。

眠気なんてとうに吹っ飛んでいる。

とりあえず、センサーを起動し、何もないことを確認、

「ごめんなあ……」

再び頭の中に来た声に、ノアの手が止まる。

その瞬間、黒煙のなかから、黒い影が飛び出す。
マントから伸ばしたかのような手を、翳しながら。

そして、レヴァルダの頭部へそれが当たる瞬間、

ノアの意識は、遠いところへと飛んだ。

『蝕む夢(3)』

リヴァイスは、空を駆ける。

その速度は、この世界のどんな乗り物より速い。

同じ“ヴァリス”であっても、だ。

パールピンクが特徴的なその機体が横切った次の瞬間、すれ違った巨大な甲虫は悲鳴を上げる間もなく

何個の塊に分かれることになる。そのままの速度、軌道を保ちながら、残ったもう1匹をハンドガンで何度も撃ち抜き、そちらは粉微塵となった。

異変を探る最中、突如目の前に出現したように見えた怪物。

それを、アリアは落ち着いて対処をする。

周囲に敵がいなくなったことを確認しながら、アリアはゆっくりと速度を落とす。

空に気がねをするものなどはない。地上にある村に騒音をもたらすこともないだろう。

アリアは体全体にかかっていた抵抗が緩まるのを感じながら、ゆっくりと息を吐いた。

異変を感じて、少し戻ってみればこれだ。

楽に対処ができる大きさの怪物が数体こちらに向かってきた。しかし、人里に1匹でも下りれば大変なことになるだろう。

やはり何かおかしいことが起こっているのかもしれない。

レインも先日の個人通信で再三注意していた。

彼は忙しくて、アリアよりも大人だから、アリアにが知らないことを上の人間から言われているのかもしれない。それを知りたい、と

も別に思わなかった。

だって嫌がおうにでも知ることになるのだから。

アリアは滞空しながら、センサー類を操作する。だが、急に反応が悪くなった画面はそのままだ。

まるで、彼と共に初めて戦ったあの日のように。

（カノン君にいてもらうべき、だったかな）

アリアは帰途についているであろうよく知った顔をした、まだよく知らない彼を思う。

アリアの大好きな人によく似た彼は、触れれば触れるほど、兄とは違うのだということを感じ知らされていた。それがショックなわけではない、といえば嘘になる。だが、それを彼にぶつけることも、相談をすることも筋違いにも程があることを彼女は知っていた。

アリアは操作の手を止め、リヴァイスを下降させる。

センサーから何かが分かったわけではない。

彼女なりに何かを感じて、調査の手を下に向けただけだった。

一見、何もしてない、変わらないようにも見えらるだろう彼女の様子は、先ほどと何も変わらないように見える。しかし、彼女の五感ではないもうひとつの感覚は、体よりも遠いところを感じ取っていた。

目を瞑って、その感覚に集中させる。

緊張をしすぎていると上手くない。

思考を、なるべく楽な方向へと転嫁させていく。

（カノンだったら、彼のことをなんて思うかしらね）

大好きな人である兄のことを考え、思わず口元が緩むのを感じる。誰も咎める人間などはいない。この時間だけ、アリアは自分の世界

に入り込む。

兄のカノンは、妹から見ても相当ひねくれ者だったと思う。しかし、その心根は誰よりも優しく、困っている人間がいるなら放っておけない人間だった。

たとえ施設にいらなくても、自分にできることがあるならば喜んで命がけの“ヴァリス”のパイロットに志願していただろう。

「あんたも災難だな。よりもよってこんな世界に來ちまってさ。ま、協力してくれるんならいいけど、あんまり前に出るとかはよしてくれよ。こっちはこっちのやり方があるんだからさ。何か面倒があれば協力はするけど、無理をして怪我して帰ってくるのは勘弁だぜ」

もし、兄が彼と接触したら、と考える容易に言葉が出てきて思わず苦笑する。

言葉は乱暴だが、その実は相手への気遣いで一杯なのだ。きっと彼ならそれを理解してくれるだろう、とアリアは思う。

「ゼルカノン、か」

自分は構わなかったが、本当は上のゼルは読まないほうがいいのだろう。

異世界からやってきた、人型の兵器を操る戦士。

だがその実態はアリアと変わらない年の男の子だ。

自分だったら、不安で仕方がないだろう。だが、彼はそんな素振りは見せなかった。

（あの機体、はフェニキアスと言ってたわね）

目を開けて、体をシートに横たえる。
感覚はあくまでそのままに、だ。

人間のような姿をした、見知らぬ力を持つ機体。
見ている分には、とても綺麗だ。

しかしアリアは、その動きにまるで命が宿っているように見えてぎよっとする瞬間がある。

まるで大きな人形が人間と同じような存在感を持っているように。
あれは一体どういった目的で作られたのだろうか。
何で、子供のような年の彼が動かしているのだろうか。

思考に集中しすぎた、と感じアリアは首を振る。
だが、不意に視線を外に向けた途端、アリアは身を乗り出した。

村からは遠い遠い場所。

彼に話した、湖の辺りだろうか。

赤い光が、断続的に発生していた。

そして、遅れてかすかな音が流れてくる。

まるで雷を思わせる。村までは聞えないだろうが、不気味な光景だった。

「ノアさん？」

出撃することを知っていたノアのことを思い出す。センサー類が利かず、通信状態も悪いため、確認はできない。違和感の原因はあれなのだろうか？

いや、そもそも自分は『ゲート』の発生源を探っていた。この近くにあることは薄々感じ取っているが、ここに『ゲート』の発生例はない。そんなものが発生するならば、遠くのほうで小さく見える村のように人里があるはずがないのだ。

いや、『ゲート』を避けて人里が存在するというべきか。

アリアはとにかく、あれを確認しようと、リヴァイスの移動の準備をする。

だが、そこから先に進むことができない。

操縦桿を倒すだけだ。それだけで、リヴァイスは風よりも速くあそこまで行くことができる。

しかし動かない。

まるで、気持ちの悪いものが体にまとわりついているかのように。

（何で？）

アリアは不思議に思いながらも、体を狭い場所で伸ばし、硬直している体を何とか動かそうとする。

しかし、事態は変わることはない。

（あそこに行っただけはいけないとでも？）

自らの体の無言の反抗をバカらしく思いつつも、何度も深呼吸をする。

しかし、全身に走る緊張は解けることはなかった。

バカバカしく思いつつも、胸の底にあるのは、覚えのある恐怖。

あの日も、部屋から走っていきこうしたら、なかなか足が動かなくて、迎えることができなかった。

だから、レインはアリアたちの部屋に来て、

ーーーーー本当に、すまない、

どうして思い出したくないことを、思い出すのだろう。

アリアは頭を振ってそれを何とか追い出す。

操縦桿を握る手に、もう片方をそえ、再び息を吸う。

あれから、すこしは大人になった。

どうしてもできないことでも、頑張ってできるようになった。

できない、したくないが通る世界に、今のアリアはいることはできないのだ。

それを乗り越えることで、大好きな人に会えるのならば。

吸った息を、吐く。

それをする前に、操縦室の中にけたたましいアラートが鳴り響いた。リヴァイスのカメラを、頭上へと向ける。

その瞬間、派手な爆発音と爆煙が遙か虚空に広がっていた。

『――アリア!! 大丈夫か!?!』

ノイズまじりのなか、よく通る声が通信機に飛び込んてくる。

「レイン、さん?」

あまりにも覚えのある声に、アリアは緊張が溶けるような感覚がした。

センサーはまだ不明瞭で、彼の位置までは分からない。

『気をつけろ、まだ上からくるぞ!』

ハッとして、リヴァイスの武装を起動する。

滑らかに操縦桿を動かし、そのまま浮上をする。

カメラに映る、空は爆煙がやみつつあった。

しかし、澄んでいるはずのその青に、醜い歪みが微かに見える。

「『ゲート』?」

『説明は後だ、今そっちに向かっている!』

そういわれ、上昇しながら周囲の景色を見ると、光が反射している物体が段々と近付いてくるのが見えた。

「何でこんなところに、」

『落ち着け、あれは今あちこちに出ているらしい。だが奴らを何匹か吐き出すとすぐに消える！原因は知らん！！』

レインの説明は殺気立っていたが、それでなんとかアリアは冷静になることができる。

アリアは、今、生きている。

それは大好きな人のおかげであり、その人がいなければすぐに死んでしまっていたか、自ら終わることを選んでいただろう。

アリアは生きなくてはならない。

大好きな人に会う。それだけのために。

深呼吸をし、体呼び覚ますと、アリアは上空にある醜い歪みを見据える。

このどうしようもなくくだらない世界を生きるために。

『蝕む夢（4）』

フラッド・ルブルーは、第1基地での自分の仕事部屋に居た。もうすぐ作戦室から迎えがくるだろうか。

別の基地にいるレインが出撃した、という報告は入っていたが、まだ事態の全貌は掴みきれていない。

窓から、慌しく動く作業員たちを見下ろす彼の表情には、何もこめられていない。

残っているプロシオンの数は心もとない。

しかし、以前のリヴァイスの行方不明とは違い、王国の“ヴァリス”は全て揃って出撃をし、居場所もほぼ掴んでいる。しかし、ここ数日の騒ぎがおかしな緊張を齎しているのだ。

責任者として、フラッドは何も言う必要はない。フラッド自身にも、全てが分かるわけではないのだから。流言飛語をとめるくらいはするが、あえてこの騒ぎに対し余計な言葉を添えるようなこともしなかった。

（全員、ご苦労なことだ）

今は離れた場所にいる、“ヴァリス”の操縦者たちを思う。

レインは他の基地での調査。そして今は事態の収容のために動いている。

ノアは出撃をしたが、上手く連絡はとれていない。だが、レヴァルダの反応は消えていない。

アリアベル・デューティは同じく出撃をし、レインが合流しようとしているようだ。レインがいるならば、特に問題もないだろう。敵国の人間ではあるが、見張ることができ、保護者のようなレインの

存在があるならば、彼女に対しては特に問題は感じていない。
帝国にいる残る1人は、何やら忙しいようでここ数日連絡はないが
……。

フラッドは仕事机の上に置いてある一冊の本を手にとる。

本、というよりも薄く大判な古びたそれは、幼い子供に与えるような絵本だった。

今は絶版となっていて、こうした思い出の品として存在しているような一品だ。

元々孤児であったフラッドが持つ、数少ない家族とやらの思い出の品、ということになるだろうか。

何度も何度も読み返し、同じくらしい頻度で読んでやった本なので、痛みは激しい。だが、ページの汚れはほぼ存在せず、物持ちのいいフラッドが特に丁重に扱っていた物だ。補修も所々施してある。これが絶版となった理由は、公には言われていない。しかし、たった1冊の絵本に構う暇など、当時の世間にはありなどしなかった。

彼は、そのまま戦っているらしい。

リヴァイスからは離れているようだ。

野放しにしているのか、という声も少なからず出てくるかもしれない。

そのときは、そのときだ。

この世界に何の縁も権力も無い子供。

四六時中あの人形に乗るわけでもない。

そこまでの我慢を、自分は出来る自信がある。

「優先順位が違うだけだ」

フラッドは、誰にでも言うでなしに呟いた。
咎める者も、反応を返す者もない。
ただ、自分1人だけ。

「それが低い方があるとしたら、お前は どうする？」

だが、その言葉はここにはいない人間に向けられたものだった。

ノアが目を覚ますと、視界が赤かった。
光に、照らされているのだろうか。

瞼をこじ開けると、赤い光が操縦室を飲み込んでいた。
内部のものではない。目の前の画面から溢れているのだ。寝惚けた
頭でそれを感じる。

光を背にした大きな影、がある。
いや、それ自体が光を発している。
そう気付いた瞬間、それは一瞬でそれをしまうように光を引っ込め
ると、光にあてられた目でようやく見覚えのある機体であることを
認識する。

「・・・あれ？」

《大丈夫ですか？》

クリアな音声が、通信機から飛び込んできた。
落ち着いた、静かな声。どこか他人事のようなものを感じるが、今
のノアにははっきりとしたものは分からなかった。

《奴らが居てそれを蹴散らしていたら貴方が居たから、驚きました

よ」

目の前の赤い機体は、一度あたりを見回す動作をしながらその音声を送ってくる。

まるで生きている人間のように、だ。

「・・・あ、ああ・・・あれ？俺、どうしてたの？」

《機体が仰向けに倒れたまま、動きませんでしたよ。てっきりやられた後だったのかと思ったんですが、何か機体に異常でも？》

「いや・・・」

一瞬、あの黒い影が目の前をよぎる。

それを機に、記憶が膨れ上がってくるが、まだ言葉にはできない。とにかく、体と機体の調子を確認する。

「なあ、ここに、怪物以外はいなかったか？」

《以外？いいえ》

機体の向こうにいる彼は、首を振ったのか目の前の機体も同じように動作した。

その存在自体が、まるで1人の人間、生命体のようにも見える。

あまり、考えないことにした。

《よくは分からないんですが、『ゲート』があちこちに出たみたいなんです》

ノアが調子を確認する間、彼はノアが眠っていた間のことを報告する。

《すぐに消えたみたいなんです、場所などがおかしいみたいで。今は落ち着いたみたいですけど、その騒ぎの最中にノアさんを見つけたんです》

「そうか・・・」

やはり、異常は起こったのだ。

あの黒い影は、無関係なのだろうか。

とりあえず、ルブルー大佐に報告をしなくてはならないだろう。とにかく誰かに話して今の状態を把握しきりたかった。

機体は衝撃を受けたものの、落下以外のものはなかったらしい。ひねるように落ちたわけでもなく、衝撃もきちんと受け流していたらしく、動作に問題はないようだ。冷静になれば、ゆっくりと浮上をすることもできた。

「とりあえず、帰ればいいんだな？ 報告したいこともある」
《そうでしょうか。調査は他の人がしてくれるみたいですし》

赤い機体は、こちらに背を向け、大きく上昇をする。
ブースターをふかすこともなく、宙を飛ぶように。

（人間は、空を飛ばない……）
当たり前のことだ。しかし、人間そのものを作ることがあの機体のコンセプトでもあるまい。
きつと何かしらの意味がある。
それを、彼は聞いたら教えてくれるだろうか。

ノアは急に思考が、感じるものが変わったということに気付いた。
た。

目の前に下りたった機体。
以前平気で修理をしていたその機械が、急におかしな存在のように思えてくる。

眠る間に、見た夢のせいだろうか。
それはノアの胸に嫌なものを残し続けている。

森の上空に浮かんだレヴァルダを、赤い光が照らす。
それは人工的なものではなく、遙か昔からこの世界を照らし続けたものだ。

（夕日、か）

いつの間にか赤く染まっていた空を照らす、赤くなった太陽を眩し
そうに眺めると、ノアは座席に体を預ける。

数少ない、父親との思い出のなかで、よく一緒に眺めていた。
それだけでよかった。言葉を交わさなくても。よく喋る性分なのは
昔からだが、父親とはなかなかそういうわけにはいかなかった・・・。

（何考えているんだろう）

実家にいたときでもこういうことはなかったのに、やけに父親のこ
とを思い出す。

虫の知らせだろうか？ 一体誰の？

そういえば実家にはなかなか帰れていない……。

《どうかしたんですか？》

「いや、親父のことをちょっとな」

反射的に答えてしまうと、向こう側の彼はへえ、と短く返した。
それ以上のものはないのだろう。まだそれほど親しくもない。

気分が酷く荒んでいるようだ。

彼に対し、どう会話をしているのかが分からなくなっている。
できるだけ、言葉を選びながらノアは何とか会話をつなげようとする。

「昔から飽きずにこういうのを見て、」

言葉を続けながら、ノアはおもむろにカメラを操作し、自分の居た森を振り返る。

倒れる木々に、あちこちに焦げた後。火事にならなかったのがせめてもの救いだろうか。

しかし、所々に点在している気味の悪い体液のあと、そして巨大な複数の怪物が景観を汚しきっていた。

「、あれは？」

《え？ああ、ここに居た怪物ですよ。あれを全部倒しきった後に貴方を見つけたんです》

「1人ですか？」

《ええ》

事もなさに告げる彼は、そのあと振り返ることもせず速度を上げ、そこから離れていく。

彼は彼で何かがあったのかもしれない。

残されたノアは、その光景を何とか嚙下するように理解する。

“ヴァリス”は怪物を倒すための兵器である。日々進歩を重ね、その戦闘力は確実に上昇をしている。

あの怪物たちも、倒せないわけではない。しかし、それは複数でかかる場合だ。

危険な対象の場合は最低2機で固まってかかる必要がある。

機体も、中にいる操縦者も失うわけにはないかない。

常に万全を期する必要がある。

戦闘を見ていたわけではない。

しかし、彼はあの怪物を1人で倒したのだ。

10メートルはあるであろう、巨大な虫を数匹。

少なくともノアは1機でかかる自信はない。

実力的にも機体の能力的にもだ。

レインでも1人でかかるようなことはない。冷静に、近くの基地に応援を要請するなどの対応策をとるだろう。それだけ、1人でかかるということは無茶な話なのだ。

少し、冷静になる必要はあるのかもしれない。

ノアは呼吸を整えると、その彼の後を追う。

ノアは、この世界のカノンは知らない。

彼にとってカノンは、彼1人だ。

しかし、それでも彼が異邦人であることに変わりはない。

レインにも、アリアにも考えが及ばない部分に、ノアは触れることができる。

はつきりと言葉にはできない。

しかし、彼は何故か、自らが次取るべき行動を必死で計算をしていた。

夢の残滓のようなものを感じながら。

ごめんなあ……

第23話『変わらぬ青の下で(1)』

小さい頃は、空をよく見ていた気がする。

動くお腹が減るから、なるべく動かないように時間を過ごすためにはそれしかなかった。

そのうち眠くなってくるから、目を瞑る。そうすると、目に焼きついた空の青に自分が溶けてしまうような気がした。

ここではない、どこかへ行けるような、そんなことを願っていたのかもしれない。

それがどこなのかは、考えもしなかった。

「レインさん、」

取りとめも無いことを考えながら、格納庫の外でぼんやりしていると、アリアが向こうから駆け寄ってくるのが見えた。いつもいつも、その姿に軍服は似合わないと思う。

ちょっとした騒ぎがあつてから2日経ったその日、第一基地には再び3機のヴァリスが揃っていた。

レヴァルダは調整中ではあるが、なんとか五体満足で出撃に備えている。

レインはこの基地に帰ってきて、報告に追われ、ようやく一息ついていたところだった。

「どうした？」

思考を戻しながら、近くに來た彼女を迎える。その顔はどこか浮かないものがあつた。

「ええ、その、色々お話があつて、」

「ゆっくりでいい。もう大方の用事は終わったからな」

とりあえず、この基地に帰ってから報告や記録などが山積みとなっていて、今は最後の調整したヴァリス・ローランのチェックが終わった直後であった。後は出撃でもない限り、特に問題はない。

「そう、ですか。あの、まず私帰ることになったんです」

「帰る？ ああ、」

浮かない顔の合点がいった。

帰る、というのは王国のどこでもない。彼女の所属である帝国だ。あの人型から騒動が続いてしまいうやむやになっていたが、たった1機で帝国を守るあいっただけでは問題になってきたのだろう。それに、アリアは身体の方のチェックもある。報告がてら、そういう方面で帰らなければならないのだろう。

「そうか。まあこっちは俺とノアがいるし、あいつも大変だろうか
らほどほどに頑張ってくれ」

「はい、分かりました」

アリアの顔はまだ晴れない。それほど分らず屋ではないことをレインは“カノン”の次に知っている。

「どうした？ 何か感じているのか？」

アリアの髪を撫でてやりながら、レインは視線を頭一つ低い彼女に合わせる。

怖がっている、というよりも何か不安を抱えているような印象だった。

「カノン君のことと、あの影のことなんです」

「影・・・って、あいつのことか」

レインが直接対応したこともある、あの黒い機体。正式な名称はまだ決まっていなかったが、確かに影、という表現はあっているのかもしれない。アリアが彼のことを“カノン”と呼んだことに驚きつ

つもそれを隠し、レインは続ける。

「何か、おかしいことでもあったのか？」

「ええ・・・まだ確かではないので、レインさんに個人的に相談をしたいんです」

自分はここからしばらく離れるから、とARIAは続け、とりあえず格納庫から離れ、人がいない方に歩きながら話をする。

「あの騒ぎ、があった日、ノアさんは黒い影にあっていたんですよ？」

「ああ、そうだ。レヴァルダの記録にも残っている」

あの日、ノアはしばらく連絡がとれなかった。

そして彼が森で停止しているレヴァルダを発見し、連れ戻したものの記憶が飛んでいた。

本人曰く、眠っていた、と。そういうしかなかったらしい。

だが本人の僅かな記憶からの証言と、レヴァルダの記録によりどういったことになったのかは判明している。

あの、黒い影に襲われた、と。

「何度か攻撃をされたことは確からしいな。その最中に記憶を失った、と」

レヴァルダの映像記録には、確かに攻撃を仕掛ける黒い影の姿があった。ローランの記録とも一致をしていることが証明されている。そしてそのあとしばらくノイズが走り、それがやんだあとは姿を消していた。

「一応、敵性のあるものとして扱うことになったんですね？」

「本当に一応、な。ただし攻撃されない限りは手を出すな、という通達がある」

レインはフラッドに言われたとおりのことを述べ、胸のなかのもののようなものを何とか飲み込んだ。

訳の分からないことばかりだ。

いつから、というのはレインが1番よく知っているかもしれない。

「そういえば、ノアはどうした？顔を见ないんだが」

レインはこの2日忙しく、まともに会話を交わしていない。だが、その顔は実に浮かないものがあつた、と感じている。

「しばらく休暇をとるそうで、帰ってしまっているんです。ご実家は王都にあるそうなので」

「休暇？ああ、そうだったのか」

レインには実家はない。なので、休暇をとって帰るということはいまいちピンとこないものがあつた。

ノアの生家のことは知っていた。万が一の場合は駆けつけることができるので特に問題もないだろう。

「何か調子が悪そうだったし、その方がいいかもな。・・・今はあいつもいることだし、な」

今ここにはいない存在をレインは素直に表現することができない。アリアの目の前で無様なことだが、こればかりは仕方がない。

「カノン君、遅いですね」

「ん？ああ、そう、なのか？」

「あ、レインさんは知らないんですか？カノン君、朝方に見回りの

方に行ってからまだ帰ってこないんです。定期通信はあるんですけど、こっちに帰ってくることはなくて……」

「1人で、か？」

ぬかっていた。とりあえず誰かと一緒に行く、ということになっていたはずだが、自分とエリアがここにいる、すぐそこにレヴアルダもあるとしたら、あの“人型”単機でどこかへ行っているということになる。独断で出て行ったということにはならないのだろうか、いくらなんでも無防備すぎた。

「ええ、ちゃんとルブルー大佐の許可も取って……。私も行くとは言ったんですけど、大佐には止められてしましまして、ここで簡単な身体検査を受けていたんです。レインさんは知っていると思っただんですが……」

「いや……俺は知らない」

あの日から、彼とは直接話をしていない。

だまし討ちのような形でエリアと接触させた、というのは不味かったのだろうが、とりあえずは大丈夫そうなことはエリアの様子で分かる。通信を送ることもできたが、個人的に何を話せばいいかは分からない。

レインのなかで、彼はまだ得たいの知れない存在である、という認識があるらしい。

「私も大佐が許可をしているならそれで、と思いましたが、本人もそんな、」

「いや、いいんだエリア。俺もよく分かってる。……驚いただけさ」

目の前の少女は、驚くほどあのカノンと兄を区別できている。だが姿が似ているせいなのか、どうも彼を信用しすぎているという印象

があった。容易に受け入れすぎている、とでもいうのか。

「・・・カノン君で、不思議なんですよね」

アリアは抜けるように青い空を見上げながら、独り言のように呟いた。

「お兄ちゃんと似ているんです。けれど、全然性格が違うから」
それについては、レインも同意した。

とにかくひねくれ者であったが、心根はそうでもなかったことは、短い付き合いながらもよく分かっている。彼の方は、というとにかく真面目であるということしか言えない。そこまで深い付き合いでもないせいかもしれないが、そんなひねた印象はない。

「いつか、カノン君の居た場所のことも知りたいです。帰るまでに話せるようになっていたらいいのに」

「本人が話してくれるか？」

「きっとしてくれますよ。・・・今は思い出せないだけで」

蒼色を見上げるアリアの横顔を見ながら、レインはすっかり変わってしまった状況のことを考える。

得体の知れない化け物の出現、軍部の動き、“人型”に黒い影。すべてが、彼を中心として起こっているようにも思えてしまう。

（いや、きつとそうなんだろう）

彼が来てから、この騒動は起こり始めた。

帝国にいる“奴”に会って話をしたい。

この状況で、この話をできるのは、研究畑にしたノアでも目の前の少女でもなく、

普段ならあまり会いたくはないであろうその人間だった。ここ数日は帝国で動きがあるらしく、

連絡は取れない。また、騒動が起きるのか、とレインは肩を落とす。

彼の居た世界とは、平和だったのだろうか。

レインがふと、そう思った瞬間、その考えは展開されることなく、少女の声で止められた。

「帰ってきた！」

見ると、虚空から見覚えのある赤い機体が舞い降りてくるところだった。

重量などないように緩やかに降りてくる機体。

太陽の光が装甲に反射をし、その存在を主張する。

確かにそこにある、存在。

変わらないはずのその機体の顔は、逆光のせいか影を落としているようにも見えた。

『変わらぬ青の下で（2）』

アリアベル・デューティが帝国に帰ったのはカノンが帰還してすぐのことだった。

「色々迷惑かけて、ごめんね。でもありがとう」

彼女はいくらか吹っ切れた様子で、カノンの手を握ってから帰っていった。

それから何時間経っても、カノンの手にはその柔らかで頼りない感触が残されている。

ノア・ゲイルシュタインとはあれから話さず、彼は2日前にここを去っていった。

何か考えているようであったが、学者の頭はよく分からない。

何故だか彼がこちらを注視しているときがあったが、すぐに視線をそらされた。

自分も、彼の顔を見ると落ち着かないものがあったが、話したところで何の利もない。

レイン・ベルモット、は知らない。あの会議以来彼と会話をするとはなかった。

その必要も、ないと感じている。

フラッド・ルブルー大佐は何も言うことはない。

ここ数日起こる、カノンも預かり知らない騒ぎのことについても何も言わない。

ただ、時折笑顔で話しかけてくるばかりだ。

誰と会っても、カノンが感じている何かが解決することはなかった。

静寂が、痛い。

カノンは目を開けつつ、自分が眠っていたことに気付いた。薄暗い格納庫の光景が目に入る。

シートに身を預け、また目を瞑る。

目を開けたら何もかも元に戻ってやしないだろうか、という淡い期待を込めるが、一向にそんなことはなかった。

今いるフェニキアスのコクピットだけが、カノンにとって唯一の変わらないものだった。

今は別に用事はなく部屋で寝ていることもできた。

しかし、最近はどうも落ち着かず、誰かに伝えたいうでここにすることが多くなった。

別にそれで咎める人間もない。不気味なほどに、この人間はカノンを信じているようであった。

カノンは空中モニターを呼び出し、記録したデータを出す。

それは報告用に用意されていた文書作成機能で、パスワードをかければ誰にも見られることはないものだった。そこに、とりとめもない日記のようなものを書いて保存を繰り返している。

食べたものや、何かあったか。そして、思い出したこと。

目の前にまとめていくことで、少しは頭のなかも整理することができた。

それにいつか戻ったときに、あの人たちに話せることがあったら、できるだけまとめておきたい。

（あの人たち、か）

カノンは目を閉じたまま、元居た場所のことを思い出す。

誰にも、話せることはない。

話したところで、何もない。

その空虚さのせいだろうか。ここ数日のカノンは、胸になにか気持ちの悪いものがたまってしまうていた。思い出してく、ということはいいいことであるはずなのに。

突如現れる、黒い機体。

それはまだ軍全体には発表されていないようだが、妙な緊張がこの基地を包み込んでいるのは分かっていた。妙な居心地の悪さがあるが、どうということはない。

ルブルー大佐にはそれとなく聞かれたが、あんなものは見たことがない。

カノンと同じ、あくまでもイレギュラーな存在なのだろう。

イレギュラー同士が必ず関わりがあるということはない。

それもあの大佐はわかっている、はずだった。

ここ数日あの酷い頭痛はない。

ないことにこしたことはないが、あの酷い痛みがまた来るかもしれない、という杞憂は気分が悪い。

一応医者には頭の中身も見てもらったが、特に何もなかった。

爆弾を抱えているような状態は精神的にくるものがあつた。

まとまらない考えに辟易し、そろそろ出るか、と硬くなった身体を動かしたとき物音が聞こえた。

何かが倒れたような音だ。外の音を拾ったらしい。

画面の端を見ると、僅かに空いたシャッターの下に、人影のようなものが見えていた。

「すまない、足元を見ていなかったんだ」

外へ出たカノンの耳に、よく通る声が聞えてきた。

ハッチから足場へ出ると、白い服を着た老年の男と目が合った。60代ほどだろうか。綺麗な白髪と、立派な髭を蓄えているが、その目はここから見ても鋭いものがあった。

「この、者なんだが、迷ってしまってたな。貴方は基地の人間なんだろうか？」

返事をしようと思ったが、上からずっと見下ろしているのは気分が落ち着かない。

階段を下りるのが煩わしく、カノンはフェニキアスの胸ほどの高さから飛び降りた。

ちょっとした衝撃とともに着地をすると、男が目を見開いた。しまった、と思ったがこれぐらいはどうということもない。

知らぬ存ぜずで通すことにした。

「どこに、御用なんですか？」

「ああ、ここの大佐と話がしたいんだが、建物が似たようなものが多くてな。そういう人間が集まる建物はどこなんだろうか」

目の前にした男は、カノンよりも背が高い。着ているものは、ローブのようなものだろうか。上等な布で作られた、簡素な礼服のようなきちんとしたものだった。

その服装で、男がそういった地位についているということは分かった。学者か何か、なのだろうか。
だとしたらこのような場所に居てもおかしくはないが。

「それなら存じておりますが・・・今大佐は会議中だと思いますよ」
朝に聞いていたルブルー大佐の予定を思い出しながら言うと、老人は困ったように息をついた。

「そうか・・・。だが、とりあえず大佐殿のところへ連れて行ってくれないだろうか。そこまで行けたら話は通してあるから分かるだろう」

「はあ・・・」

今自分はこの国の軍服を着ている。何も言わなければ、自分が異分子であるとは分からないだろう。

「分かりました。少し歩きますが、御案内します」

そう言うと、男は鋭い目を緩ませて笑って見せた。

「今日はいい空をしているなあ」

「そうですね」

いつもはまばらにいる作業員もみあたらない広い基地を歩くさなか、老人は妙に嬉しそうに辺りを見渡している。学者なら現場が珍しいのだろうか？時折話をふられるが、そうそう気のきいた返事などできない。そういうことは仲間が担当していたせいか、未だにこういった会話には慣れることができない。

何せ必要なかったのだから。

「こういうときに限って“奴ら”は現れるものだが、ここ最近はどうでもないか？」

「・・・いえ、自分は来たばかりなのでよくは分かりません」

“ヴァリス”の操縦者は人数が限られている。下手に演じるとややこしくなるかもしれない。

とりあえず、基地に新しく配備された軍人ということにする。

「そうか？それほどの騒ぎになるほどではない、ということか」

「そうかもしれませんが・・・隠し通せるものではありませんから」

「それもそうだろうな。そのような事態は隠し通せるものでもない。どうしても動揺は民に伝わるものだ」

老人の声は隣にいても張りがあって聞き取りやすい。話すこと自体に慣れているようだ。

学者なら学会などで慣れているのだろうか？

「今日は“ヴァリス”も揃っているようだ。こういうときは安心できるな」

「それはどうでしょうね」

「何故だ？」

老人の世間話について反応してしまったことを後悔したが、もう遅い。ルブルー大佐のいる建物は間近にせまっているなか、老人の鋭い瞳に捕まってしまった。

「何故君はそう思う？」

老人の青い目は、海を思わせる。

何が潜んでいるのかが分からない。しかし、今は光が差し込んでいるかのような青色をしていた。

その目は、カノンがはぐらかすなどを許すことはないだろう。

「・・・あくまで、個人的に、です」

「それでもいい。何故そう思う？」

「え、と。最近ここに來たので、まだ素人同然の意見ですが」

スクランブル、というものをカノンは何度か経験したことがある。他国からの侵入を受けた際、待機していた軍人が次々と戦闘機に乗って出撃するのを何度か見た。

それを見て幼心に不安を持っていた。

待機している兵器を見ると、今でも落ち着かなくなる。

これは使われていないのではなく、待っているだけなのだ。

いつ起こるとも分からない緊急事態のために。

実際に起こる嫌なことよりも、カノンはそれに備えるという光景が恐ろしく思う。

そういったことを、勿論元の世界については隠しながら話してみた。

自分の考えを述べる、ということは今でも慣れない感じがする。緊急時にはそうでもないが、日常においては本当にむずがゆい。

「そうか、現場にいる軍人というのはそう考えるものなのか？」

カノンの拙い話を最後まで聞いてくれた老人は、予想以上に真剣なまなざしをカノンに向けていた。

「いえ、あくまで個人的に、です。兵器が使われないことに越したことはありません」

適当に言った、と思う考えが軍全体の考えに捉えられては敵わないとカノンは慌てて否定する。

老人はその様子をみてふっと笑ってみせる。

「いや、いいんだ。軍人の1人が何を考えているのか、それが知りたかった。何人もいるんだ。それぞれに考えがあるのは当然だ。驚かせてすまなかった」

「はあ・・・」

目の前の老人の考えがあまり読めないカノンは、建物の方へと急ぐ。

さっさと終わらせてしまいたい。

そのカノンの考えが分かったかどうかは分からないが、老人は黙って後についてきた。

子供じみた態度で失礼に思われるかもしれない。

だが、この事情はカノンには関係がない、はずである。

だとしたら開き直るしかない。

「着きましたよ。ここにおられる筈です」

どうにか目的の場所まで着いたものの、正直カノンは建物まで案内していいものか決めかねていた。

老人を連れ込むのは問題ないだろうが、部外者であるカノンがそこまで入り込んでいいものか。

しかし老人をここにほったらかしておくのも体面が悪い。

「確か会議中の筈だが・・・」

「僕、いえ私はまだここに入ることにはできないんです。なので、誰か人を呼んできますね」

1階部分ならば入っても問題はないだろう。

探せば1人くらいはいるはずである。だが老人はここでいい、と首を振る。

「場所は分かっている。ここまでで十分だ、ありがとう」

「はあ・・・」

結局この人はなんだったんだろう。

とりあえず老人と別れ、元の格納庫へと戻ることにする。

だが、老人の鋭い目が再び自分をとらえるのを感じた。

構わず行けばよかった。老人自身もそう言っているのだから。

しかし、この空気は何だろうか。

「君はどこ出身だ？」

それは世間話のつもりなのかもしれない。カノンには決して答えられない類の。

「、どういふつもりですか？」

「君は、どこから来た？北の方か？それとも西か？」

単純に、世間話のつもりで聞いているのだろうか。

その割りには、その視線はカノンを逃さんばかりに射抜いている。

「・・・定住はしていません。商人の子なんです。両親は病気で死んでいます」

咄嗟にそんなことが言えたのは、アリアと話ができていたせいかもしれない。

実際に国中を回る商人の存在は聞いていた。

「そうか」

老人はその答えに満足をしたのか、鋭い瞳が緩む。

しかし、視線はカノンをとらえたままだ。

「いや、済まない。少し気になってな」

「は？」

「君の瞳の色が珍しくて、な」

「色が、ですか？」

「そんな鮮やかな紫の瞳を、私は見たことがない」

そんなことを言われた試しがない。

大体色素は薄い、アリアは菫色という紫に近い目の色をしていた。もしかしたら、帝国の人間はこういった瞳の色をしていることがあるのだろうか。

だとしたら王国の人間として振舞ったカノンの目論見は検討はズレということになる。

「強い眼差しだ。まるで、こことは違うものを見てきたかのようだ」
老人は笑っている。

まるで、全てを見透かしているかのように。

「あの、」

「、ヴィスタリア様、ここにおられたのですか！？」

妙な空気を打ち破ったのは、慌てふためく声だった。

見ると、建物の奥から、カノンと同じ軍服を着た軍人が慌てて出てくるところであった。

「ああ、すまないな。散歩に出ていたら丁度彼に出会ってな。案内をしてもらって戻ってきた」

「心臓が止まるかと思いましたよ！ああ・・・えっと」

「すみません、ここで失礼します」

どうしたらいいか困惑する若い軍人に対し、カノンはさっと切り上げる。

老人だけが笑っている状態のなか、若い軍人は役目を引き継いでくれた。

結局、この老人はなんだったんだろうか。

奥底に湧き上がってきた苛立ちとともに、このことを忘れることに勤めることにする。

そのはずであった。

「本当に有難う。迷惑をかけたな」

「いえ、その、」

「今度は、貴方が生まれた国のことを教えていただきたい」

「は、」

カノンにだけ聞える声でその言葉を残しつつ、軍人と共に老人は建物の中へと消えていった。

第24話『灰色の狭間で』

その角張った外見の倉庫は、帝国領の端にひっそりと存在していた。

今日も止まない雪のなか、息を潜めるように立つそれは、長らく使われていなかったものだった。

しかしここ最近は明かりがついていると近隣の村からの報告があった。

勿論近付いて確認する物好きはいない。

何かよからぬ輩でも、軍が使っていてもろくな結果にならないだろうからだ。

（そして、私みたいなのがやらされるのよねえ）

彼女は人の気配がない薄暗い廊下を1人進む。

操縦者しか着用しないスーツを脱ぎ、今は暗闇に少しでも溶け込めるようなスーツを着込んでいた。髪はとりあえず結い上げ、動きを阻害しないようにしてある。

暖房器具などは入っていないらしい、冷たい空気の中を進む。外の警備はそこそであったが、人が足りていないのか中は杜撰なものだ。

さきほどから足音一つないし、監視カメラは起動すらしていない。ここまで来れる人間などいない、とくくっているのだろうか。

ヴァリスは少し離れた場所へ待機させてある。

ばれないことに越したことはないが、あれは彼女の身元を保証する1番の物である。

探索の最中ここへ来た、などいくらでも言い訳はつくのだ。

使われていないはずの建物のなかは、所々人の痕跡がある。
物音はしない。

揃って出かけているのだろうか？

だが表の警備は固いが、どこか堂々とした趣があった。

ここの調査を命じたのは、直属の上司殿だった。

彼女ならば、そこまで安全にいける足もあるし、身元も固い。
見つかったとしても命を落とすまではない。

ただ、そうなるとその上司殿の立場が怪しくなるのは明白だ。
見つからないにこしたことはない。

（この様子だと、別に大丈夫そうだけどね）

手の中に収まるほどの銃を弄びながら、彼女は冷たい廊下を進む。

ここ最近の帝国領は比較的平和なものだ。

いつもの通り怪物が出て、たまに誰かが犠牲になって、ヴァリスが
奴らをやっつける。

この世界での当たり前のことが、変わらず行われている。

対して王国の方はなにやら忙しいようだが、彼女にはそれをわざ
わざ調べる義理はなかった。

どうせろくでもないことなのは明白だ。

彼女は静寂のなかしばらく歩き続けていたが、不意に微かな音を
聞きつけ、近くの部屋へと飛び込んだ。

倉庫らしいその部屋で息を潜めていると、音は段々と近付き、彼女

が歩いていた廊下へ入ってくるのが聞えた。ぼそぼそと陰気な声が聞えてくる。

「では近く……てんを……」
「そのように……」

何か後ろめたいのか、お互いに囁きあっているような声で2人組らしい男は、彼女のいる場所から遠ざかっていく。陰気な場所になると陰気になるのだろうか。

充分遠ざかったことを確認し、彼女は慎重に動き出す。そして、彼らが出てきた方向へまた歩き出した。

そういえば、最近悪い夢が流行っているらしい。会話の相手もない彼女は、ふと基地で聞いた世間話を思い出す。

とはいっても、子供や一部の人間の間だけのようだが。内容は知らない。

まだ言葉のつたない子供が見ることが多く、夜中に飛び起きて泣きながら両親縋るのだという。

だがそれほど深刻ではなく、昼間に目一杯遊ばせればそれこそ夢も見ないほどに眠る。

やっと1人で眠れるようになったのに、また両親に引っ付いて眠る子供が多くなり、両親は心配はしているが、まんざらでもないようだとか。

大人の場合は睡眠薬を飲めば問題はないらしい。よくある集団ヒステリーのようなものなのだろう。

子供の恐怖が伝播して、勝手に恐怖を作っているだけなのだ。

専門家でもない彼女はそう考えている。
分らないことに頭を使っても銭にもならない。

相手のいない世間話のようなことを頭の中で繰り広げながら、彼女は奥へと進む。

廊下内の表記から、ここから格納庫部分へ直接進めるらしい。
何か物騒なものでも抱え込んでいるのだろうか。

兵器でなくとも、怪しげな薬物や隠し財産など、こんな辛気臭いところに溜め込んでおくものは
山ほどある。

（それにしても警備が薄い…）

特に隠しカメラなども設置はしていないようだ。
一応管理室には入ったが、そのどれもが起動していないことは確認している。

隠したいが、見つかってもいいもの、というとよく分からなかった。
ただ単にしまいこんでいるだけなのだろうか？

格納庫への扉らしい金属製の重いドアをゆっくりと開ける。
格納庫の2階部分に出たようだが、そこにも人はいない。

思ったよりも広い空間で、いくつか大きなものが鎮座をしているのが分かるが、暗くてよく分からない。シートをかぶせられていて、その形すら分からないが、ヴァリスほどの大きさのようだ。
それが、全てのヴァリスが余裕で収納できるくらいの格納庫内にいくつも置かれている。

よく見れば、彼女が出てきた場所の向こう側には明かりがついて、何か人影があるのが見える。

慌てて彼女は物音にまぎれてドアを閉め、伏せながら手すりの隙間から窺う。

大きなものの下にいるのは2、3人だろうか。

小さな明かりはあるが、よく見えない。

数人は白衣のようなものを着ていて、1人は身体のラインがよく出る服を着ているらしく、男性であることが分かる。

「・・・テストは・・・。そろそろ実・・・」

「いつでもいけ・・・。あんなや・・・」

静かに話している声と、何か活き込んでいるような若い声がする。やはり声量を落としているのか、断片的にしか聞えない。

しかし、若い声は随分と自信に満ちている気がする。動きがあるのはラインが出ている服の方で、そちらの声なのだろう。どうでもいいが、あまり仲良くしたくないタイプのような気がする。

「まああせるな、・・・整中で・・・」

咎めるように声が大きくなるが、やはり会話の内容が分からない。事前に来れるならば、あの位置に盗聴器でも仕掛けられたが、今回は仕方がないだろう。

やはりというか、どうもこの建物は怪しい。

目の前にあるシートを被ったものが確認できればいいのだが。

だが向こうにあるものにかぶせられたものが今から取り払われるようだ。

何人かがそれを引っ張ろうとしている。
つい身を乗り出さんばかりにそれを確認しようとする。

次の瞬間、鳴り響く音に身体が跳ねた。

まるで自分を咎めるかのように響くそれは、聞きなれた警告放送であつた。

赤いライトが空間を照らすとともに、避難を促す忠告が放送される。

他ならぬ何者でもない。

『ゲート』が開くのだ。

これを機に彼女はここを脱出することにする。

アラートが鳴った時点ではまだ怪物は出てきていない。

軽く走れば充分間に合うだろう。

話しこんでいた人間たちはなにやら揉めているようだ。

やはり男の方が白衣に談判をしているらしい。。

何をしたいのかよく分からないが、白衣の男たちはそれを何とか止めている。

シートの下は結局分からないが、仕方が無い。

次はもっと装備を持ってくるべきだ。

ここはただの隠し金庫、ということではないらしい。

ドアを開けてそこから去る彼女の背中に振ってきた声に、小さな確信を持つこととなった。

「今ここで使うべきだ！！あの忌々しい怪物に負けるわけがない！

！
」

「確かにそうだ、だが今はそのときではない！これは我々の・・・」

そこから先は残念ながら聞くことはできなかった。

第25話『前夜』

アリアが発ったその夜、カノンとレインは久方ぶりの再会をした。

「・・・よお、」

自分で言って、少し慣れ慣れしすぎたかとも思う。

「・・・どうも」

目の前にいる少年は、微かな声で返事をした。
だが、こちらを見ることはなかった。

“人型”が安置されている格納庫に、人の気配はない。
彼は1人、“人型”の袂に座っていた。
人よりも遥かに巨大なそれは、異形であるのにも関わらず人としての存在感を放っていて、不気味だった。

「久しぶり、だな。元気そうで何よりだ」
「貴方ですね」

おや、と思ったのは彼の表情のせいであった。
どこか、ふてくされているような。

そうしていると、レインの知っているカノンとよく似ている。

「部屋には戻らないのか」

「もう少ししたら戻ります。なので、お構いなく」

（これはややこしいことになっているのかもしれない）

レインは頭をかいて、発言を整理してみる。

「あー……。悪かったな、あの日、だまし討ちみたいにしちまっ
て」

「・・・別に、それは平気です。あの子の事情が早めに分かって却
って良かったと、思っています」

それはレインもとくに分かっていた。

少し残酷か、とも思った。

しかし、嫌でもあり続ける真実には少しでも理解させといたほうが
いい。

素直に、そう思った。

「何か、聞いておきたいこととか、あるか？」

「特にありません。大丈夫です」

「そうか・・・」

話題を探して出したものも潰されてしまった。

本気で困った。

話題がない、というよりも、目の前の少年がたった数日で様子を変
えてしまったことに戸惑っている、とでも言うのか。

数日前まで実に素直そうだった1人の少年は、どこか影を落とす
たような様子だった。

何かあった、とは聞いてはいない。

だが、目の前の少年は、快活そうな雰囲気もなくしてしまっていた。それどころか、顔色が悪い気がする。

「調子でも悪いのか？」

「別にどうってことはありません、」

ようやくこちらに向いた彼は、はっとした様子ですぐに謝罪をした。

「・・・すみません、」

「いや、悪い。俺も、しつこかったな」

彼は立ち上がり、“人型”を見上げる。

それを見て、レインは何か口にしようとしたが、思考のなかで霧散した。

「・・・最近、頭痛がするんです。それも酷いものが、突然」
「頭痛？」

そういえば、アリアとの通信で報告されていた気がする。医者には見てもらっているらしいが、突発的に起こり突如収まるもので、薬を飲んでどうこう、というものでもないらしい。

「体調からか？それとも、」

「一応脳も見てもらいましたがなんともありませんでした。それで気が立っているのかもしれませんが」

「俺といたときはそんなことはなかったよな」

「・・・デューティ少尉と会ったときでした、かね」

レインと別れた後、起こって来たことらしい。
劇的に悪いのならば大変だが、“人型”には乗れているわけだし、
そうでもないのか。

しかし、波のように襲ってくる痛み、というのは気分が悪いだろう。

「どういうときにくるんだ？睡眠不足とか、」

「睡眠不足・・・はあるかもしれませんが、それとはまた違うんですよ」

彼の顔には不安と、若干の苛立ちが見られる。

話しかけたのは不味かったのかもしれない。

「悪いな、そうとは知らずにしつこくして」

「いえ、今は大丈夫ですから・・・何か聞きたくてここに来たんですしょう？」

それもお見通しのようだ。

聞いてもいいものかとも思うが・・・。

「そうだな。単刀直入に言っておこうか」

レインはこちらを見下ろす“人型”を下から睨む。

「あの黒い機体、お前は知らないんだな？」

レインが遭遇した、マントを被ったかのような無機質で不気味な
外見をした機体。

ノアに攻撃を加え、今は行方が分からない。

王国全土を警戒しているが、はっきりとした情報は入らない。

分からないことを、聞いておきたい。

それが明日の牙になるであろうことならば、だ。

「・・・何度も言いましたが、知りません」

そして、彼の言葉は予想通りのものであった。

「悪い、一応確認をしておきたいだけなんだ。少しでも、情報が欲しいからな」

「そんなに危険なものなんでしょうか」

「ああ、攻撃をされてる。そして情報が無いのが1番痛い」

得体のしれない存在。それが、こちらへ攻撃を加えた。

その対象が人里だったりしたら、と考えるとなお恐ろしい。

そして、レインが見たあの残骸とつなげて考えると空寒いものがある。

知りたい、と思うのは当然だった。

「ノアさんは、あれをこいつと同じ人型かもしれない、と言っていました、何故そのような」

「こいつが居るからだ。前例がある以上、みんな興奮しちまっとう考えちまうのさ」

バカバカしいことこのうえないが、その気持ちが分かる。ある種の期待なのかもしれない。

慢性的な恐怖が覆うこの世界に、見たこともない機体が舞い降りた

となれば、それは興奮もするだろう。

「・・・そもそも人間のような形をしているからって、なんなんですか？意味が分からない」

彼は再び座り込み、頭を掻き毟る。

頭痛の恐れと、苛立ちが見える仕草だった。

「どんな形をしようか、ただの道具じゃないですか。そんな規律とか、こだわるのはおかしい。非効率だ」

本当に、どうしたのだろうか。

目の前の彼は、どこか別の誰かに話しかけているようだ。

「――それは俺にも分からないんだ。俺は開発者でもないし、ノアにだって分かっていないだろう」

「・・・それって本当にバカバカしくないですか。分からないで、しきたりに従うなんて」

彼の紫の瞳は、苛立ちと怒りに満ちていた。攻撃的な光を宿している。

なぜ、そんな目するのか、レインには分からない。触れてもいいのか、ということすら。

「そうだな、確かにバカバカしい」

レインは“人型”の装甲の一つ一つを見て考える。

「だけどな、ただの道具じゃない。兵器なんだよ」
紫の目が、ぱっとこちらを見た。

まるで、曇天の中の差し込む光を見るような、そんな目だった。

「兵器は人を守ること、傷つけることもできる。俺たちの世界ではそれが人の形をしている、というのは多分怖いことなんだ。“ヴァリス”だって、あの形が1番の譲歩さ」

「“ヴァリス”は、人型兵器なんですか？」

「一応、な。だがもっと長い名前がつく。まるで人であることを隠すかのような。1番の理由はな、あの形が1番人間に扱いやすいからなんだよ。お前の世界はどうか知らないが、手足を動かすイメージを作りやすい。そうして、あの巨人を動かすんだ」

人が、人を動かす。

それは操作をする、というよりも自分の身体を間接的に動かす、という感覚に近い。

空を飛ぶ、地を走る、武器を構える。

そうした動作をいっぺんにするためには普通の乗り物の形では難しかった。

そのために、人の形をとり、身体を動かすように鉄の塊を動かすのだ。

「人の形を取るようなことが禁じられている理由は知らないが、とにかく、あれがああいった形をしている理由の1つはそれだ。譲歩に譲歩を重ねた結果、とでもいうのか」

「・・・理解は、できます。こいつがこういう姿なもの、似たようなものですから」

しかし、この機体は傷みを操縦者へ映してしまう。
まるで乗る者への戒めのように。

それについては、レインは口には出さなかった。

「―――ありがとな。確認をしたかっただけなんだ。俺は部屋に戻るよ」

「そうですか・・・」

「何か聞きたいことはあるか？」

「あ、・・・いえ、ありません」

「そうか」

レインは構わずに戻ることにする。

彼の表情には、疲れも見えた。

自分の目的は果たせた。

無理して聞き出すこともない。

「お前も、早く寝ろよ。顔色が悪い」

「はあ・・・」

帰ってきた生返事に本当に大丈夫か、とも思う。

無理矢理つれて帰ろうかと思うが、この空気の重さをそこまで引きずることができるような気分でもない。

「もう少し、こいつを調整してから帰ります。だから、大丈夫です」

レインの迷いを感じ取ったのか、そんな言葉が返ってくる。

そう言われると、切り上げるしかなかった。

「そうか、程ほどにな」

「ええ、おやすみなさいレーヴェさん」

そう言つて、奥へ消えたカノン。

追う気力は、レインには存在していなかった。

願わくば今日は早く眠りたかった。

何故か異様な不安が彼を襲っていた。

残った違和感を払拭してしまうほどに。

その願いは叶い、レインは久方ぶりにベッドで眠ることはできた。
だが、そのまま朝まで眠ることは許されなかった。

第26話『夜明けの黒』

東の空は、徐々に明るくなってきた。

王国の東は、海に面している。

その周辺には人里がある様子はなく、不気味なまでに静寂を保っている。

そしてその上空には、音もなく歪みが広がっていた。

それを睨むように、フェニキアスは空中で待機している。

内部のカノンの心は、何故か穏やかであった。

ここ何日かまともに眠れた記憶がない。だがなぜか心地が良かった。

基地にいたレインは、こことは別の場所の『ゲート』の対処に向かっている。

夜中に突如現れた王国内の『ゲート』は2つ。

現在はいずれもローランとフェニキアスで対応をするしかない。

こちらへ自分が来たのは1番遠かったからだ。

とりあえず、機動性に関してはこちらの機体の方が数段上であることは、今までの戦いで勘付いていた。

薄暗い空が歪み、大きな穴が開く。

そこから現れるのは、最早見慣れた虫状のものだ。

どうやら、1番出現がしやすいのはああいった昆虫タイプらしい。

彼は跳躍し、一瞬でその群れへと飛び込んだ。

全身のフェザーフォルクを起動させ、生物には到底耐え切れない熱を光にして発射する。

手の平に当たる部分にあるパーツに動力から熱を伝導させ、幾度も群れに向かって発射し、群がる虫を手当たり次第叩き落す。

（同じだ、やはり）

度重なるデジャ・ヴのようなものを振り払いながら、腰に搭載されていたフレアビュートを起動させ、こちらに噛み付いてくる虫どもを蹴散らしながら、歪みの中心へと赴く。

この程度は敵ではなかった。もはやこのような怪物には慣れっこで、こいつらにこれが倒せるわけがないであろうことを、彼は知っていた。

相手の思考は極めて単純だ。

捕食、捕食、そして捕食。

それだけを求めて、目の前の金属の身体に剣のような牙を立ててくる。

そういった愚鈍さを、カノンは哀れにも思う。

（お前らを倒して、何になるんだ？）

カノンはここ最近抱える焦燥を、フェニキアスのエネルギー波に変え、溢れるほどの虫どもを消し飛ばす。同じタイプのものばかりで、変わり映えなどない。だが、分かっていた。

学習をしたのか、虫どもは隊列のようなものを組んでフェニキアスに踊りかかる。

カノンの思考はあくまで冷静だった。

それは心の平坦さからくるものではない。

ただ一点に、集中をする。

この夥しい数をどうにかするための、一点に。
フェニキアスは拳を振り被り、そして

「こそこそ隠れて、何がしたいってんだ！！！！」

そのまま、振り向きざまにそれを叩き込んだ。

その衝撃と、感情の破裂とともに巻き起こるエネルギー波に、周囲にいた虫たちは瞬時に霧散した。

直撃を避けても損傷を受け、海に転落していくものもいる。
だが、そんなものはカノンの視界にも入らない。

ただ、目の前で拳を腕で受け止める、漆黒の機体のみだ。

フェニキアスはそのままの体勢で足を叩き込む。
確かな金属音とともに、その黒は弾き飛ばされるが、装甲には傷一つつけられていない。

口の中で舌打ちをしながら、カノンは険しい表情でビュートを腰にマウントする。

この武装はダメージを与えるのには役には立つ。

だがそのダメージがそもそも通らない相手には全く意味がない。見た目だけの無駄な装備である、とカノンは常々思っていた。ただ、ほかの国の機体と差別化をしたいがための武装だ。そんなことは、今現在には関係がないが。

目の前を静かに浮かぶそいつは、確かに奇妙な既視感を引き起こす。

全てが、黒い装甲で統一されたその身体は、生物ではない。無機物で構成された機械だった。

身体そのものである、というよりは、何かの形をしたものを装甲で覆い隠したというのが正しいだろう。

頭の部分も覆いつくされ、カメラアイも見えることはない。

見覚えなどあるはずがない。どう見ても堅気の目的で使われるような外見でもないからだ。

「お前の名前は？」

回線を最大に開き、外部音声まで使用して、黒に話しかける。

応答はない。

身じろぎもしなかった。

「何のために、ここにいるんだ？この世界で一体何をやっている？」

何も、ない。

構わず続ける。

「何で、ここに来た？」

応答はない。

「何が、目的だ？————どうして、こんな世界にいるんだ」

それは、目の前のものに話しかけるものではなかった。
カノン自身も、分かっていた。

————— 応えない、コイツが悪いんだ。

「どうしてここにいる、どうして、帰ることができない！！！」

カノンは腹の底から怒鳴ると、再び黒に向かって躍りかかる。

今度は、当たる。

だがダメージが通ったという実感が、ない。

（何だ？）

飛びのこうとした、だができない。

目の前の黒に拳を受け止められてしまっているからだ。
フェニキアスと、同じような機械の手で。

バキリ、という音がして、もう片方の手も出現をする。
その手が開かれる。

その光が視界を覆った瞬間、カノンは衝撃とともに弾き飛ばされる。
ロックアラートが鳴り響き、カノンは空中を踊る。
それをなぞるように、赤い光が追いかける。

見覚えのある光。

自分の世界にある兵器の光だ。

だが、それはカノンに妙な違和感を生じさせる。

(どの国のものだ?)

それはこの世界のどの国でもない。
カノンが、かつて居た世界のことだ。

光線兵器ならいくらでも存在した。
だが、自分と同じ機体に搭載をした国なんて知らない。
そもそもその色の光は、自分の国特有のものであるはずだ。

かつてどうしても思い出せない、と少女に語った記憶の奔流を読

みながらカノンは黒に集中をする。
奇妙な安堵、そして不安。何より疑う余地もない純粹な怒りのようなものが彼の胸中を支配する。

バキリ、バキリという音がする。

黒は動くとともに、装甲が剥がれ、まるで動きやすくしようとしているかのようだった。

その光を生み出す両手と、大きく動く足が、その正体の一端を示している。

だが、それに対しカノンは何の感慨も抱かない。

「お前はどこの国の者だ!?!」

応えるはずがないことを、カノンは怒鳴り続ける。

「俺は聖レザール王国空軍少尉、ゼルカノン・リゲル・アルデバランだ!! この機体を見ればバカでも知っている、クソったれの聖戦士さまだ!! この攻撃は国際法第7条で禁止されている行為であることはそこらへんのジャーナルでも見れば誰でも知っているだろう? 知らないとしたら、お前は誰だ!?! 応えろ!?!」

この世界で彼を知る者なら全く意味が分からない言葉を並べ立てながら、彼は少しずつ黒に近付く。

黒は慌てる様子もない。

ただ、見えない目でこちらを見据えている。

まるで、全てを分かっているかのよう。

「質問に答えないようなら、それでもいい！」

フェニキアスは、真下にいる黒に刃を打ち下ろすように、踵を振り上げる。

「対テロリスト法案なり何なりを使って、お前を処分するまでだ！！！」

相手は、動くこともなかった。
構わずカノンは落下する。

だが、その直前で真下を光が走り、背後から低い声が回線に飛び込んできた。

《アルデバラン少尉、離れろ！！》

音声を最大に設定していた通信から、怒鳴り声が飛び込んでくる。
冷や水を浴びせられるような心地だったが、すぐにそれは沸騰した。

「は、どうして！」

《いいから離れるんだ『ゲート』からまた出てくる！！》

振り返ると、存在を忘れていた歪みが大きく開いていた。
そのなかにいるものは、とても大きいことが分かる。

しかし鉱石のような光が2対、あることしか分からなかった。

フェニキアスに小さな衝撃が走る。

黒が光を当てたらしい。

その隙について、黒は歪みのすぐ傍に待機する。

まるで、その2対の目を従えるかのようにだった。

「・・・ただのテロリストでもないってわけか」

カノンは一目見たときから、それを怪物の一種として認識したことはなかった。

見覚えのある、その感覚。

苛立ちと、空虚な怒り。

生まれたときから相手にしてきた、どうしようもない輩であるとうこと。

ただし、それは一筋縄ではいかなさそうだった。

狙撃の方向にいらるであろうこの世界での仲間を思考の隅に追いや
り、カノンはただ、再び黒へとフェニキアスの拳を構えた。

第27話『遠い翼』

レインはこの事態をどうとらえていいかわからなかった。

ただ、目の前の敵をローランで撃ち落とす。その隙をついて、背後から牙をむき出しにして踊りかかる敵がいる。それを横に回避、その背後に銃撃を浴びせる。

予想以上の敵の数であった。

黒い影とともに出現した『ゲート』は、この数の敵を吐き出したあと消滅していた。

まるで、出すものは出し切ったといわんばかりの様相であった。

彼は隙あらば襲いかかるそれらを警戒しつつ、意識をローランの上空へと向かわせる。

そこには、赤と黒の機影があった。

白んできた空を、まるで鳥のように自在に飛び回っている。時折、激しく撃ち合う音がする。

赤の人型が拳を振るい、黒い影はそれを受け止め、人型の脇腹に蹴りを入れる。

まるで軍での見た体術の試合のようである。だが、そこには張り裂けんばかりの殺意が見え隠れをする。大型の機械の固まりが、拳で殴りあう。まるで、冗談のような光景であった。

「アルデバラン、アルデバラン聞こえるか!!」

必死に回線を合わせ、レインは操縦室の中から呼びかける。応答はない。つながっているはずで、聞こえているはずなのに、全く、返事がない。それがなぜだか、とても恐ろしいことに感じられた。

レインが向かった『ゲート』は目の前で閉じてしまった。ほかに敵もなく、周囲に隠れているのか、と索敵を始める彼の元に届いたのは、黒い影が出現したという報であった。

はめられた、と彼は本能で感じていた。

こちらの『ゲート』は罠であると気づいた彼は、機体のすべてのブースターを全開にしてアルデバランの元へとやってきた。

その道中で彼はアルデバランの声を拾っていた。

それは、訳のわからない言葉ばかりであった。

そして、たどり着いたと思うやいなや、彼は赤い人型と、黒い影の殴りあいを目の当たりにし、あつと言う間に大型の敵に囲まれていた。

それが全てであった。

現状もつかめないというのに、この状況を打破するためにはどうしたらいいというのか。

「アルデバラン！どうした、何があった！！」

レインの思考は十分に混乱していた。

彼が受けた指令を、アルデバランに伝えたい。ただそれだけだった。

しかし口からでるのは、懇願にも似た呼びかけばかり。
この状況に、似つかわしいわけがなかった。

黒い影に向かって攻撃をしようと再三試すが、動揺している彼に狙いが定まるはずがない。ただ、自分の体を守るだけの行動を起こしているのは歴戦の兵士たる所以であった。しかし、その事実はいんに何の救いも与えない。

「アルデバラン!! おい、頼む聞いてくれ!!」

指令を伝えなくては、目的はその目の前の黒だというのに。

「落ち着け、何があった、教えてくれ!!」

彼の様子はここにくるまでに掴んでいる。動揺をしている、それだけだ。今の自分よりもずっと。

「俺だ、レインだ!! ここにいる!! 返事をしてくれ!!」

だから、一人でどこかへ行くな。
頼むから、

「アルデバラン!! —————カノ」

「うるさい！……！！！」

通信機から、レインに向かって張り裂けんばかりの声が流れ込んできた。

「あんたはいつもいつも分かったような顔をする！！もううんざりだ！……！！！」

音だけの通信で、顔は見えない。
だが、レインには見えた。

どうしようもなく、怒りに満ちた表情が。

人型の顔がこちらに向き、青いカメラアイが、燃えているように見える。

「俺は俺だ！！あんたには関係がない！！……とつとと国に帰って古くて腐った家でも守ってろよ！！……！！！」

そのとき、黒い影が人型から離れた。

高く、高く舞い上がり、あっという間に小さくなる。

人型がそれに反応をし、見上げる前に、黒い影の背中から、何かが生える。

ぼろぼろになった虫の羽を思わせるそれは、翼だった。

そこから、何か光が集まり、そして、放射される。

アラートもならない、静寂の中。

ローランの周囲はその光に包まれた。

気づくと、レインの意識は暗闇にあった。

暗闇、の中を意識が飛んでいる。周囲を、星のような僅かな光が矢のように通り過ぎていく。前に、光がある。

そこに飛び込むと、周囲の状況が変わる。

彼の意識は、何かの建物を見下ろしている。

白い壁、青い屋根。屋敷とっていいくらい広く、大きいものだ。周囲には緑と花に包まれた庭園が、ある。

次に彼の意識はその庭園に飛ぶ。

噴水が設けられた泉の側に、誰かが立っている。

腰までの、長い髪。折れそうなくらい細い体つきだ。

なぜだか、それがとても儂いものを感じられる。

「————ここは、静かね」

鈴がなるような、声が聞こえる。水のように、すずやかで穏やかな細い声。女が、振り向いた。

その白い頬に、何かが流れているのが見えた。

「ね、約束して」

小さな唇が言葉を紡いだ。

それに対し、どうしようもなく胸が熱くなる。

レインは、腕をのばして、細い体を引き寄せる。

そして、

重く、激しい音がした。

レインが重い瞼を開けると、目の前のモニターが周囲の状況を映し出す。

「え」

そこには、赤い背中があった。

寄りかかるその機体を、体制を保ちながらとっさに受け止める。力なく体を預けるその鋼鉄の体は、どう見ても先ほどまで打ち合っていた赤い人型だ。

その瞬間、彼は今までの状況を思い出す。
上空の黒い影を伺った。

それは、すっかり白くなった空を背に確かに存在をしている。

何を、するでもなしに両腕を広げると、その空に消えた。
辺りには、敵の反応もなく。

ただ、呆然とするレインと、動かない人型が残されていた。

第28話『眠る秘密』

目の前が、赤く燃えていた。

頬を熱が焼く。もう慣れたその温度の上を、冷たいものが流れている。

それを拭うことすらしない。

もう、それすらも慣れてしまったからだ。

街が、燃えている。

その中で、彼は立ち尽くしている。

建物からは炎が噴き出し、空は黒煙が覆う。

昼なのか、夜なのかもわからない。

悲鳴が、聞こえた。

彼はその方向を見る。

位置をとらえた瞬間、無機質なばらばらという音が響くと途絶えてしまった。

彼の目は、炎と煙の中のそれをとらえて見せる。

人影だ。

建物と比べても、頭一つ大きい。

赤い目のような何かが光るのが見えた。

その瞬間彼はそこに駈け出していた。

大地を蹴り、軽やかに進む体は、あつという間にそれに肉薄する。

彼は走りながらこぶしを振り上げる。

それは、鉄の指で固められた鋼鉄の拳であった。

それを目の前にいた鉄の塊に叩き込む。

手足を持った、鋼鉄の体。そのの、腹にあたる部分を、狙う。確かな手ごたえがあり、装甲が歪んだ。

手ごたえは、ある。手加減をしたのだ、と彼は認識していた。続いて、2発目を叩き込む。今度は内部へと衝撃を与えた。

拳を引くと、装甲の隙間から何かが噴き出した。

それを見た瞬間、彼は暗い喜びに満ちていくのがわかる。

手加減のない3発目を叩き込むとそれは衝撃に耐えきれず地面に倒れた。

彼はその腹部を踏み抜き、息の根を止めたことを確信する。

空を、見上げる。

黒煙に満ちた、空。

頬が焼かれる感触がする。

そこに流れる冷たいものを、今度は気づかないふりをした。

ノアは深い眠りから目を覚ました。

しばらく、木製の天井を眺め、ここが軍の本部ではないことを認識する。

手が動かない。足もだ。

しばらく、現実かどうかをそのまま確かめる。

思わず、大声をあげそうになった、ときであった。

「にゃ」

短い鳴き声が、下から聞こえた。

視線を動かすと、胸の上に見慣れた灰色の猫が鎮座している。

「にゃ」

そういつてしっぽを動かす猫から現実が広がっていく。

見慣れた寝室で、横たわる自分。

そして、両手と両足には、昨日さんざん遊んでやった甥っ子と姪っ子が眠っていた。

「よく眠っていたみたいだね」

皮肉のかけらもなく、母親はそう言って起きてきたノアを出迎えた。

リビングには、母親と姉によって朝食の準備がなされていた。まだ寝ぼけたままのノアは、そのテーブルにつくと、ようやくここが自宅であることを思い出した。

王都にある自宅には、軍の任務があるときでも寄ることはない。

それは成人した男にとってはふつうのことであると思っているし、同僚だってそんな感じだ。

しかし、休日にはこうして帰宅しないと心配されるのが常だ。

今回は長期休暇だったので、すっかり自分の感覚も自宅モードになろうとしていた。

「まあ、な。明日で最後だから、今日は帰る準備をするよ」

「あら、もう帰るの？」

ノアの前にパンを用意してくれた母親は残念そうだ。仕方のないことであるが、そういわれると余計にこちらもしんがつかうてしまふ。

「任務もないでしょう？もつと延ばしてくれたいのに」

「このくらいがちょうどいいのよ母さん」

別れをさつそく惜しんでくれている母親を、一刀両断するように流しに立つ姉は言い放つ。

「それにあんまり名残を惜しんでやるとこの子帰らなくなるよ」

「いや、帰らないとまずいから」

姉ニイナの顔には何の表情もない。

基本的に無表情で何事にも淡々としている。

無口であつた父親に雰囲気似ており、ノアは若干彼女が苦手に感じる時がある。

「ノア兄ちゃん帰っちゃうの？」

「帰っちゃう？」

いつのまにか、身支度を済ませた姪と甥の二人がノアの椅子の両端から顔を出す。

双子の姉弟である2人は、それぞれがノアの両腕にしがみついて離そうとしなかつた。

「いや、明日だよ。今日は準備をするから遊べない」

「えーずっと？」

「ずっと？」

姉のリルケがいった言葉に、弟のケルニが続く。

今年5歳になるこの2人は、姉の子供であった。

普段は商人である父の家で暮らしているが、彼が出稼ぎに出るとニイナと共に実家に来ている。

ちようどそれがノアの休暇と重なり、普段は母一人が暮らす実家は、久しぶりに家族がそろうにぎやかな雰囲気になった。

「たぶんな。でも手が空いたら相手はしてやるし、明日も昼食べてから出るから、まだ相手はしてやるよ」

「そっかー!」

「そっか!」

「そうなの、だからノア兄ちゃんの邪魔はしちゃいけないよ」

やんちゃざかりの2人を、姉はうまくいなし双子はおとなしく席につく。

この休暇では目的はあったが、この双子の相手ばかりしていた気がする。

姉が2人をコントロールをしてくれるので、手を取られ続けるということはなかったが。

だが自分にやけになつてくれるこの双子の相手をする事で、難しいことから逃げられた気がする。

姉も母も、それをわかっているのか、そんなノアに何かを言うことはなかった。

朝食を終えると、姉一家はどこかに行くらしかった。

一人きりの母に代わり、近くに買いものに行くらしい。

母は近年足を悪くしていて、外に出かけることはあまりなくなったらしい。

だから、一人用事をするノアとともに留守番ということだそうだ。

姉によると、母は誰かが家にいる空気が好きらしい。

忙しくても、ノアが家にいるということは昔を思い出すんだそうだし、いまいちピンとこなかったが、彼は彼で用事を片付けることにする。

ノアの自宅は2階建てだ。

かつてのノアとニイナの部屋は2階にあり、1階にはリビングや夫婦の部屋がある。

そして、父親の仕事部屋もだ。

彼はドアに手をかけ、そこに入る。

使う人間がいなくなったその部屋は、何か死んだような静けさを含んだ匂いがする。

おそらくこの家で一番広い部屋であるそこには、入るやいなや部屋に壁に敷き詰められた本棚が飛び込んでくる。そしてドアの正面にある机にも本の山と、何かを書き記したノートなどが散在しており、部屋を使っていた人間のライフスタイルのようなものがいっぺんに分かる。

ここは、ノアの父が生前使用していた書斎だった。

ここに設計図などを持ち帰り、寝る間も家族と会う時間を惜しんで研究に没頭していた。

ため息をつくとき、ノアはドアを閉めて、部屋に入る。

椅子に座り、ここ何日かで調べたノート類を雑然とめくりながら眺める。

父は、“ヴァリス”の基礎を打ち立てた開発者だった。

もともと技術者であった彼は、怪物に対抗する兵器の開発チームに選ばれたらしい。

そしてほぼ単独で、彼は画期的な兵器を作り上げた。

しかしそれが完成する直前に、亡くなってしまった。

ノアは息を吐いて、椅子に背を預けながらノートに目を通す。

ここに入ったことなど数えるほどだ。

いつもここにいる父の背中しか覚えがない。

たまに入ることもあったが、彼はノアを余所になにかに没頭していた。

（ただ、追い出されることもなかったな）

彼は思いかえす。

母親は最近父に似てきた、と嬉しそうに言う。

だが、それが喜ぶことなのかも知彼にはわからない。

休暇を取ったのは、頭を整理するため。

そして、ヴァリスの何か新しい武器でも作るヒントがここにはないかどうかだった。

ここにある資料は兵器開発だけでなく、それに関係するものばかりだ。

目を通すことで、何か新しいことがわかるんじゃないか、と思ったが。

彼はここに来てから、甥と姪の世話に追われる、だけでなく、父の直筆の資料にばかり目を奪われていた。

研究者として、自分のすべてをぶつけたもの。

それを、技術畑の自分が惹かれるのは当然であったかもしれない。

見ると、父は苦心して兵器を作り上げたのがよくわかる。

必死に考えぬいて、世界を救う術を考えようとした。

だが、それはある日突然様変わりをする。

本当に突然、人に似た兵器を考案をし、そこから芋づる式にその兵器や役割を考えている。

まるで天啓を得たかのようなのである。

彼は抜けているノートがないかどうかを探してみたが、これ以外のものは見つからない。

軍の方にあるのだろうか？

だとしたらそれはとくに廃棄されている可能性が高い。

まだ幼い自分にそれらを把握することはできず、母が全て確認してから引き取ったはずだ。

それを今確認する術など、ない。

「結局、何もしなか」

ナギノが有能な開発者だからといって、過去の人間であることに変わりはない。

技術は常に日進月歩だ。ここにある資料も古くなってしまっている可能性もある。

技術者として勉強にはなったが、無駄足だったようだ。

戦いも、軍のことも忘れた数日の休暇は大変有意義なものだった。軍の方にいたときは、大変夢見が悪い状態が続いていたが、今回はそうでもなかった。

しかし、今朝はどうにもおかしかった。

見る夢は断片では残るものの、起きた時は不思議と忘れてしまう。今日も何か嫌なものを見た気がするが、咽喉を過ぎてしまったようにすっきりとしている。

しかし何度見ても、ノアに嫌なものばかりを焼きつけていくのは同

じなのだ。

リルケとケルニと共に眠ることで、それから逃れられたと思っていたが、軍に戻ることで緊張しているのだろうか？

（明日の準備、か）

「…邪魔しちまったな」

彼は一人つぶやくと、席を離れる。

母が一人で暮らす家で、部屋を作る必要はないだろうが、ここもいずれは整理したほうがいいだろう。

母がここを掃除したがないのは知っている。だが、いつまでも残しておくというのも、ノアには何か

思うものもある。勝手であることは承知であるが。

だが、立ち上がろうとしてノアの足元から、灰色の毛並みをした何かが机に這い上がってきた。

「うわ！」

思わず声を上げてひっくり返りそうになるが、円い緑の目と視線が合い、それが馴染みのある飼い猫であることを思い出す。

「なんだお前、こんなどこに何しにきたんだ」

手をまっすぐにしながら机に腰を落ち着けると、飼い猫は何を考えているのかわからない目でノアを見る。

灰色のよく太ったこの猫は、姉の婚家に住む猫である。しかし家は商売でなかなか忙しく、たまに近くにあるこの実家に来ているらしい。今回も、いつも一緒にいる双子たちが帰るので勝手についてきたそう。

夜は母親の枕元で眠っているようだが、今朝のようにノアの胸にいるのは初めてだった。

「もう出るからどけよ。片付けられないだろ」

通じないとわかっていて話しかけながら、ノアは猫にを抱き上げようとする。

しかし猫はするりとそれを避け、ノートやメモが散らばっていない表面を直接前足でかいている。

爪をといでいるのか、と思ったが爪を立てているわけでもない。

「にゃ」

特徴的な短い鳴き声を上げ、助けを求めるかのようにノアを見上げる。

「そこには何もないぞ」

それを分からせるように、彼は軽く表面をたたいた。

だが、そこで彼に違和感が生じる。もう一度叩く。

固いものを叩く音。しかし、それはどこからっぽだ。

ノアは身を引いてみると、机の表面の間に微妙な線が入っているのが見えた。

指で軽くひっかけてみると、それは開くようだった。

本とノートが散らばるのにもかかわらず、彼は机の表面のものを腕で床にたたき落とした。

猫は抗議の声を上げてノアの足元に降りたが、彼の意識は机の表面と思われた薄い板に吸い込まれている。

指と落ちていた定規をつかい、それを持ち上げる。上に何もないそれは抵抗もなく開いた。

そこにあっただのは、小さな空間だった。

引出し、というものではないだろう。

そこに、大きな袋が入れられている、

口を絞るタイプの布の袋だった。

ノアは埃にも構わず、それを手に取る。

彼の両手で持てるくらいのそれは、確かな重さを持っている。
誘われるように、彼はその袋に手をかけた。

「ノア」

不意に聞こえてきた声に、ノアは悲鳴をあげそうになる。

ドアの方を向くと、そこには母が立っていた。

「ど、どうしたの」

そういつて机を閉める。袋は何とか机の上に置き、体で隠した。

母は、ここ数日の快活な様子は消えうせ、茫然とした様子だった。

「軍の人が、来たの」

どこか他人事のような声は、ノアには図ることのできない感情が
こめられているのが、分かった。

「ノアに、来てほしいんだって」

第29話『過去への扉』

目を開けると、そこは暗闇だった。

体を預ける座席の感触で、ここが専用機のコックピットであることを思い出す。

目の前の闇に指で触れる。

すると、波紋のように光が広がり、空中モニターで機体の様子を知らせるウィンドウが次々と開いた。

全てが問題ないということ伝えていく。

肘掛にあるアタッチメントをそれぞれの手で覆うように握ると、座席と着用しているスーツが次々と同期をしていく。

軽い痛みとともに神経接続を終えると同時に、視界が広がる。

自分よりもずっと大きな体。それに感覚が広がっていく。

機体と五感が同期されたのだ。

機体のカメラアイと、自分の目でそこが見慣れた演習場であることを知る。

目の前は確かにコックピットの外を見ているが、もう一つの感覚で内部のウィンドウを確認している。

体が二つになったような感覚にはなかなか慣れなかったが、慣れればこれほどスムーズに動く「兵器」もない。

同期をすると同時に、目の前にいる機体に気が付いた。

海のように青い装甲が優美に輝く、頭部に生えた一本角が印象的な機体。

ようやく、今が何をしているときなのかを思い出すと、機体を構える。

声を上げようとする。

だが、同時に胸の中までとんでもない冷たさに浸食され息ができない。

それを後目に哄笑は、次の瞬間確かな言葉を伝えてきた。

「私は、殺されルために生まれテきた！！だから、今度はあんたを殺すために生きるんだわ！！」

カノンは、そこでようやく目を覚ました。

目の前を振り払うように飛び起きると、見たこともない石の壁が広がっていた。

埃くさい空気を吸い込みながら、状況が全く把握できないでいた。

「気が付いたか」

反射的に、声がした方を振り向く。

そこには、見慣れないスーツを着たレインがたき火の前で座っていた。

「なんとか、墜落はせずにすんでな。森の中に機体を隠して、近くの遺跡に逃げ込んだんだ」

薄暗い石づくりの建物の中で、たき火だけがただ揺らめいて周囲を照らす。

炎を見つめるレインの目はただ穏やかだった。

ただ、表情には疲れが垣間見えた。

「・・・遺跡？」

「ああ、昔作られた星落教の神殿だ。とはいっても風化が激しくてほとんど形は残っちゃいないんだがな。以前からヴァリスで来たときに見かけていたんだ」

カノンは立ちあがり、元は神殿であつたらしいその空間は見渡す。天井がかなり高く、周囲には柱などが崩れているものの、かなり広い空間のようだ。天窓のようなものがいくつかあるが、周囲が森ということからあまり明るくはない。柱には見事な装飾が見受けられるが、風化によって見る影はなかった。

「今の、状況は？」

何を話したらいいのかわからなくて、とりあえず気になったことを聞いてみる。

レインは炎を見つめたまま、淡々と話した。

「一応信号は出している。休暇中のノアが連れ戻されるだろうから、少し時間はかかるだろうな」

奇妙な沈黙が流れる。

こんなことは久しぶりだったが、大変居心地が悪い。だが、それもレインの「座れよ」という一言で終わった。

「体調は大丈夫なのか？」

「は、はいまあ」

我ながら適当な返事をしつつ、カノンは膝を抱える。

何を、話したらいのか。というかこうして穏やかな気分でこの人と話すのは久しぶりな気がする。

ここ数日、どころではない期間自分は他人どころではなかったのだから。

「あの影は消えたよ」

自分が抱えていた疑問に、カノンははっとして顔を上げる。

「お前が俺を庇ってくれたあと、消えた。虫どももな」

「そう、ですか、」

考えてもいいのか、どうなのかわからない。今は何も考えたくは、ない。

「少し、聞いてもいいか？」

「はい、なんでしようか」

「レーヴェって誰だ」

言葉に詰まってしまったカノンを、目の前の青年はどこか不思議そうに見た。

「なんだ、知らないのか」

「いえ、その、」

なぜその名前を知っているのか。

さっぱり事態がつかめないカノンに対し、彼は苦笑する。

どこか、気の抜けたような様子であった。

「昨日の夜、お前が俺をそう呼んだんだ。やっぱり無意識だったか」

そう言われてもさっぱりだった。

迂闊だったのかもしれない。

しかし、現実で考えてみれば、大した問題ではないのかもしれない。別に「仲間」の名前くらいなら機密でもなんでもないのだから。

「・・・すみません、知り合いと間違えました」

「そうか、知り合いの名前、か」

レインはどこかおかしかった。

なぜだか説教を待っているような居心地の悪さを感じていた。

早く救助が来ないか、早く帰りたい。一瞬でもそう思ってしまった。胸の奥に重たいものを感じる。

なんだかとてもない失礼を働いたような気がするものの、妙にすつきりとした感覚とともによく思い出せない。

そんなカノンを余所に、レインは意を決したように青い目でこちらを見た。

「その知り合いのこと、聞いていいか？」

「は？」

思わずそんな声が出た。

だが、レインの様子は冗談など感じられない。

初めて見る真剣な表情だった。客人に対するものでもなく、余所行きの態度でもない。

「お前が、よければ。お前の居た国のこと、お前の居た世界のこともだ。覚えている範囲でいい。思い出せる範囲でいいんだ。それを聞かせてはくれないだろうか」

「ちょ、ちょっとちょっと」

あまりにも唐突な発案に、カノンはたき火に身を乗り出しそうになった。

あわてて飛び退くが、レインは氣遣いつつも、取り消す様子もない。

「何か、メリットでもあるんですか？俺、僕は一介の軍人であって、ネメシスシリーズのことなんて、」

「ネメシス？それがあの人型の名前か？」

しまった、と思ったが遅かった。とっさに出た言葉だったが、それはカノンの記憶から出たものだと思っても気づいた。一人で考えるだけでは決して思い出せなかったというのに。

「悪い、急かしてしまったな」

レインはそう言うのと、少し考えるそぶりを見せる。

よくわからないが、考えているのか、迷っているのかもわからなかった。

「ここ最近、お前荒れてたからな」

レインは再び火に視線を落とす。

青い瞳に、赤い炎が揺れている。

「やっぱりなんかさびしいんだろうな、と気づいたんだ。お前にとっては知らない場所だし、帰る手だてもない。すんなり協力してくれたが、ここではたった一人で、知り合いも何もいないんだから」「寂しい？」

そういわれてもピンとこない。
カノンに係累などは存在しない。

“普通の人”が持つものを、彼は持っていない。

だから、絶対に帰りたいというか、そういった確固たるのを自分は感じていないことに気づく。

自分が、あの機体のパイロットでもなければ別に帰る必要もない。そういう存在なのだ、自分は。

だが、責任だけではないものが胸の中に去来していたことにも気づいていた。

「まあ、細かいことはこの際気にしない。大雑把でもいいから、話が聞きたいんだ。なんなら俺も聞きたいことを話してもいい」

最後の言葉に、カノンは興味を示した。

目の前の彼は、どこか開き直っている雰囲気がある。

この世界のことは、ルブルー大佐と、あのアリアという少女に聞くことができた。

だが、まだ聞きたいことが彼にはある。

それは、大佐にも少女にも聞くことができなかったもの。

そして、アリアと出会った日から、この男に抱いた疑念を消すことが出来るかもしれない。

「独り言でもいいぜ。俺は返事をしないから。勿論、ここでのことは他言無用だ。約束をしよう」

「それは…」

カノンは炎に視線を落とす。

ただ燃え盛るそれは、とても眩しい。

その光が、記憶の底すら照らし、カノンの中にある何かを燃やしてくれるような気がした。

「名前はレーヴェルトレーゲン・ディオニソスⅡコーデリア」
「は？」

「先ほどの質問、です。あなたと間違えたというレーヴェという人間の名前。彼は、聖ロザリナ王国の騎士でした」
「

息を止め、そして吐く。

そうすることで、記憶を整理する。

誰かに話して、分かるように。

そして自分の中ではじめをつけるように。

「そして僕と同じ、仲間でした。」

ぱちり、と火が弾ける音がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6090n/>

流星の行方

2011年10月10日20時56分発行